
うちはの凡才 ～立志伝～

たこわさび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちはの凡才　　～立志伝～

【Nコード】

N7545U

【作者名】

たこわさび

【あらすじ】

もしもNARUTOのサスケさんが、原作よりも忍者としての才能に恵まれず、愛社精神と郷土愛はそれなりに強いが忍者としての才能がアレなため性格が丸くなっており、一族の復興と『兄ちゃん』をなんとかしようとする、原作とは違う物語。

父さん

父さんは立派な人だ。

木の葉の里には大勢の忍者が住んでいる。その里の治安を守っているのが、うちは一族の警務隊。

何を隠そう、父さんはその警務部隊の隊長なんだ。

「うちは一族」と言うだけあって、俺の住んでる地域には「うちは」の名字の人がたくさんいる。ていうか、みんな「うちは」だ。

住んでる人の名字がみんな「うちは」なもんだから、一族の間で人の名前を言うときは、ある呼び方を使って分かり易いようにしている。

同名の人がいたりすると、一族の中で混乱を招いてしまう恐れがあるからね。

そのある呼び方とは、その人が住んでる場所や、やっている仕事を名前の前に付けるっていう呼び方。

例えば、「うちは〇×」さんが煎餅屋さんだったら、「煎餅屋の〇×」

崖の上に家があったら、「崖の上の〇×」っていう感じだ。

俺の場合、父さんが警務部隊の隊長だから「隊長のサスケ」って呼ばれる。

俺自身は隊長でも何でもないんだけど、この呼び方で呼ばれると少しだけ偉くなったような気がするんだ。

密かに自慢に思っている事のひとつ。言葉って不思議だね。

ちなみに父さんの名前は「フガク」っていう名前で、あんまりいい名前だから一族の人達からは普通に「フガクさん、フガクさん」って呼ばれてる。

だけど、たまに「隊長のフガク、フガク隊長」って呼ばれたりすると、顔には表さないけど嬉しそうな感じになってる。

このように、父さんが嬉しそうな感じになるのは滅多にないから、昔一回だけ「父さん」じゃなくて「隊長」と言った事があった。

「隊長！」

「……。」

「隊長！牛乳とってよ。」

「……。」

父さんはしばらく沈黙して、牛乳をとってくれたあと、

「…父さんと呼びなさい。」

と言って、書斎に引っ込んで行った。

怒られるかな？って思ったけど、まんざらでもなさそうな感じがしてた。

父さんの事を「隊長」と呼んだのは、後にも先にもこの時だけだ。

このように、父さんは無駄な事はしないし喋らない。表情も顔にぜんぜん出ない。

なので、父さんが怒っているか喜んでるかを知りたい時は、表情ではなく行動や仕草に注目する。

父さんは基本ポーカーフェイスで表情には出ないんだけど、行動や

仕草にはよく出たりするので、今何を考えているのかが分かり易い
と言える分かり易い。

怒っている時は動かなくなる。逆に喜んでいる時は活動的になるんだ。

新聞を読んでいる時の紙をめくるスピードに、違いがよく出る。

怒っていたり機嫌が悪い時は、一枚をめくるのに蠅が止まるんじゃないかというくらい、もの凄くゆっくりなんだ。

機嫌が良い時は怒っている時とは正反対に、触ったら切れるんじゃないかというくらい、早業でめくる。

どんなに怒っていても、家族や物に当たるなんて事は一度もなかったので、とてもいい父さんだったと思う。

俺が言うことを聞かなかったりした時は、よく怒られたけど。

俺の5つ上にイタチって言う兄ちゃんがいる。

兄ちゃんは凄い優秀なので、父さんは

「さすが俺の息子だ。」

なんてよく言ってる。

父さんも凄い忍んだけど、兄ちゃんはそれに輪をかけて凄いつて言うか天才的な忍だ。

父さんには悪いんだけど、完全にトンビが鷹を産んでる状態だと思う。

兄ちゃんを誉めるたびに「父さんもよく言うよ」

っていつも思ってるんだけど、口に出したら色々大変そうなので、

絶対に言わない。

俺も父さんの息子だから、例の「さすが俺の〜」って言ってもらいたくて、色々頑張ってはみたんだ。

でも、はっきり言って俺は『忍者』としてはパツとしない。

できない事はないんだけど、ズバ抜けて出来るなんて事は何一つ無いんだ。

上中下で言えば、中の下くらい。里でエリートと呼ばれる『うちは一族』を引き合いに出されて父さんによく説教されてるんだけど、できないものはできないんだから仕方ない。

でも、できないからといって、ふてくされたりはしなかった。なんとか父さんに誉めてもらおうと、今現在も忍者の修行を頑張ってる最中だ。そんなとある日、事件と言ったらおおげさだけど、俺はある問題を起こしちゃった。

アカデミーから帰ってきたら、いつも父さんが座っているとこに新聞が置いてあった。

閉じてある新聞が不自然にこんもりしてたので、開けてみたら『イチヤイチャなんとか』って書いてある本が出てきた。

そこまでしてこの本を隠すっていう事は、この本は里の機密に関わる事とかが記されている本なんだと思った。

俺や母さんは絶対に知ってはいけない、里の機密。

その時の俺は『父さんが読むような難しい本を読めば、もしかしたら誉められるかも』って思ったんだ。

誰にも知られてはいけない里の秘密っていうのも誘惑の原因だった。絶対に読むなよって言われると、何が何でも読みたくなってくるよね。

俺は『イチャイチャなんとか』っていう本を手にとり、ページをめくった。

何を書いてあるのかは子供なのでさっぱり解らなかったけど、里の秘密を手に入れていると思うと妙に興奮した。

そうこうするうちに、父さんが居間に入ってきた。多分トイレにでも行ってたんだろう。

父さんと目があう。

俺はおもむろに視線を本に移すと、さも理解して読んでますよといった風に眉間にシワを寄せた。

その直後、瞬身してきた父さんに『イチャイチャなんとか』って本を取り上げられてしまった。

父さんは相変わらずポーカーフフェイスで俺に一瞥をくれると、その本を持って書斎に引っ込んでいった。

帰り際に襖に足をぶつけてたので、かなり焦っているという事が分かった。

俺はその時に自分しかした事の重大さってやつに気づいたんだ。里の秘密を息子が知ってしまったのだから、焦るのも無理はない。俺はただ、『さすが俺の息子だ』って誉めてもらいたいだけだったんだ…。

その後、意を決して書斎に引っ込んだ父さんに謝りに行った。

勝手に里の秘密に手を出したんだ。…否は俺にある。

何らかの罰を受ける事を覚悟して、書齋に引きこもってる父さんに
襖ごしに話かける。

「父さん。」

「……。」

「ごめんなさい……。そんなに大事な本だとは知らなかったんだ……。」

「……。」

「でも、里の人や母さんには絶対に言わないから！」

「……サスケ。」

「なに？父さん。」

「もういいから、宿題をやっていないさい。」

「……ごめんなさい。」

もっと怒られるかと思ってただけに、意外だった。

見る方も悪いけど、見られるようなところに置いておくのも悪いって、
父さんも反省してるんだろうか。

だとしたら、父さんはやっぱり立派な人だ。

書齋から居間に戻る前、父さんが書齋の中で

「やはり俺の息子か。」

っていう、独り言が聞こえた。

兄ちゃんは任務でいなかったの、多分俺の事だろう。

なぜあのタイミングで誉められたのかは解らなかったけど、俺はその言葉を言ってもらえて、すごく嬉しかった。

兄ちゃんと比べたら出来は悪いけど、阿呆な子供ほど何ちゃらって言うしね。

そもそも比べる相手が悪いと思うんだけど。

ちなみに、あの『イチヤイチャなんとか』の一件以来、どんなに家の中や父さんの書斎を探しても、それらしい本は見当たらない。

やはり俺や母さんが知ってはいけないような、里の秘密が記されている本なので、父さんが処分したんだろう。

俺があの時うかつに本を見たりしなかったら、こんな事にならなくてすんだのに…。

ごめんなさい父さん。もうすぐ父の日だから、何かプレゼントをしよう。

父さんは本が好きだから、やっぱり本がいいのかな。

今度本屋さんに行こう。

こんな感じで「無口で不器用だけど、優しくて立派」って言うのが、俺の父さんだ。

母さん

母さんは、優しくてきれいだ。料理も上手。

でも、家族の中では一番怒らせてはいけなかったりする。

いつも台所を拠点として、居間や書斎、庭や俺と兄ちゃんの部屋を忙しそうにパタパタと動き回っている。

小さい頃、兄ちゃんがない時は母さんの後ろを金魚の糞みたいにくっついていったものだ。

自慢じゃないが、母さんは里の中でもかなりの美人だと思う。

基本的に木の葉の里の人はきれいな人が多いんだけど、間違いなく上位に入るんじゃないかと思う。

子供の鼻目目っていうのもあるんだけどね。

俺の中ではダントツで一番だ。

名前は「ミコト」

っていう名前で、父さんと結婚する前はやはり忍者をやっていたらしい。

もちろん、うちは一族の人だ。

一族内での結婚ってなると、気味が悪くなったりする人がいるかもしれない。

でも、大丈夫。一族の中でもちゃんと考えて結婚しているみたいなんだ。

ここいらに住んでる人はみんな「うちは」なんだけど、ほとんどの人は遠い遠い親戚みたいな感じだ。

もちろん近い親戚とかもいるんだけど、そういうときは『あの家と

あの家じゃ血がく』なんて話しているのを聞いた事がある。子供だからよくわかんないけど。

ちなみに、同じ里内では日向さんのとこや、油目さん、犬塚さんのところも同じような感じになっているみたい。

そんな感じだから、父さんと母さんは一族の間で決められた結婚だったのかと思ってたけど、聞いてみたら違うようだった。

ひと昔前ならそういう結婚が多かったんだけど、今はあんまり無いらしい。

やはり好きになった人同士が結婚するというのが最近の主流で、その中でも血が近い場合は一族からストップがかかるみたいなんだ。それと一族外との結婚も、お嫁さんかお婿さんをもらうってゆう形で昔に比べたら増えてきてるみたい。時代ってやつだね。好きになっちゃったのなら、仕方ない。

一族内の結婚なら、どこらへんまでならいけるんだろうと聞いてみたら、

「父さんと母さんに兄弟姉妹がいて、その子供じゃなかったらオツケーよ。」と言われた。

意外と緩いもんだ。

そして、あの無口な父さんがいかにしてキレイな母さんを引っ掛けたのが気になって、聞いてみたら意外な答えが帰ってきた。やはり若い頃の母さんはモテたらしい。

父さんは何かの任務で一緒になったのがきっかけで、そこから2人の物語は始まったようだ。

先に好きになったのは父さんの方で、それはそれは凄いアプローチ

をしてきたんだって。子供の俺が聞いても引くくらいのこと。だけど不器用で無口だから、ことごとく失敗したみたいだ。でも逆に、誠実さみたいなのは伝わったみたいで、

「不器用なんだけど優しいところに私も惚れたのよ。」

とノロケた。

その後、

「アタイも若かったからねえ……。」

なんて普段使わない言葉でしゃべりだしたもんだから、それ以上は聞いたらまずいと思って聞けなかった。てか聞けなかった。目も遠い目をしてるし。

キレイな母さんなんだけど、その反面怒らせたりしたら怖い。

俺は後片付けが苦手で物を散らかすから、その事でよく怒られるんだけど、それはまだ序の口だ。

父さんに誉めてもらいたくて火遁の練習をしていた時の事だ。

火遁っていうのは、読んで字のごとく火を操って攻撃する術だ。

遁っていうのは「逃げる」っていう意味で、昔は火を使って相手をびっくりさせて、その間に逃げるっていう具合に術を使っていたらしい。

しかし、時代の移り変わりとともに術は進化して、相手を攻撃できるようにまでなった。

攻撃してるんだから全然逃げないんだけど、昔の名残ってやつで「火遁」の名称は残り、火に関係する術は総称して「火遁の術」と称され、現在に至るって訳だ。

俺が練習していたのは火遁の術の中で「豪火球の術」と呼ばれる、チャクラと印をうまく使って大きな火の球を出すという術だ。

この「豪火球の術」というのは、うちは一族の中ではかなり重要なポジションにある術で、この術がうまくできるようになったら、「一人前」と呼ばれるらしい。

うちは一族は火を操るのが得意な一族で、名字の「うちは」や家紋の団扇も、それに起因している。

そういう訳で、一人前と呼ばれるのは早いに越した事は無いし、例の「さすが俺の」も言ってもらいたかったから、一生懸命練習したんだけど、いかんせん術が上手いじゃない。

前にも言ったように、できない事は無いんだけど、パツとしないんだ。

そこで俺は、一計を案じてみたんだ。

うちの油はよく燃える。

口に「うちは秘伝」の油を含み術を発動させたら、凄い事になるんじゃないかと。

ためしにやってみたら、これはもう大成功で、上忍も真っ青なもの、凄い火の玉が飛んでいった。後は父さんを呼んで術を見てもらい、

「さすが俺の〜」と言ってもらっただけだ。

父さんにバレないように口の中に秘伝の油を入れた袋を仕込む。術の発動前に噛み切るためだ。ポーカーフェイスな父さんが驚いているのを想像すると、とてもワクワクしてくる。

父さんと呼んできて「豪火球の術 feat. 油」を披露したんだけど、大人の目はごまかせず一発でバレてしまった。

術の良し悪しより、ズルしたって事がダメだったみたいで、こっぴどく怒られた上に

「……本当に俺の息子か。」

とまで言われてしまった。

この言葉には子供心にはひどく衝撃的だったね。悪いのは俺なんだけど。

必死に謝ろうにも父さんは書斎に引きこもってしまい、こうなるとテコでも動かない。だから、俺は居間で洗濯物をたたんでいた母さんに泣きついたんだ。

訳を説明しようにも、涙が止まらなくて上手くしゃべれない。

「あら……どうしたのサスケ。」

「父さんが……。」

涙でむせびながら、訳を話す。

「そう……サスケは悪い事したって思ってた反省してるのね。」

「……うん。」

「もう一回謝りに行きましょう。母さんも一緒に行ってあげるから……。」

「でも……父さん……俺の事、本当に息子かって……。」

「……。」

「父さんが……母さん……の事を……つ、つまり……。」

「……！」先刻、父さんから子供心には衝撃的な言葉を浴びせられて泣かされた俺は『父さんが言ったように、母さんも俺のことを本当の息子じゃないかと思ってないよね？』と言うつもりだったんだけど、溢れてくる涙のせいでうまく伝える事ができなかった。

言い直そうとしどろもどろしていたら、さっきまで優しい眼差しで俺を見つめていた母の表情は一瞬で修羅の形相に変わり、その直後に瞬身して目の前から消えてしまった。

書斎の方から何やら物音が聞こえる。

しばらくすると、父さんと母さんが一緒に部屋に戻ってきた。

部屋の襖を開けたのは父さんで、すぐ後ろに母さんがいた。めったに感情を表さない父さんの顔が、少し引きつっているようだ。何かに怯えているかのように。

母さんは今まで見た事もないような、氷のように冷たい視線で父さんのすぐ後ろに佇んでいる。

「……サスケ。」

「…?」

「さっきは、言い過ぎた。…すまん。だが、ズルはダメだぞ…。」

「…!」

父さんからまさか謝罪の言葉が出てくるとは思ってもいなかったの
で、俺は言葉を失って口をパクパクさせていると、父さんと母さん
は書斎の方に戻っていった。

戻って行くときも母さんは父さんのすぐ後ろにピッタリと張り付い
ていて、見方によっては何かを突きつけているかのようにも見えた。
今思えば、俺が生まれて初めて感じた『殺気』だったのかもしれな
い。

またしばらくすると、母さんが部屋に戻ってきて何事も無かったか
のように洗濯物をたたみ始めた。何があったのか凄く気になったが、
聞いてはいけないような気がしたので何も聞かなかった。

母さんは鼻歌しながら洗濯物をたたんでいる。

いつもの母さんに戻っていた。

こんな感じで、『優しくて美人だけど、怒らせたらヤバイ』ってい
うのが俺の母さんだ。

忍者同士の結婚って色々大変そうだな〜と思った。

その日の夕方、兄ちゃんも帰ってきたので夕食の時間になった。母さんが腕を振るって作った料理なのでまずい訳が無い。夕食後、母さんは父さんにお茶を出す。

その日はいつもの湯飲みの置き方より、母さんは若干強く置いたような気がする。

父さんの肩は若干ビクツとなったような気がした。

兄ちゃんはこの異変に完全に気付いていたが、見なかったフリをしていた。

俺も兄ちゃんがしたように、見なかったフリをした。

大人の階段を少しだけ登ったような気がした。

うちは一族

この里で『うちは一族』と呼ばれている人は、だいたい100人ちよいってところだ。

そして、みんな同じ地区に住んでいる。

うちは地区は里の中心より少し離れた所に位置していて、人口の割りには広い面積を占めている。

山がまるごと地区に入っていたりするので、結構な広さだ。

民家は広い範囲に点在はしておらず、ちょうど地区の中央に密集している感じだ。

うちは地区は山あり川ありで四季おりおりの表情をして、たまに猿や猪が出没する。

一族の先祖の人達が『守りやすく攻めがたし』という事で、里のこの地区に住み始めたらしいんだけど、俺にはよくわかんね。道路とか普通にあるし。

名物は『うちは煎餅』

一族秘伝の油と醤油と火遁でこんがりと焼き上げた煎餅だ。

水にも気を遣って地区を流れる川の水を使用している。

まずいわけが無い。

ひと昔前なら一族の人々は大勢いたらしく、『もっと土地をよこせ！』とか言って里の上層部とよく揉めていたらしいんだけど、そんな話は今は昔。

俗に言う、過疎ってやつだ。

大勢いた一族の人達は、任務とか戦争とかでかなり亡くなってしまったらしい。

100人ちよいと言っても、その中には俺の母さんのように現役を引退したり、煎餅屋のおばさんみたいに元々忍者ではない人も含まれるので、現役の忍者として活動している人はだいたい30人くらいだ。

里には『暗部』と言われる特殊部隊がある。

優秀な忍者はここに配属されて、里のために色々と働くんのだ。

『暗部』自体が里の秘密なので、どこで何をやっているかなんて事はさっぱりわからない。

そして、俺ぐらいの年頃の少年達はだいたい里の長である『火影』か、『暗部』になる事を夢見る。

そういう俺も実は『暗部』になる事を夢見たりする。

なんかカッコイイよね。響きが。

暗部という特殊部隊に所属している忍者は、基本的に存在は秘密にされているので、もしかしたら一族はもう少しいるのかもしれない。

戦争や任務で亡くなった人も少なくないので、俺のように両親が健在でいる家庭は珍しいと言える。

孤児となってしまいう子供もいるので、両親が健在している俺は十分に幸せな方だと思う。

実を言うと、父さんが隊長と呼ばれているのも戦争で大勢の忍が亡くなってしまったので、繰り上げ的に隊長に出世したのだ。

事情が事情だけに素直に喜べないし、人数がグッと減ってしまったのでかなり大変なようだ。

人数が減ったからといって、里の警備任務を放棄する訳にもいかないので、少ない人数でなんとか切り盛りしているというのが現状だ。

人口が少ないためか、一族内には俺と同年代の子供がいない。アカデミーに行くまでは気付かなかったけど、1人もいないとなると少し寂しい感じがする。

でもいたらいで、俺の実力は前にも言ったように本当にパツとしないから、比較されたりしてたと思うので、いなくて良かったのかもしれない。

アカデミーに入学する前は兄ちゃんがよく遊んでくれてたし、入学したら自然と友達もできたのでそんなに寂しいとは思わなかった。

うちは一族に、『川向こうのシスイさん』っていう人がいる。

『川向こう』っていうのは、うちは地区の中心から見て、川の向こう側に家があるからだ。

シスイさんは何才なのかは知らないけど、兄ちゃんよりも年上だから俺よりだいぶ年上の人だ。

兄ちゃんと仲が良いみたいで、里の中でよく一緒にいるのを見る。そして、俺の釣りの師匠でもあるんだ。

最初は兄ちゃんに釣りを教えてもらったんだけど、兄ちゃんはあるまり釣りが上手くないんだ。

お互い釣れなくて気まずい空気が流れ始めた時、シスイさんが俺達の前に現れた。

シスイさんは、

『魚が釣れないのは原因がある』

『原因を発見して修正すれば必ず魚は釣れる』

という、シスイ釣り論から始まり、

『糸、針、ウキのバランス』『よい餌とは』

『なぜお前達はタナをとらない』

等、テクニックを俺に伝授してくれた。

原理というのは不思議なもので、シスイさんの言われた通りにしたらすぐに釣る事ができた。

シスイさんの言うテクニックや原理の数々は、まさに目からウロコだった。

その日のうちにシスイさんに弟子入りしたのは言うまでもない。

その日から、シスイさんがヒマな時はよく一緒に釣りをしていた。兄ちゃんと一緒に誘っても、

「許せサスケ」

とか言って小突かれるので、釣りをする時はシスイさんと行く事にしたんだ。

実際、兄ちゃんは色々と忙しそうだったし。

その頃の俺の釣りに対するハマりようは半端ではなく、『修行に身が入ってない』と釣り具を父さんに没収されかけたりするくらいだ。

なぜこんなに釣りにハマってしまったかと言うと、やはりシスイさんの名言

『原因を解明して修正すれば結果は必ず出る』

が、俺の子供心に響いたからだろう。

「いいか、サスケ。

釣りをして糸を垂らしているのはヒマそうだと思うだろ。実際は違うんだ。

頭の中では常に魚や仕掛けの状態を考えるんだ。

ウキから伝わる情報を見逃すな。

……情報は忍者の命だろ？

ホラ、餌落ちてるぞ。

ウキを見ながら、手は次のエサを練るんだ。

ぼーっとするヒマなんかない。

手返しは、早くだ。

……釣りは瞬身なんだよ。

オイ、引いてるぞ！」

シスイさんと一緒に釣りをして、俺の腕はメキメキと上達していった。

忍者の方はもっと頑張らないといけないだけに、なんだか恥ずかしい……。

そんなある日、シスイさんは長期にわたる任務でしばらく里を離れる事となった。

次に会うときは『小魚どもの散らし方』を伝授してくれるらしい。

シスイさんが里に帰ってくるのが待ち遠しい感じだ。

シスイさんが里を離れた次の日、兄ちゃんが珍しく釣りに誘った。

一体どうしたんだろうと思ったけど、その日は釣りじゃなくて手裏剣の修行を見てもらう事にした。シスイさんに鍛えられた俺の釣りの腕は、すでに兄ちゃんを凌駕していたからだ。

俺にとって兄ちゃんは、いつまでも越えられない壁であって欲しい

んだ。

釣りしてヘコむ兄ちゃんは見たくないしね。

許せ兄ちゃん。

ちなみに見てもらった手裏剣の修行だが、なかなか上手くいかない俺に兄ちゃんは優しく教えてくれた。

優しく教えてもらってもやはりなかなか上手くななかった。

それでも兄ちゃんは最後まで優しく俺に教え続け、励まし続けてくれていた。

優しくされる分だけ切なくなっていく。

出来の悪い弟でごめんね。

許して兄ちゃん。

アカデミー

木の葉の里のアカデミーとは、忍者を養成する教育機関だ。将来的に忍者となる可能性を持った少年少女が通っている。

教育の内容は、忍術、体術、幻術等、忍としての基本的な事から、地理、歴史、薬学等、一般教養的な事までと多岐にわたる。

俺のアカデミーでの成績は、はっきり言ってイマイチだ。

忍術系もさる事ながら、一般教養もまた然りだ。

パツとしないんだよ俺は。

それでも、俺はアカデミーは好きだ。

変な同級生達に恵まれたせいかな、アカデミーに行けば1日に1回は必ず笑う事ができる。

A B型でへそ曲がりな俺はアカデミーに登校している時、

『今日は絶対に笑わない1日にしよう』

などと訳のわからん誓いをする事がある。

そんな誓いも虚しく、変な同級生達のせいで1日に1回は必ず爆笑してしまうので、同級生には本当に恵まれていると思う。

アカデミーに通う同級生の中でも仲が良いのは、奈良シカマルとい

う奴だ。

シカマルは『めんどくせえ』と言うのが口癖で、いつもやる気が無いような感じを出している。

成績は今のところ俺とどっこいどっこいなんだけど、シカマルが本気になったら俺なんかじゃ足元にも及ばないくらい凄いいんじゃないかと思う。何となくそんな気がするんだ。

仲が良くなったきっかけは将棋で、風の噂でシカマルは将棋を嗜むという話を聞いたので、即席でノートを利用して盤と駒を作り、シカマルと戦ったのが始まりだ。

玩具の類はアカデミーに持ち込み禁止なのだ。

初手で端歩をつくという小癪な将棋をするシカマルに、俺は兄ちゃんから伝授された『うちは式居飛車穴熊』で臨んだ。

結果はボロ負け。投了図の自陣は、台風が直撃した後みたいな感じになってた。

穴熊しといて台風なんてどんだけ弱いんだと思ってる人もいるかもしれないが、シカマルが強すぎるんだ。

衝撃的な結末を迎えたあと、シカマルは盤面を見ながら

「……銀が泣いてるぜ。」

とか言ってた。

なんのこっちゃい。

この一戦がきっかけとなってシカマルとは将棋友達になり、授業の休み時間にはよく将棋をしていた。

昼休みにシカマルと将棋をしていると、秋道チョウジという子も付いて来るので友達になれた。

シカマルとはアカデミー入学前から家族ぐるみで仲が良いらしい。チョウジはお菓子持ち込み禁止のアカデミーに平気でお菓子を持ち込んできて喰う、というヤンキーだ。

本人曰わく『ぼっちゃり系』で『デブ』は禁句であり、万が一にもその単語が本人の耳に入ってしまったら、大変な事になるとシカマルが言っていた。

チョウジは見ての通りの太っちよなんだけど、体術の授業の時にはなかなか鋭い動きをするんだ。

動けるデブって強いんだよね。だから俺はチョウジをかなりリスペクトしている。

それと、シカマルとチョウジと家族ぐるみで仲の良い同級生のクノイチで、山中いのつという可愛い女の子もいる。本人曰わく『腐れ縁』らしい。

いのちゃんとは、シカマルと屋上で将棋をしている時に会った。その時はシカマルに用事があったようだった。

それからよく話かけられるようになったんだけど、その頃の俺はというと釣りと将棋に夢中だったので、休み時間は話そっちのけでシカマルと将棋ばかりを指し、授業が終わっても話そっちのけで釣りをしていた。

そしたらある日、『はあ〜』という溜め息と共にどこかに行ってしまう、その日からのいのちゃんと会ってもあまり話さなくなってしまうった。

今思えばかなり惜しい事をしたような気がする。

いのちゃんとあまり話さなくなったら、春野サクラという女の子が

話かけてくるようになった。

サクラちゃんはピンクの髪をした可愛い女の子で、俺の元カノだ。

びっくりした人がいるかもしれないので、今から2人が付き合いはじめた馴れ初めでも話そう。ある日アカデミーから家に帰る途中にサクラちゃんが現れて、いきなり

「付き合ってください！」

って言ってきたから

「いいよ。」

で、2人のstoryは始まったんだ。すごいっしょ。

家に帰って晩御飯の時にさっそくこの事を家族に言ってみたら、父さんは

「さすが俺の息子だ。」

と誉めてくれた。

まともな形で父さんに誉められたのは、これが最初で最後だったのかもしれない。母さんはそんな父さんを氷のような瞳で見ていた。

サクラちゃんと付き合い合った次の日、どうしたらいいのかわ分からなかったので、今孔明と謳われるシカマルの知略を借りようと思い、相談に乗ってもらう事にした。

もちろん、俺が誰と付き合い合ってるかなんて秘密だ。

こういうのはバレたら恥ずかしいからね。

シカマルは『めんどくせえ』と言いながらも相談に乗ってくれた。

「シカマル、『A B C D』って知ってる？」

「……知ってるよ。」

「これって知らない人はないくらい有名な話なのかな？」

「……多分な。」俺はこの時は『A B C D』が何の事かはさっぱり知らなかったが、シカマルがみんな知ってると思うのなら、多分みんな知ってるんだろう。きつとサクラちゃんも。

よく男子達が『A B C D』どこまでいった!?!なんて話してたので、俺はその単語と『女子と何かする』という事は知ってたのだ。

「シカマルはさあ、どこまでいった事あるの？」

「はあ!?!」

「だから『A B C D』のどこまで……。」

「ま、まだやった事ねえよ!」

「ふん。」

俺は顔が緩んでいくのをこらえるのに必死だった。シカマルほどの男でも辿り着けない境地に行けるかもしれないと思うと。

「……Dも？」

「っ！バカかお前！Aもした事ねえよ！」

「ふん。」

『A B C D』の内容なんて知らないが、聞いた感じAよりもB、BよりもC、そしてDが最高ランクなんだろう。

「……てかお前、彼女できたのか？」

「い、いや！そ、そんな事はないんだってばよ！」

「何でナルト化してんだよ。」

「そ、それよりさ、俺がもしもAまでいったら凄いなと思う？」

「そ、そりゃあ……まあ、な。」

「じゃあBまでいけたら俺の事を尊敬する？」

「……お前、絶対彼女できただろ。」

「ち、違うんだってばよ！」

「言っとくけどな、絶対そういう事しようなんて女の前じゃ言うなよ。」

「え？何で？」

「失礼だからだよ。そういう事は長い年月を重ねて育んでいく事な

んだ。絶対に言うなよ。」

「へーそうなんだ。」

「……サクラか？」

「あ、有り得ないんだってば！」

さすが今孔明と謳われるだけあって、いい話を聞く事ができた。勘の鋭いシカマルにサクラちゃんと付き合っている事を気付かれそうになったが、ギリギリばれてはないだろう。得たい情報を聞き出した俺は、怪訝な顔をしているシカマルを残してそそくさと教室に退散した。

しかし、あのシカマルの上に立てると思うと、にやけ顔がおさまらないぜ。

なにが『長い年月を重ね……』だ。

忍者がそんな悠長な事を言ってられっか。

今日の放課後、俺はサクラちゃんと一緒に帰る約束をしている。

俺は……今日キメる！

——今日はサスケ君と付き合い初めて最初の記念日。

初めて一緒に下校するんだ。

こんなに授業が終わるのが待ち遠しいなんて思ったのは初めてかも。

サスケ君を初めて見たのは合同授業の時。
パツとしてはなかったんだけど、遠目にはカッコいいなあなんて思
ってた。

この前まではいのブタがちよっかい出してたみたいんだけど、最
近は疎遠になってたっぽいから『今しかねえ！』って感じで思い切
って告ったら大成功。

春野サクラに春が来ました。なんつって。

あっ、いけない。サスケ君が門のところで待ってる。……やっぱカ
ッコいいわこの人。
成績とかはパツとしないんだけど、彼氏として一緒に歩くなら申し
分ないわ。

私とサスケ君は一言、二言会話を交わし、一緒に歩き始める。
まわりの風景は、今まで見ていた景色とは違って見えた。

サスケ君はシャイなのか、あまり話かけてはこない。
私もそうなんだけどね。

会話のないまま2人で歩いているこの時間は、なんだか新鮮で、そ
れでいてなんだかもったいなくて。

「……サクラ。」

しばらく歩いて行くと、サスケ君は急に歩くのをやめて立ち止まっ
た。

『初めて名前で呼ばれた』

そう思いながら私も足を止める。
サスケ君は真剣な眼差しで私を見ている。

「俺には夢がある……。」「

いきなり夢とか言い出すからびっくりしちゃった。
けど、そうゆうの嫌いじゃないわよ私。

サスケ君の黒い瞳を見ると、その中に吸い込まれてしまいそうな気持ちになる。

「俺は、サクラと……」

私の胸の鼓動の高鳴りは、両手で押さえつけていないと聞こえてしまいくらい響いている。

でも、確かに耳に入ってくるサスケ君の声。

私はサスケ君の次の言葉を待った。

「今日中にCまでイキたいんだけどいいかな？」

私はサスケ君が何を言ってるのかわからなかった。

そして、頭から血の気が引いていくのを感じた。

さっきまであんなにときめいていたのに……。体は熱く、頭はクー
ルだ。

「あつ、ゴメン。何だったらBでも……」

次の瞬間、私の右拳は綺麗な弧を描いていた。

振り抜かれた右拳は目の前にいるサスケ君、いや、変態のアゴの先端を水平に打ち抜いた。

アゴを打ち抜かれた変態は、その衝撃により脳震盪を起こして意識

を断たれ、その場に崩れ落ちた。

動かなくなった変態を眼下に、私の頬に熱い何かが伝う。

変態の返り血ではない事を祈ろう。

変態は危ない倒れ方をしていたが、もう知らねえ。

私のピュアな初恋 story は、hard ruck and dance
っちまったようでした。

兄ちゃん

ここだけの話、イタチ兄ちゃんは本当の兄ちゃんじゃない。

本当の兄ちゃんじゃないって言うのは、俺と兄ちゃんは血が繋がってはいないって事。

イタチ兄ちゃんは俺より五つ上で、忍者としては超優秀で普通では有り得ないくらいの早さで中忍に昇格したりしている。

俺の自慢の兄ちゃんだ。

忍者的な事では兄弟だからよく比べられたりするし、兄ちゃんみたいになりたいとは思うけど、ここまで差があると流石に尊敬するしなくなってしまう。

年がもう少し近かったりしたら俺はもっと兄ちゃんに嫉妬していたかもしれない。

俺が兄ちゃんに勝てるのは魚釣りと将棋だけだ。

兄ちゃんは優しい。特に俺に対しては。家族の中で一番優しいんじゃないかと思う。

俺にもしも五つ下の弟がいたら、あんなに優しくはなっていないと思う。

例えば部屋の片付け。

俺は片付けが苦手だ。

その事で母さんによく怒られるている。

ある日、片付けた覚えがないのに部屋がきれいになっていた事がある。

『多分、母さんだろうな。また怒られるな』と思っていたら、

母さんからは怒られるどころか『やればできるじゃない』的な感じで誉められた。

なんと、俺が散らかした部屋は兄ちゃんが片付けてくれていたのだ。

この事実を知った時は『流石にヤバいな俺』と思って、部屋の片付けを心がけるようになった。

でも、たまに忘れて怒られるんだけどね。

兄ちゃんは何も言わなかったが、明らかに俺をかばおうとしていたのだろう。

もしも俺に五つ下の弟がいて部屋を散らかそうものなら絶対にぶっ飛ばしてたと思う。

とにかく、兄ちゃんは俺に対して優しい。

俺に将棋や釣りを最初に教えてくれたのは兄ちゃんであり、昔はよく俺にかまって遊んでくれた。

中忍に昇格した最近では任務が忙しくなったらしく、俺が兄ちゃんを将棋や釣り、たま〜に修行を見てもらおうと誘っても、

「……許せサスケ。」

と言ってどこかに出かけて行く事が多くなっていた。

忍者としてでは俺は兄ちゃんの足元にも及ばないが、将棋と釣りなら俺の方の腕が上のようなので、兄ちゃんに弟の成長を感じさせる機会になればと思っていたが、そうなる事は無かった。

シスイさんが任務で里からいなくなった時に、釣りに誘われたのを断ってしまったのが今になって悔やまれる。

うちは一族がアカデミーに入学する時は家族の長が付き添うのが習わしなのだが、俺がアカデミーに入学する日は兄ちゃんの大事な任務とダブルブッキングしてしまい、家族が少し揉めた事がある。

父さんが『イタチの方を見に行く』と言い出したからだ。

父さんのこの発言はやはり衝撃的だったが、俺はこれまでに父さんの衝撃的な発言を何回かくらっていたので、耐性はできていた。

父さんは天然だからね。父さんも兄ちゃんの事で色々あるんだろうと思い、俺はこの件に関しては大人の事情とやらを汲むつもりでいた。って言うか、母さんが来てくれるなら充分だった。母さんは美人だし。

兄ちゃんはこの時も俺を庇ってか、『任務は中止してサスケに付き添う』と言い出したので、我が家は少し揉めたのだ。

この後の家族会議は、兄ちゃん母さん対父さんという形式にもつれ込み、父さんが俺の入学式に着いてくる事で決着が着いた。

俺的には母さんが来てくれた方が、アカデミー入学後、

「お前の母ちゃん美人だよな。」

が期待できたので良かったのだが、ここは我が家の決定方針に素直に従う事にした。

入学式も無事に終了した後、俺は兄ちゃんに何で俺に対してそんなに優しいのか聞いた。

そしたら兄ちゃんは微笑みながら

「兄弟だからさ。」

みたいな事を言っていたのを覚えている。

兄弟……。

怪しいと思い始めたのは父さんの『さすが俺の』だった。

父さんは事あるごとにこの言葉を口にしていた。

実際、兄ちゃんは超が着くほど優秀なので、そう言われてもおかし
くは無い。

問題は父さんの方だ。

父さんは父さんで凄い忍者なんだけど、兄ちゃんと比べたら明らかに兄ちゃんの方が優秀だ。

中忍出世のスピードなんかも兄ちゃんの方が断然早いし、父さんは一族をまとめる立場に居るんだけど、それは任務や戦争とかで一族の忍者が大勢亡くなってしまったからなんだ。

『さすが俺の』なんてのは、自分の小さい頃と比べて同じ位のレベルに達していたら言えるセリフなんだと思う。

ちなみに父さんが中忍に昇格したのは15、6才くらいの時だと母さんが言っていた。

それでも充分早い方なんだと思うけど、兄さんと比べたら見劣りするの父さんも分かっていたはずだ。

なのに父さんは兄ちゃんに『さすが俺の』を連発していた。

多い日には1日3回くらいは聞く事もあった。

まるで自分自身にもそうだと言い聞かせているように……。

次は母さんだ。

こんな風になっている俺でも、一応劣等感というものは持っている。なんで俺と兄ちゃんはこんなにも違いすぎるのかと。

その悩みを母さんに話した事がある。

その時の母さんは

「……あの子はちょっと特殊だから。」

と言いつつ始め、その後『父さんはいつもサスケの事を話しているのよ』的な方向に話を切り替えた。

その時は純粋に『父さんは兄ちゃんの事ばかりじゃない』と思ってしまい、不思議には思わなかったが、今思い出せばこの時のあの母の発言にはどうしても違和感を感じてしまう。

『特殊』って。

実の子供には少なくとも使ったりはしない単語ではないのだろうか
と……。

俺と兄ちゃんの容姿はそっくりとまではいかないが、それなりに似ているので人からは兄弟って思われるし、それで通じる。

でも、『うちは地区』に住んでいる人々は同じ一族なので、容姿なんてものは皆どことなく似ている。

本当に兄弟なのかどうか親に聞こうと思った事は何回もあった。

その事は聞こうにも聞けなくて、わからないままになってしまった
んだけど。

それでも、俺にとって兄ちゃんは優しくて、強くて、何でもできる、
たった1人のかけがえの無い『兄ちゃん』だ。

本当の『兄弟』では無いけれど……。

そうじゃなきゃ、あんな事……できるはず無いんだ……。

事件

アカデミーに入学している俺は、普段と何も変わらない日常を何気なく過ごしていた。

そんな時、里のうわさで『川向こうのシスイさん』の訃報を聞いた。

なんでも、川に飛び込んで自殺してしまったらしい。

シスイさんと最後に会ったのは、シスイさんが長期任務で里を不在する前だ。

次に会うときは『小魚どもの散らし方』を教えてくれると確かに約束していた。

身近な人の訃報を聞いたのはこの時が初めてだったので、俺はかなりのショックを受けた。

そして、今まで怒ったところなんて見た事ない兄ちゃんが、かなり怒っている所を見た。

兄ちゃんはシスイさんと仲が良かったので、シスイさんの事で疑われているらしい。

自殺する直前にシスイさんと会っていたのは、兄ちゃんだったのだ。

ただでさえ、仲の良い人が死んだとなると悲しいのに、それを疑われるなんて絶対に怒るよね。

俺は不思議と涙は出てこなかった。

シスイさんはきつとまだ生きていて、どこかで釣りしてるんじゃないかとさえ思えた。

俺は何も言わずにシスイさんから貰った釣り具の手入れをした。

シスイさんの自殺はとても悲しかったけど、俺は最近とても嬉しい
でき事が起きていた。

シスイさんが自殺してしまう日の何日前、母さんが俺を部屋に呼
んだ。母さんはいつものように、部屋で洗濯物をたたんでいてこ
ろだった。

「サスケは弟と妹、どっちが欲しい？」

「えっ！？ どういう事？」

「……サスケはお兄ちゃんになるかもしれないのよ。」

「っ！！」

俺はとても驚いた。

まさか俺が『兄ちゃん』になれるなんて。

母さんは『まだわからないけどね。』と言っていた。
年齢が割りと高めなため、母体に影響が出てしまうかもしれないと
言うのだ。俺はまだ子供だからよくわかんないけど。

でも、母さんから『サスケも兄ちゃんになれるかも』と聞いた時は、
驚きと喜びが重なり合った感じになってとても嬉しかった。

これはお目出度い事なんだ、と。

弟だったら、俺は立派に『兄ちゃん』できるかな？

俺みたいなのが弟だったらぶっ飛ばしてしまいそうだけど、そこは

我慢と言うか、俺が兄ちゃんにして貰ってたように、俺も弟に優しくしよう。ぶっ飛ばさない自信は無いけど。

妹だったらどうしよう？

母さんに似てたらきつと美人だな。

変な虫がついたらそいつをぶっ飛ばそう。

あ。妹の方がいいかも。

妹 来い。妹 来い。妹……。

……でも、無理を言ったら母さんが大変だ。

母さんはあんな性格だから『死んでも産む！』って言い出すんだろ
うけど、それだけは絶対に嫌だな。

母さんが無事に産めるようにいい子にしよう。

まずは片付けからだ。

どっちでもいいから無事に来い。どっちでもいいから無事に来い。

どっちでもいい……。

兄ちゃんになれると聞いて、俺は生活に張りができたと言うか、母さんに迷惑をかけないよう片付けや手伝いを積極的に行おうと決めた。

なにより、兄ちゃんと同じ『兄ちゃん』になれると思うと嬉しくて
しょうがなかった。

任務から帰ってきた兄ちゃんに早速この事を言うと、

「フ……頑張れよ。サスケ。」

と小突かれた。兄ちゃんは近頃、父さんばりのポーカーフエイスが
板に着いてきたようで、表情がまったく読めない。

父さんは行動に出るのでまだ分かりやすいのだが、兄ちゃんにはそ
れも無いので全然わからない。

だけど、兄ちゃんもきつと嬉しいはずだ。

母さんの妊娠とシスイさんの自殺。そんな中、ついにあの日がやってきた……。

俺はいつものようにアカデミーに通っていた。

授業はよくわからなかったけど、シカマルやチョウジって言う友達がいるからアカデミーは好きだ。サクラちゃんと目があえばなぜか舌打ちされるけど。

授業が終わってアカデミーの門をくぐる。

里は夏の季節なので、辺りはまだ明るい。

いつもの帰り道だ。

しばらく歩くと『うちは地区』に着く。

もともと人口が少ない、過疎な土地なのだが、その日はいつもより増して人気が感じられなかった。

いつも挨拶する煎餅屋のおばさんもない。

なぜだかわからないけど、俺はとても嫌な予感、胸騒ぎがしてそこから家までダッシュした。

「ただいまっ！」

着くと同時に靴を脱ぎ飛ばし居間に駆け上がる。

最近『兄ちゃん』になれると聞いて、素行には気を付けるようにしていたが、今日はそんな事気にしてられなかった。

息を切らして居間の襖を開ける。

そこで見たのは、倒れている母さんと父さん、そして兄ちゃんだった。

「く、来るな……。サスケ。」

倒れている父さんと目が合った。口からは血が流れている。母さんに覆い被さるように父さんはうつ伏せになっている。母さんは、動いていなかった。倒れている母さんのお腹の辺りから血が出ている。

「兄ちゃん!!」

「……サスケ。」

「な、何やってんだよ!」

兄ちゃんと目が合う。

兄ちゃんは今まで見た事の無い変な目をしていた。

血を流して動かなくなった父さんと母さん。

俺は『まだ間に合うんじゃないか』と思った。

「誰かいませんかぁー!!」

大声で叫び、誰かを呼ぶ。辺りは静かなままだった。

「兄ちゃん!早く!助けを呼ぼうよ!兄ちゃん!」

再び兄ちゃんを目を見る。

その瞬間、幻術をかけられた。

次々に映像として目に入ってくる、兄ちゃんがうちは一族を虐殺していく姿。

子供から大人まで片っ端からだった。

そして、母さんと父さん。

母さんは最後までお腹を庇っていた。

「嘘だあ！」

俺は気が付くと、印を結んでいた。

最近、授業で習った幻術の印だ。

何の幻術だったのかは、忘れた。

それでもなお、兄ちゃんは俺に幻術で映像を見せようとしてくる。

俺は動けなかったが、兄ちゃんの幻術に見せられながら、歯を食いしばり、印を結んだまま兄ちゃんを睨み続けた。

口の中に鉄の味が広がる。

たぶん鼻血だ。

印を結んでいる指が変な音をたてて曲がる。

折れたようだ。

もの凄い吐き気がして、胃の中の物を全部吐き出してしまいたい気分になるが、歯を食いしばってこらえる。

兄ちゃんは相変わらず俺に幻術をかけているようだが、俺はどうしても母さんと父さんの場面を受け入れる事ができなかった。

鼻血を流しながら、指が折れるほど堅く結んだ印で幻術をすれば、一瞬ではあるが兄ちゃんの幻術を解く事ができていた。

俺は全力の幻術で『兄ちゃんが母さんと父さん、弟か妹を殺す』映像を否定していた。

兄ちゃんはその俺に幻術をかけながら、何か語っている。

「愚かな弟よ……。」

とか

「自分の器を図るため……。」

とか

「万華鏡写輪眼が……。」

だとか。

全力で幻術をしている俺に、兄ちゃんの言っている事はまったく耳に入ってこなかった。

ただ、俺が幻術をして一瞬でも兄ちゃんの幻術を解いている時は、兄ちゃんに殺された父さんと母さん、そして弟か妹を護れているような気がした。

だから俺は、兄ちゃんに幻術を仕掛け続けた。

みんな兄ちゃんに殺されて、死んでしまったんだけど……。

目が覚めたのは病院のベッドの上だった。

俺が目覚めたのに気付いた看護婦さんが病院の先生を呼びに行く。腕には点滴、鼻にはなんだかよくわからない管、手は包帯で巻かれていた。

これから手続き等を済ませて退院、なんて事は待っていらなかった。

俺には確かめなければいけない事がある。

俺は点滴と鼻から管を抜き、病院の窓から外に飛び出した。鼻から管を抜いた時に血が出てきたので、失敬したちり紙をつっこんでおいた。

窓から飛び出した俺は一目散に『うちは地区』へと走った。

何も変わらないうちは地区。

家屋は何も変わってはいなかったが、黄色テープが地区全体に引かれていた。

呆然としながら生まれ育った場所を歩く。

あの時と同じように、やはり誰もいない。

家に着いたので扉を開ける。

「……ただいま。」

いつものように、家に入る。

靴は揃えよう。

俺はもうすぐ『兄ちゃん』になるのだから……。

俺の声にいつも返ってくる『おかえり』という母さんの声はなかった。

た。

父さんは家にいても『おかえり』とは言わない。不器用だから。

誰もいない居間に入ると、お茶を飲んでる父さんの姿や、洗濯物を畳む母さんの姿がぼんやりと浮かび上がる。

兄ちゃんの姿は浮かばなかった。

あの後、誰かが掃除でもしたのだろうか。

父さんと母さんが倒れていた場所にはうつすらと血の後が着いているくらいで、家には誰もいなかった。

俺は父さんと母さんが倒れていた場所に腰を下ろす。

それから、父さんと母さんが生きていた時の事を思い返したが、涙は出てこなかった。

『おかしいな。こんなもんなのかな。』

頭の中は自分でも有り得ないくらい客観的だった。

だけど、産まれてくるはずだった弟か妹の事を考え始めたら、涙が出てきた。

その日は一晩中、俺はその場所で泣いていた。

悲しい話（前書き）

この話はマイケルローゼン原作、谷川俊太郎訳の『悲しい本』のパクリです。

なるべく丸パクリにならないよう気を付けましたが、ほぼパクリです。

『悲しい本』は個人的にとっても大好きな絵本なので、書店の絵本コーナー等で見かけた際は是非！

歌詞のパクリが問題化しているようです。

ガイドラインを読んでも、どのラインまでなら有りなのか、むづかしくてよくわかりませんでした。

二次創作の場でもパクリが気になる、たこわさびでした。

ちなみにマイケルローゼン氏は詩人です。

悲しい話

あの事件からしばらくの月日がたち、俺は変わらずアカデミーに通っている。

「シカマル！」

「……オウ」

「将棋しようぜ！」

「……しょうがねえな」

休み時間はいつものようにシカマルを将棋に誘う。

『めんどくせえ』が口癖のシカマルは、将棋の事になると『めんどくせえ』とは言わないのだ。

シカマルと将棋をしていると、セットでチョウジが付いてくる。

ヤンキーなチョウジは今日もお菓子を食べながら将棋を見ている。

最近は油目シノっていう子とも将棋をするようになった。

シノの俺とシカマルの将棋を見ながら後ろの方で

「なぜならそこは……」

とかブツブツ言っている。

しかし、シノは岡目八目というやつだ。

棋力なら俺とどっこいどっこい。

「あんたかも、好きねえ」

と、通りかかったいのちゃんが言う。サクラちゃんも一緒だ。

サクラちゃんからは、目を合わせれば舌打ちされるといいう日々がしばらく続いていたが、最近は普通な感じに戻っていた。

いきなり『C』なんて言ったからダメだったのだろう。

あれから成長した俺は、『A B C D』の意味も内容も完全に習得していた。

今ならまだ、2人の関係は間に合うのかもしれない。

「サクラちゃん……。あの時はすみませんでした。Aからお願いします！」

「……最低」

「……ないわ」

土下座している俺を尻目に、2人は溜め息をしながらどこかに行ってしまった。

あれ？ 順番はあってるはずだよな？

「サスケ、銀が泣いてるぜ」

何のこっちゃい。

あ。詰んでる。

やべえ！ イルカ先生が来た！

チヨウジ！隠せ！隠せ！
ってか、食うな！

こんな感じで、俺はアカデミーの毎日を過ごしている。

全然悲しんでないって思うだろ？

違うんだ。俺は悲しんでいる。
ものすごく。

アカデミーで笑っている俺。

確かに端から見れば悲しんでないように見えるかもしれない。
でも、笑っているこの顔は、実はとても悲しい時の顔なのだ。

忘れようと思っても、思い出しちゃう時ってあるじゃない。そんな
時はコレ。

この笑顔。

コレが俺の悲しい時の顔だ。

それでも、人間には限界ってモンがある。

俺の場合で言えば、悲しみの限界ってやつだ。

その限界を越えちゃうと、ヤバイ。

こんな顔になってしまう。これはとても悲しい顔、だ。
もう、見てらんないでしょ？

ボンクラでパツとしない俺でも、プライドっていうのは持っている。
こんな顔を人に見られたくはないんだ。

悲しみを貯めてしまう要素の一つに、『同情』という項目がある。

『同情』は、リアルに悲しい顔をしていたり、寂しそうにしている
とよく貯まってしまう。

俺の『悲しみキャパ』の中では『同情』が結構な尺を採っているん
だ。

なので、俺はみんなから『同情』されないように、以前と同じよう
な感じで笑っている。

だからこの笑顔は、悲しい顔なのだ。

それでも、俺の『悲しみキャパ』は色々な要素により少しずつ貯ま
ってしまう。

限界を越えなてしまわないようにするには、毎日毎日少しずつ発散
していくしかないんだ。

発散する方法は色々ある。

その1つに、1日に1回は得意な事をする。

俺は釣りが得意なので、時間がある時は釣りに行く。

得意な事をする時は、余計な事は考えず夢中するのがコツだ。

しかし、釣りは気象条件に左右されやすいし、常に結果が出るとい
う訳でもない。

そういう時は幻術。パツとしない俺でも、なぜだかあの日以来、比
較的得意になった術だ。

同級生に幻術をかけるわけにはいかないので、鏡にかける。

鏡越しに、自分が自分に幻術をかけるんだ。

もはや、訳わかんないだろ？

俺でも訳わかんないんだ。

それと奇行。

奇行と言っても、突然全裸になったりとか、意味不明な事を叫びながら屋上を走るなんて事はしない。

そういう衝動に駆られる時はあるんだけどね。

プライドを持っている俺は、奇行をするにしても『他人には迷惑をかけない』という、自分ルールを持っている。

そんな俺の奇行とは。

例えば、風呂に頭まで使って大声で叫ぶ。

例えば、箸で茶碗を叩きひたすらリズムをとる。

例えば、近くにいた動物のモノマネ。鳥なら鳥の鳴き声。

例えば……。

こんな感じで少し頭を使えば色々と奇行できるんだ。

こうして俺は貯まっていって『悲しみ』を毎日毎日消費している。

誰かに悲しい話を聞いてもらいたくなる時もあるが、それはしない。

悲しい話をしたら、その人は一緒に悲しんで俺の気持ちをわかってくれるかもしれないが、それは『同情』だからだ。

分身してそいつに一晩中聞いてもらってた方がマシだ。

この悲しい話は俺だけのものなんだしね。

注意しなきゃいけないのはズバリ夜だね。

昼間はアカデミーで誰かと一緒にいるから大丈夫なんだ。でも辺りが暗くなり始めて夜に突入するとヤバイ。夜は何もしなくても『悲しみ』が自然に貯まるという激アツな時間帯なんだ。

だいたいこの時間帯に俺の奇行は活発化していく。

しかし、俺の奇行は縛りがあるし、ネタ勝負だから安定しない。そんな時は、俺が楽しめる事を探す。

今ハマってるのは『イチヤイチャパライス』だ。

わからない単語は辞書を引いて調べる。

全力で楽しむんだ……。

テレビをつければTVHが『クノイチだらけの水泳大会』を放映している。

父さんがよく1人で見ていたやつだ。

全力で楽しむんだ……。

最終的には鏡。

鏡越しに幻術をかける。

チャクラを使えば疲れるのでグッスリ眠れるんだ。全力で……。

布団に入ったら次の日にやる事を考える。

アカデミーに行くのなら、家を出た時から帰るまで。

どのタイミングで朝ご飯と弁当を作るのかも考えながら。

休みの日だったら、家事をやる。

だらしない俺は洗濯物は一週間くらい貯めてしまうのだ。

朝起きて、飯作って、洗濯して……。

買い出しにも行かなきゃ。

お金の話はしなくていいよね？

遺産とかの話になっちゃうから。

時間ができたら釣りに行こう。

といった具合に、これでもかと言うくらい次の日の事を考えながら眠りにつく。

明日が楽しみになるように……。

明日になるのが待ち遠しいと思えるように……。

俺は『兄ちゃん』なんだから、しっかりできるように……。

ナルトさん

金髪蒼眼で『うずまきナルト』と言う少年がアカデミーにいる。

俺は彼の事を『ナルトさん』と呼び、敬語で話している。

なぜかと言うと、ナルトさんはアカデミーの卒業試験に2回落ちるという豪の者だからだ。

単純に考えれば2コ上の先輩だ。

他の同級生達はタメ語で話しているが、年上には敬語だろう。

忍者の世界は実力主義な所があるので、ある程度の年齢逆転は許される風潮がある。

だけど、俺は違うと思うんだ。

実力主義なのは仕方ないが、やはり年上には敬意をはらわなければ。

なので俺は、ナルトさんには年上に対する敬意を表し、敬語で会話している。

ナルトさんはアカデミーでは有名人であった。

何が有名かと言うと、忍術ができない事とイタズラをよくする事で有名であった。

俺も人の事は言えないレベルだが、ナルトさんは忍術がまったく使えないようで、よく術を失敗してはイルカ先生に怒られていた。

ナルトさんが失敗する分だけ俺の失敗は目立たなくなったので、ナルトさんの存在は非常に大きかった。

それに、ナルトさんがやるイタズラは、どれも奇想天外な物が多く、奇行を嗜む俺としてもナルトさんは一目置く存在であった。

ナルトさんと話し始めたのは、あの事件があつてしばらく経った頃だった。

誰もいない家に帰ろうとしている時、公園で寂しそうに1人でいるナルトさんを見かけた。

同じ匂いがした、なんて言ったら気味が悪いし、傷をなめあうなんて事をするつもりはさらさら無かったが、気が付いたら俺はナルトさんに声をかけていた。

「……ナルトさん、ですか？」

「……」

俯いていたナルトさんは顔をあげた。

その顔は、『とても悲しい顔』になってしまう1歩前という顔であった。

こういう時は同情してはいけない。

その顔の意味を知っている俺は、なるべく明るい調子で悟られないように話し続けた。

「ナルトさん！俺の事、知ってます？」

「……サスケ？」

「そうっす！うちはサスケっす！」

自分でも他に無いのかと言いたいくらい変な会話だったが、俺は考
える時間を与えないように会話を続けた。

「何やってんすか？」

「別に……」

「家に帰らないんすか？」

「……」

地雷を踏んでしまったかもしれない。それでも構わず俺は続けた。

「よかったら、俺んちに来ます？」

「……！」

「俺んち、知ってるかもしれないっすけど、誰もいないんすよ」

「……でも」

「大丈夫っす！俺、あれからずっと住んでるんだけど、幽霊とかは
出てこないです！」

「そういう訳じゃ……」

「晩飯もありますよ！」

「……いいの？」

「大丈夫っす！」

「……ホントに？」

「大丈夫っす！」

そんな感じで無理矢理ナルトさんを家に招待した。

一緒に家に帰る途中、ナルトさんも家族がいないという事を知った。

俺はナルトさんならあの話ができるかもと一瞬思ったが、やはりあの話は俺だけのものだし、ちっぽけなプライドもあるのであの事件の話をするのはやめた。

ナルトさんも同じような気持ちだったのか、それ以上は自分の事を喋らなかった。

最初は普段の姿からは想像もできない、借りてきた猫のようにおとなしかったナルトさんだったが、しゃべり始めたらだんだんと元氣が出てきたようだった。

「最初はいけすかねえ野郎だなんて思ってたけど、話せばいい奴なんだってばよ」

と言われた。正直な人だ。

そして、ナルトさんの実年齢が気になったので、思い切って聞いてみる事にした。

「ナルトさんて、今何才なんですか？」

「ん」

自分の年齢知らないのかこの人。

「誕生日はいつなんですか？」

「10月10日なんだってばよ！」

「で、何回誕生日を迎えたんですか？」

「ん」

ナルトさんは真剣に悩み始めてしまったようだった。
とりあえずは、年上である事が濃厚なので敬語で接する事にする。

「敬語なんて使うのやめてくれってばよ！」

と言っているが、俺にもポリシーがある。

はい、そうですかと急に変える訳にはいかないのだ。

そうこうするうちに、うちは地区の我が家へと到着する。

あの一件以来、俺以外には誰もいないのでうちは地区はとても静かだ。

朝のうちに炊いておいたご飯と、冷蔵庫にあるもののありあわせで晩飯を作り、ナルトさんに振る舞った。

誰かと一緒に晩飯を食べるなんて本当に久し振りだ。

晩御飯を食べ終わったあとは、ナルトさんと色々な話を話した。
アカデミーの事や、里の事、好きな女子の話なんかもだ。

ナルトさんのお気にはサクラちゃんだった。
ピンクの髪とおでこがイイ！らしい。

「近い将来、化けるってばよ！」

と、豪語している。

俺の元カノである事は伏せておこう。
しかし、惜しい事をしたもんだ……。

「サスケは誰なんだってば？」

この話を振ったのは俺の方だから、当然の流れだ。
今や父の形見でもある『イチチャイチャパラダイス』を愛読書とする
俺の性の対象は、同級生などではなく年上だ。

「クノイチ担当の紅先生って知ってます？」

「うえっ！だいぶ年上なんだってばよ！」

「いやいや。年じゃないっす！それに、あの人は絶対エロいっすよ」

「……俺の勘が正しければ、紅先生はきっと彼氏持ちなんだってば」

「マジっすか！？根拠は！？」

そんなこんなで、久々に過ごすお互いに独りではない夜の時間は過ぎていった。

紅先生の彼氏が気になりすぎて、『そろそろ帰る』と言うナルトさんを無理矢理引き止め、その日は家に泊めた。

さあ、根拠を言ってもらおうか、根拠を。

その日以来、ナルトさんとはよく話すようになり、ちよくちよく俺の家にも泊まりにくるようになった。

今では寝具類を俺の家に持ち込んだりして、居場所を作り出している始末だ。

散らかしたら文句を言おう。

ナルトさんが俺の家に泊まり出すようになって何日か経った時、

「とっておきの術を見せてやるんだってばよ！」

と、ナルトさんが独自に開発した術を見せてもらう事になった。普通、そういうオリジナルな術の類は仲間内でも秘密にしておくもののだが、ナルトさん曰わく

「日頃お世話になってるお礼なんだってばよ！」

らしい。

その術の名前は『お色気の術』なるもので、ナルトさんは印を結びその術を披露した。

そして、俺はその術を目の前で見て衝撃を受けた。術そのものは変化の術であったが、俺の目の前にはボンッキュッボンッ！な金髪美女がなんと全裸で現れたのだ。

俺はいささか興奮してしまい、目の前にいるのはナルトさんだとい

う事を忘れて金髪美女に飛びかかり、気が付いたらマウントポジションをとっていた。

マウントをとられた金髪美女はとっさにブリッジをしたので、俺のマウントポジションはあっけなく崩され、その勢いで頭を柱にぶつけてコブを作った。

「サ、サスケ！今ちよっと目がおかしかったってば！」

金髪美女は元のナルトさんに戻っていた。

柱に頭を強打したので、俺の興奮も収まっていた。

「いってえ……。そんな事よりナルトさん！今の術マジでパないっす！イルカ先生とか絶対にイチコロっすよ！」

恥ずかしさを隠すためもあり、ごり押ししてみた。

次の日、鼻血を流しているイルカ先生に怒られるナルトさんの姿がアカデミーにあった。

またある時、例によりナルトさんが無断で家に泊まりに来ていたので、2人で居間でくつろいでいた時の事だ。特にする事が無かったのでテレビを見ていると、TVHが『密着クノイチ24時』という特番をやっていた。

ちなみにTVHとは『テレビ火の国』という火の国の民放だ。

クノイチ系の番組が多い事が特徴で、若いクノイチを任務で出演させてその出演料を得るという、財政難に苦しむ木の葉の里が編み出した苦肉の策だ。

当然、里の秘密に関わるような事は放映されていないので安心して欲しい。

しかしこの事は、木の葉は平和ボケしていると他国から言われる一

因でもある。

番組では若いクノイチが任務を行う時の姿や、非番になった時の姿などが映し出されている。

俺とナルトさんは居間でぼーっとしながら番組を眺めていた。

「ん？」

「木の葉の里のコスってかなりエロいっすよね？」

「ん」

ナルトさんは鼻をほじりながらしばらく考えているようだった。

「……サスケエ」

「はい」

「俺の中での最強は、風隠れのコスなんだってば」

「……」

風隠れのクノイチはまだ見たことがないのでよくわからなかったが、ナルトさんは俺より高い位置にいますという事が伺い知れた夜であった。

イルカ先生

「……昨日、俺は何て言った」

「宿題をやってこいって言いました!」

「おお、そうだったな。で、お前は何て言った」

「やってきますって言いました!」

「……で、やったのか?」

「やってないっす!……痛い痛い痛い!」

イルカ先生から職員室に呼び出された俺は、頭をグリグリされていく。

理由は上の会話からわかるように、宿題をやってこなかったからだ。成績こそパツとしない俺だが、宿題とかは真面目にこなす生徒だった。

しかし、あの事件以来なぜだか無性に誰かに怒られなくなったりする。

怒られたりすると独りじゃないような気がして安心できるんだ。Mではないと思ってたんだけど、案外Mなのかもしれない。病んでるのかな、俺。

そんなわけで、俺は宿題をわざと忘れてイルカ先生に怒ってもらっている所だ。

ああ気持ちいい。

イルカ先生は、やっぱりいい先生だと思う。

他の先生は俺の事を『うちは一族』として見ている。

自分で言うのも何だけど『うちは一族』は里の中でも有名な一族なんだ。

優秀な忍者を多く排出している一族だけに、当然俺もその中の1人として見られてしまうんだ。

しかし俺の実力はこの通りパツとしないもんだから、期待されていただけに落差というものは激しい。

それでも他の先生達からは俺と接する場合、遠慮のようなものを感じとれた。

特にあの事件以来はその傾向が顕著に現れていると思う。

まあ、事件が事件だけに気を使ってしまうのもわかるんだけどね。死してなお教師達に遠慮させるとは恐るべし、うちはブランド。

だけど、イルカ先生の場合はそういう遠慮とかいったものはまったく無く、普通の生徒の1人として俺に接してくれている。

悪さをすれば俺の事を怒ってくれる存在なんだ。

「……まったく、約束を破るなんて事していると忍の世界では生きていけないぞ。」

「……ごめんなさい」

「まあ、いい！宿題しないで昨日は何かやってたのか？」

「……家事とかです」

『怒られるためにわざとサボってます』だなんて言えない。
しかも昨日は家事もサボっている。
やる気が出ない時ってあるよね。

「……そうか」

「そうなんです」

「……厳しい事を言うが、アカデミーの宿題はこれから忍者として生きていくのに必要な内容だってあるんだ。……大変だが、ちゃんとやらないと、な」

イルカ先生は気まずそうな顔をしながら言葉を続けた。

大人の人でこんな風に俺の事を心配してくれるのは、多分この人だけだろう。

俺がクノイチだったら惚れてまうところやで。

「……そうだ、サスケ。今日の夜はヒマか？」

「ええ!？」

「いや、ラーメンでも奢ってやろうと思ってたんだが、何でそんなに驚くんだ？」

「あっ! ヒマです! 超ヒマです!」

「……家事とか大丈夫なのか？」

「大丈夫です！」

「そっか。じゃあ、一樂のラーメンを奢ってやるよ。……その変わり、昨日の分の宿題はきっちりやってもらうがな」

その後、イルカ先生に宿題をやって持ってくるように言われ、俺は職員室を出た。

ラーメンを奢ってもらうなんて初めてだ。

まだ見ぬ一樂のラーメンに心を踊らせながら教室へと戻る。

そうと決まったら宿題などさっさと片付けてしまおう。

教室に戻って宿題をしていると、ヒマそうにしているナルトさんが近寄ってきた。宿題に取り組んでいる俺を見て不思議そうな顔をしている。

「何でそんな事やってんだってば？」

「いやあ、宿題を忘れちゃったんすよ。さっきイルカ先生に怒られたんで……」

「あー、そう言えば俺も今朝その事で怒られたような気がするってばよ」

やっぱりこの人は猛者だ。

「マジっすか……宿題やったらラーメン奢ってくれるって言われなかったっすか？」

「え？ 何それ？」

「宿題やって持ってきたらラーメン奢ってくれるってイルカ先生が……」

「聞いてない、聞いてないってばよ！何それずるい！教師が生徒を見てものを言ってるってば！」

「お、落ち着いて下さい。ナルトさんも宿題やって持ってたなら奢ってもらえるかもしれませんよ！」

「ええ。俺、誘ってもらってねえし」

「ナルトさんは奢ってもらったの1回や2回じゃないからですよ。ってか、一緒に行きましょ！宿題やって！」

「ええ、厚かましい奴って思われるの嫌だし」

「絶対大丈夫っすよ！そんな事は気にしないっすよイルカ先生なら！奢ってくれますって！独身だし！」

宿題を持ってきたらラーメンを奢るなんて事をしてたら、イルカ先生はすべての生徒にラーメンを奢らなければいけない。イルカ先生の口から出た『ラーメンを奢る』は、職員室での会話の中で家族のいない俺に気を使ってしまったのだろう。

イルカ先生は同じように家族のいないナルトさんにも気にかけている。

独身だからお金には困らないはずだ。

絶対にナルトさんも奢ってもらえる！

そう確信した俺は女子みたいな事を言って駄々をこねているナルト

さんを強引に説得し、一緒に宿題に取りかかった。

休み時間中にいそいそと机に向かって宿題をしている俺達を見て、何人かの同級生は不思議そうな顔をしていた。

多分、ナルトさんが机に向かっていているからだと思う。

そんな中、どうしても気になってしまふ視線を感じた。

勉強をしているナルトさんを見た大半の生徒は、びっくりした表情のあとに外の天気を気にする。

これは普通の反応だ。

しかし、その視線の主は教室の扉に体を半分くらい隠しながらずっとこっちを見ている。

黒髪ショートの子だ。

『俺の事を見てんじゃね?』と思って手を振ってみたら、まったく反応はしなかった。

視線の先にいるのは間違いなく俺とナルトさん。

『俺の事は眼中に無いんじゃない?』と思って変顔をしていたら、たまたま女の子の後ろを通ったサクラちゃんにガンを飛ばされた。

黒髪ショートの子の方は、俺の変顔にはまったく気付かずこちらを見続けている。

だとすると、視線の先にいるのはナルトさんしかない。

「……ナルトさん、見てますよ」

「今 暗号の解説に忙しいんだってば! 邪魔しないでくれってばよ!」

「……それ暗号じゃなくて普通の漢字です。そんな事より、さっきからずっとナルトさんの事を見てる女子があそこに居るんですけど……」

目配せでナルトさんに女の子の位置を教える。

ナルトさんがその方向に振り向くと、女の子はサッと扉に隠れてしまった。

俺の時もそういうリアクションが欲しかった。

「知り合いですか？あの女子」

「んー。ヒナタかあ」

視線の主は日向さんとこのヒナタちゃんだった。

日向宗家の長女という事で名前だけは知っていたが、実際に姿を見たのは初めてだ。

それから2、3回ほど

ナルトさん振り返る。

ヒナタちゃん隠れる。

のループを繰り返した。

「ナルトさん、楽しんでないですか？」

「そんな事は無いってばよ」

どうだか。

しかし、ナルトさんを見るヒナタちゃんの視線は好奇心とかではなく、完全に恋する乙女の眼をしている。

イチャイチャパラダイスを愛読している俺にはわかる。

「……あの女子、ナルトさんの事好きなんじゃないんですか？」

「まあ、そんなとこだってば。」

知っててやってんのかよ。

ナルトさんと連み初めてしばらく経つが、こうゆう事に関しては鈍感な人だと思っていた。ナルトさんって意外とワルなのかもしれない。

人は見かけで判断してはいけないという事を知った。

結局ヒナタちゃんやナルトさんを見ているだけで近寄って来ようとはせず、俺達は宿題を終わらす事に勤しんだ。

アカデミーの1日が終わろうとする頃、休み時間を見計らって取り組んだ宿題もようやく終了した。

終わらせた宿題をイルカ先生に提出しに行く。

ナルトさんもいるのでイルカ先生は少し困ったような顔をしたが、めでたく一緒にラーメンを奢ってもらえる事になった。

『他の生徒にはこの事は内緒だぞ』と口止めされた。

イルカ先生はまだアカデミーに用事があるそうなので、一楽で待ち合わせする事になった。

俺とナルトさんは特にする事もないので先に一楽に行って店先でイルカ先生を待つ事にした。

辺りは日も沈み始め、夕焼けに照らされていい感じな夕方になって

いる。

俺は1日の中でこの時間の風景が一番好きだ。

一楽からはラーメンの美味しそうな匂いが漂っている。

イルカ先生を待っている間、俺はどうしてもナルトさんに聞きたい事があったので、思い切ってその事を聞いてみる事にした。

「……俺、最近わざと宿題をやらなかったりするんですよ」

「……」

「そういう事して怒られるのって、快感じゃないですか？」

「っ！！」

聞いた瞬間ナルトさんは大きく目を見開いて俺の方に振り返った。その表情は嬉々としているように見える。

「サ、サスケ！」

「やっぱりナルトさんも！」

あの事件が起きる前はナルトさんが問題行動を起こして怒られているのを見て『何であんな事ばかりかするんだろう。』と思っていた。でも、今はわかる。

誰かに見ていてもらいたいんだ。

独りじゃないって感じたいんだ。

俺の場合は宿題をわざと忘れるっていう程度だけど、ナルトさんの問題行動はたまに洒落にならない事をしたりする。

ナルトさんの過去に何があったのかは聞かない事にしてるから知らないんだけど、俺なんかよりもっと酷い目に遭っているのかもしれない。一族皆殺しなんて滅多に聞かない話なんだけど、もっと酷い目に遭っている人だってきつというんだ。

自分より酷い立場の人を見て安心するっていうのはあんまりよろしく無いって思うけど、それで安心している俺がいるっていうのも事実だ。

辛い時は上じゃなくて下を見る。

それで少しでも安心できるなら、それでいいじゃないかと思う今日の頃。

この事をナルトさんに言ったらきつと激怒すると思う。

ナルトさんは前向きな人だから。

前向きだからこそ、あそこまでハチャメチャな問題行動を起こしているのかもしれない。

今はただ、ナルトさんと薄っぺらい部分だけでも共感できた事が素直に嬉しかった。

一樂の店先でナルトさんと一緒にはしゃいでいると、ついにイルカ先生が現れた。

ブッチされたらどうしようと一瞬だけ思ってしまったけど、小走りしてきたイルカ先生を見たら一瞬でも疑ってしまった自分が恥ずかしい。

3人そろったのでいよいよ一樂に入る。

待ちに待ったラーメンだ。

ふと、家族でラーメンを食べた事なんて今まで無かった事を思い返す。

俺んちはそういう家だった。

今はもう家族は1人もいない。

イルカ先生の事は知らないけど、奇しくもナルトさんにも家族はい

ない。

こうして3人そろってこの瞬間にラーメンを食べる事が、何か運命的なものを感じる。って思っとく。

注文したラーメンが3人の目の前に出される。店先でさんざんおいしそうな匂いだけ嗅がされていたので、俺とナルトさんは物凄い勢いでラーメンを食べ始めた。

ラーメンを食べながらイルカ先生は、色々な話を話していた。アカデミーの事や里の事、俺達の事も。

でも、ラーメンに夢中だったのではほとんど聞いてなかった。イルカ先生ごめんなさい。

「いやゝ、うまかったってばよ！」

「ごちそう様でした！」

ラーメンを食べ終わり、一楽を後にする。

イルカ先生とは帰る方向が違うので店先で別れる。

帰り際、

「……さっきの話の続きだけど、お前たちは俺の自慢の生徒だ。忍者になったら今よりもっと大変な事があるかもしれない。負けないように頑張れよ！」

と言われた。

俺はイルカ先生の話をちゃんと聞いておくべきだったと後悔した。俺の隣で

「わかってるってばよ！」

とか言ってるナルトさんも聞いてなかったから、絶対にわかっていないはずだ。

俺もとりあえず

「はいっ！」

と、できる限り真剣な表情をして返事をした。

そんな俺達を見たイルカ先生は2、3度頷くと、家の方へと歩いていった。

俺とナルトさんは一樂の店先でイルカ先生の姿が見えなくなるまで見送った。

辺りは夕方というには薄暗く、夜というにはまだ早い感じだ。時折吹いてくる風が気持ちいい。

イルカ先生と別れた後、俺とナルトさんは一緒に家に帰った。

ナルトさんちは一樂からだとは途中まで一緒になる。

さっき食ったラーメンの事やイルカ先生の事とか話ながら歩いていった。

そして、俺はどうしてもナルトさんに聞きたい事がもう一つあったので、意を決して聞いてみた。

「……ナルトさん」

「ん？」

「『A B C D』って知ってます？」

「ま、まあ、知ってるってばよ。」

「ナ、ナルトさんは、どこまでやった事あるんすか」

俺の問いを受けたナルトさんは空を見上げた。

今日は曇りなので何も見えないはずんだけど、ナルトさんは何も言わないまま空を睨み続けている。

木の葉の通りの電灯には光が付き始め、虫がブンブンと飛び回っていた。

「……サスケエ」

「はい」

「……野暮な事は、言いたくないんだってばよ！」

「……はあ」

他の人が言えば『逃げたな』と思った事だろう。

でも、今のナルトさんはそう思わせないチャクラのような何かに包まれていた。

それから特に会話をする事なく、家に向かって歩き続ける。

しばらく行くと分かれ道となり、俺とナルトさんは軽く挨拶をしてそれぞれの道に向かう。

途中、振り返ってナルトさんの方を見たら、ナルトさんも俺の方を見ていた。

遠くで小さくなっているナルトさんに、なんとなく手を振ってみる。するとナルトさんはとても大きな声で

「サスケエ——！！！！」

と叫び出した。

どうかしちゃったのかと思ったけど、俺もノリで手を振りながら大声で叫んだ。

「ナルトさ〜ん!!!!」

「サスケ、エエ——!!!!」

「また明日〜!!!!」

近所の犬が反応して遠吠えし始めたので、少し恥ずかしくなってきた。

大きくジャンプして手を振ったあと、ダッシュで家に向かう。背中からはナルトさんがまだ何か叫んでいる声が聞こえる。

俺は走りながら今日という1日を考えてみた。

宿題忘れて怒られて、先生に奢ってもらったラーメンを食べた。ナルトさん叫ぶ。

言葉にしたら呆気ない平凡な日常の1コマだけど、大切な思い出として残りそうな気がした。

そんな1日だった。

幻術

幻術とは幻覚、幻聴等を見せる忍術の総称だ。

通常の幻術の場合、術者は相手の五感を利用してそのいずれかに対しチャクラをねじ込む。

そして、五感を狂わせる事により幻覚や幻聴を見せる。
凄いいし手になると相手を自分の意のままに操ったりする事もできるらしい。

アカデミーの授業では人間の五感のうち、視覚を利用する幻術を教えている。

なぜかという、幻術は視覚から入るのが一番わかりやすいからだ。

幻術の種類は多岐にわたるため、全ての術を修めようとするとなんになっちゃう。

なので、幻術の基本として視覚から入る幻術をアカデミーで習うのだ。

視覚を利用する幻術の基本は、自分の目を媒介として術をかける。
何を言ってるかわからないでしょ？

教科書に書いてあった事だから俺もよくわからない。

ただ、相手の目に直接チャクラをねじ込んだりするんじゃない、印を結んでチャクラを練ったらずは自分の目にそのチャクラをためる。

そして、相手と目を合わせた時にズドンって感じた。

自分の目に溜め込んだチャクラの質や量で、幻術の効果は変わってくる。

親から怒られる時、『ちゃんと目を見て話さない』って言われた事ない？

それは実は幻術で、本人が自覚しないままに本当の事を自白させられているのかもしれない。

忍者の家庭に産まれた人は注意しよう。

アカデミーで基本として習う『視覚から入る幻術』は、『金縛りの術』って言う術。

幻覚とかは見えないんだけど、一時的に相手を動けなくしてしまう術だ。

視覚以外から入る事も当然できるらしいんだけど、アカデミーでは教えていない。

色々難しいからなんだって。

そして今、アカデミーが誇る熱血教師、海野イルカ先生が教師となつて『金縛りの術』の授業が始まっている。場所は昼下がりの校庭だ。

「よし、みんな復習はやってきてるな。今から『金縛りの術』の実習をやるぞ。2人1組を作るように！」

「ナルトさん、お願いします」

「まかしとけてばよ」

イルカ先生の指示により、俺は近くでぼーっとしていたナルトさんと組んだ。

公園で初めて声をかけた時から、俺とナルトさんは一緒に連む事が多くなっていた。

年上であるかもしれないナルトさんに敬意を表して敬語でしゃべってはいるが、ノリは完全に同級生のノリになっている。

肝心の年齢は本人が知らないので謎のままだ。

「……前の授業で言ったように、幻術はとても危険な術だ。ふざけたりせずに組んだ者同士で術をかけてみる！」

「じゃあナルトさん、俺から先にやりますね」

「どんどこいってば！」

印を結びチャクラを練る。

練り上げたチャクラは、まず自分の目へ。

そしてナルトさんと目を合わせて、ズドン。

俺と目があつたナルトさんの体は、感電した時のようにビリビリと小刻みに震えている。

どうやら成功したようだ。

鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしたまま震えているナルトさんを見てみると、笑いが込み上げてくる。

しばらくその状態が続いていると、俺の『金縛りの術』は解けた。

「……フフフ」

「いやあ、サスケの幻術はなかなかのもんだってばよ。」

幻術をかけられた人というのは、五感から乱されるためチャクラはぐちゃぐちゃの状態になっているらしい。

幻術を解くには大きく分けて3つの方法がある。

1つは、五感かチャクラに刺激を与えて無理矢理にでも普通の状態に戻すという方法。

喝を入れるなんて言葉があるけど、まさにコレだね。人から喝を入れてもらったり、体が動くなら自分で刺激を入れたり、やり方は色々ある。

もう1つは『幻術返し』という高等忍術で、かけられた幻術をそのまま相手に返すという方法。

『幻術返し』は、視覚から入ってくる幻術に関して言えば『鏡』の状態になる事だ。

相手の幻術を目で受けて反射し、相手の目に返す。

口で言っちゃえば簡単なんだけど、瞬時に相手の幻術チャクラの波長と合わせないといけないから凄く難しいんだ。

失敗すればモロに幻術をくらう事になってしまう。

残りの1つは、時間で解決する方法。

人間の体は病気やケガと一緒に、チャクラが乱れれば元の状態に戻ろうとする力が働く。今のナルトさんのように幻術が解けた事だ。幻術の強弱やその人の持つ耐性とかで、元の状態に戻るまでの時間は変わってくる。

「そんじゃ、次は俺の番だってばよ！」

首をコキコキと鳴らした後、ナルトさんは印を結びチャクラを練った。

あとは俺の目を見て、ズドン！

「――！！！！」

「どんなもんなんだってば！……あれ？サ、サスケ？サスケの様子

が……い、息をしていない！サスケが白目むいて泡吹いてるってばよ！」

「ナルトオー！何やってんだお前え！オイ！サスケ！……ダメだ、完全に落ちてやがる！誰か紅先生呼んで来い！」

気が付いたら医務室のベッドの上だった。

点滴は打たれてなかったが、鼻にはまたしても管が突っ込まれていた。

医務室の先生から話を聞いたら、ナルトさんの幻術により俺は呼吸が停止してしまっただけらしい。

かけられたのが普通とは異なる変な幻術でしかも強烈であり、イルカ先生では対処しきれず幻術の専門家である紅先生により幻術を解いてもらったとの事だ。

そのまま気絶していた俺は大事をとって医務室に運ばれて、現在に至るという訳だ。ナルトさんに幻術をかけられて気絶するまでの事は覚えてない。

『体の方には異常はないけど、今日はそのまま寝てなさい』と言われたので、授業が終わるまで寝ている事にした。

鼻に突き刺さってる管は医務室の先生に抜いてもらった。

鼻血は出なかった、さすがプロ。

医務室の時計を見れば、時刻はまだ2時ちょいすぎ。

幻術の授業は昼イチだったので、気絶してから目が覚めるまであまり時間は経っていなかったようだ。

『今日はいただきだぜ』とか思っていたら、医務室に来訪者がやってきた。

「……サスケエ」

「……ナルトさん」

来訪者はナルトさんだった。

ナルトさんは申し訳なさそうな顔をしている。

「……ごめんな、大丈夫か？」

「大丈夫っす」

「……良かったらコレ」

ナルトさんはカップラーメンを差し入れてくれた。ここでどうやって食えってんだ。

それから俺とナルトさんはしばらくの間、紅先生の服装について取り留めのない話をした。

時刻は2時半を回ろうとしていた。

「……だからアレはわざと見せてんだってばよ！」

「アレがわざとならビッチじゃないっすか。」

「あ、もうこんな時間か。じゃあサスケ、また来るってばよ」

「期待しないで待ってますよ……あっ！ナルトさん！」

「むっ」

「ナルトさんの幻術、ハンパなかったっすよ！あれはもはや禁術ですよ！」

「……サスケ。わ、わかってるってばよ！じゃな！」

ナルトさんは医務室の窓から飛び出して行った。
完全に次の授業には遅刻している。
ホントにわかってんのかな？

「……元氣そうじゃねーか」

ナルトさんと入れ違いでシカマルが医務室にやってきた。

「……いただきだぜとか思ってたんだろ」

「そ、そんな事ないってばよ」

「なんでナルト化すんだよ」

相変わらずシカマルは鋭い。

しかし、ナルトさんといいシカマルといい、わざわざ医務室にお見舞いに来てくれるなんて……。

俺は改めて同級生達に恵まれている事を実感していた。

「どうせヒマしてんだろ。ホレ、俺がさっき作った詰将棋だ。7手詰み、五分で出来たら二段でところだな」

「お、おう……ありがとな」

「そんじゃ、お大事に」

シカマルは紙きれを俺に渡すと医務室から出ていった。
紙きれに書かれた詰み将棋は、シカマルらしい差し入れだった。

誰もいなくなった医務室のベッドの上で、俺は時間をつぶすべくシカマルから差し入れてもらった詰将棋を始めた。

……むずいぞ。

……この金、マジ邪魔。

……そろそろサクラちゃんとか来ねえかな。

そんな事を考えていたら、イルカ先生が入ってきた。

「……なんすか」

「心配して来たのに、『なんすか』はないだろ」

イルカ先生の手にはりんごが1つ握られている。
初めてまともな差し入れを見たような気がする。

イルカ先生は俺の体調の事を心配して来てくれたようだ。体調はまったく問題ないと言うと、それからは紅先生の彼氏について取り留めのない話をした。

「……惜しかったすね」

「ば、馬鹿っ！俺は紅先生の事は別に何とも思っていないぞ！」

「は〜い」

「むむむ。あつ、そろそろ授業だ。……じゃあな、サスケ。お大事に」

イルカ先生はそう言うのと、医務室の入り口の方に歩いていった。

「あつ！サスケ！」

「なんすか」

入り口から出ようとした時、何かを思い出したかのようにイルカ先生はこちらに振り返った。

「最近、ナルトと仲が良いみたいだな」

「ウス」

「……今日の事はナルトには厳しく言っておいた。これからもあいづとは仲良くしてやってくれ」

「……はい」

イルカ先生は医務室を出て行った。

落ちこぼれと目されているナルトさんの事を、イルカ先生はなんだかんだで気にかけている。

このアカデミーの教師の中で、ナルトに限らず一番生徒の事を考えている人なんじゃないんだろうか。

手に持っていたリングはそのまま持ち帰ってしまったけど。
なんだったんだろ。

時計を見たらいい時間になっていた。

アカデミーの授業も終わり、みんな家に帰る頃だ。

そろそろ俺も帰ろう。

医務室の先生にお礼を言うと、俺は医務室を後にした。

一旦荷物をとりに教室へ戻ってから、アカデミーの門をくぐった。

「大丈夫？ サスケ」

門を出た所で声をかけられたので振り返ると、そこにはグラマラス
かつ妖艶でエロい体をしているクノイチ、紅先生が立っていた。

やべえ、近くで見るとやっぱすげえ迫力だわ。手にはリングが握ら
れている。まさかね。

「ひどくやられてたようだけど……」

俺と紅先生では身長差があるため、紅先生は前かがみになって俺の
顔を覗きこんできた。

やべえ、反則だって、そのポーズ。

「だ、大丈夫っす！」

「そう、良かったわ。じゃあ、気を付けて帰りなさいね」

「あっ！ 紅先生！ ちょい待って！」

アカデミーの校舎の方へと歩き出した紅先生を呼び止める。

「き、今日は、ありがとうございました！」

「……フフ、どういたしまして」

「あ、あの！」

優しく微笑んだ紅先生に、俺はどうしても聞きたい事があった。

俺はパツとしない男だが、同じ過ちは繰り返さない。

こういうタイミングで『A B C D』は言っではいけない。

よし、冷静だぞ俺。

俺は紅先生に聞きたかった数々の疑問を、堰を切ったかのように言い放った。

「く、紅先生は、何でそんなにエ、いい体をしてるんですか？何を食べたらそんな体になれるんですか？服装とかも凄くエ、魅力的だし……。やっぱ見せてもいいやつをはいてるんですか！？てか、彼氏いるんすよね？体すか？その体でゲットしたんすか？あっ！怒らないで下さい！先生の体は幻術みたいに魅力的だって事です！……ああっ！幻術！先生は幻術得意ですよね！幻術で今彼ゲットンすか？あっ！お帰りですか！彼氏の元に！へへっ！お疲れっした！……いてえっ！」

——このクソガキ！今すぐ張り倒して黙らせてやりたい所だけど、相手は子供。落ち着け私。

あゝ、黙って聞いてりゃいい気になりやがってこのガキ。

途中からずーっと下半身を見てくるし、子供のクセに気味が悪い！……だいたい何でアスマと付き合うのに幻術使わなきゃいけないのよ。騙してるみたいじゃない！

もう酒よ酒！今日は帰って酒飲んで寝よ。
……でも頭にきたから一発だけ殴っとこ！

アカデミーの校庭にスパーンと気持ちのいい音が鳴った。空気が乾燥しているのでその音は校庭中に響き渡る。
季節はもう、冬だった。

卒業

俺の長かったアカデミー生活に、もうすぐ終止符がうたれようとしている。

卒業シーズンだ。

アカデミーの卒業は卒業試験問題というものが出され、それに合格すれば晴れてアカデミー卒業となり、忍者としての第一歩を踏み出せるんだ。

今年の卒業試験問題は分身の術だ。

3体以上の分身に成功すれば合格となる。

俺の分身の術の限界ラインは3体なので、ギリギリセーフだ。

4体じゃなくて良かったぜ。

試験問題が発表された時ぐらいから、ナルトさんの様子がおかしくなっていた。

ナルトさんは忍術ができない。

日に日に元気がなくなっていくナルトさんを見ると、何ともいたたまれない気持ちになる。

何とか力になってやればいいんだけど、そういうのは本人が一番嫌がりそうだ。

ナルトさんが放課後に必死で分身の術の練習に取り組んでいる姿を見守る事ぐらいしかできなかった。

そして試験当日。

試験のやり方は1人ずつ試験官であるアカデミーの教師に術を見せ

るというやり方だ。

待っているうちに俺の番が来る。

俺は結構ノミの心臓なので、試験会場に入る前に深呼吸をする事を忘れない。

試験会場に入ると、イルカ先生とミズキ先生という人が椅子に座っていた。

どうやらこの2人は試験官のようだ。

ミズキ先生という人もアカデミーの教師の1人で、笑顔が素敵で優しいから生徒受けてるのが良い先生だ。

俺もあの事件後からはあまり話さなくなってたけど、それまでは良くしてくれてたような気がする。

「それでは、分身の術3体以上。始めて下さい」

イルカ先生が試験の開始を告げる。

いつもは気さくな感じなんだけど、やはり今日はいつもとは違う雰囲気だ。

一応、人生がかかってる事だしね。

俺は印を結び、チャクラを練った。

精神を集中して作り出した分身は3体。

緊張したけど、まあまあのデキだと思った。

「……何か1人おかしい気もするけど、まあ、いいだろう。うちはサスケ、合格！おめでとう！」

イルカ先生から合格を言い渡される。

1人おかしいと言われたので分身を見たら、確かに1人だけ変顔し

てる奴がいたのでおかしかった。
俺は術を解き、試験場を出て教室へと戻る。

教室では既に合格した者が待機していて、互いに合格を喜びあっている。

試験を待つ者は違う教室で待機だ。

ナルトさんの姿は見えなかった。

「合格したみてーじゃねえか」

「……シカマル」

教室でナルトさんを探していると、シカマルに声をかけられた。
ここに居るという事は、シカマルも合格したという事だ。

「……3体、ギリギリだったんだろ」

「い、いや、楽勝だったってばよ！」

「お前、それクセになってるな。ま、これからも気楽に行こうや」

相変わらずシカマルは鋭い。

核心を突く言葉だ。

シカマルらしい祝いの言葉を聞きながら、アカデミーで過ごした日々を思い出す。

なんだかんだで一番最初に友達になったのはシカマルだった。

ノートで作った将棋セットを何度となくイルカ先生に没収されたのも、今はいい思い出だ。

これから忍者として生きていくとなると、別々の道を進んで行く事になるかもしれない。

そう思うと感慨深いものを感じる。

「シカマル！将棋しようぜ！」

「このタイミングでかよ……別にいいけどよ、でも盤とか持って来てねえだろ」

「……三四歩」

「まじかよ、九六歩」

なぜかいてもたってもいられなくなって、シカマルにエア将棋を挑む。

相変わらず初手は端歩をついてくる。小癪な。

俺は対シカマル用として作り出した『うちは式鬼殺し』で挑んだ。

シカマルと将棋をしながら、教室にいる生徒達を見渡す。

チョウジはセットなので、エア将棋をしているシカマルの隣で相変わらずお菓子を食べてる。

試験の日までお菓子を持ち込むなんてホント悪だな、チョウジ。

シノの姿も見つけた。

仲間に入りたそうにこちらを見ている。

悪いけど将棋は3人じゃできない。

次に相手してやっか。

他にもいのちゃんやサクラちゃんの姿も見ることができた。

ヒナタちゃんも居る。ヒナタちゃんはキョロキョロと誰かを探している様子だった。

多分、俺が探してた人と同じ人を。

「……10秒」

いつの間にか近くに来ていたシノがカウントダウンを始めやがった。1分将棋となってしまうた俺とシカマルの対局は、もはや将棋と言えるものでは無くなっていた。

「そこ2歩だぞ」

「自分の駒とってどうする」

「4四馬、王手飛車だからな」

相手であるシカマルからダメ出しをくらう有り様。そして、

「……同龍、ハイ詰み」

途中からさっぱり訳がわからなくなってしまったのだが、シカマルがそう言うならきつとそうなんだろう。

アカデミー中を通して、結局シカマルには一度も勝てなかった。

「……シカマル！」

「お、おう、どうした急に」

「また将棋しような」

「……おう」

そんなこんなでシカマルとのエア将棋は終わり、さっきから仲間に

入りたそうだったシノとエア将棋を始める。

シノの棋力は俺と五分なので、なかなかいい勝負になりそうだ。
ナルトさんの姿は教室にはまだ無い。

シノとのエア将棋は途中から2人とも訳がわからなくなってしまい、
勝敗はジャンケンで勝った方という事に決まった。
チョキ出したら負けた。

その後はひたすら同級生とだべったりして時間を過ごす。

最後になるかもしれないからと、勇気を振り絞っと元カノのサクラ
ちゃんに声をかけたら、「……ちゃんと目え見て話さないよ。」

と言われ、それからなぜか足の震えが止まらなくなってしまった。

「……チイツ!!」

ガクガクしている俺を見て舌打ちをくれた後、サクラちゃんはどこ
かに行ってしまった。

これが『トラウマ』ってやつなのかもしれない。

待てども待てどもナルトさんの姿は教室には見えず、時間は淡々と
過ぎていった。

「よし!合格おめでとう!明日は下忍となる前に、班編成を発表す
る。遅れないようアカデミーに来るように!」

アカデミーの1日が終了しようとする時間になった頃、教室に教師
が入ってきて明日の連絡を合格した生徒達に伝えた。

卒業試験は全て終わったようだ。

ナルトさんの姿はやはり教室には無かった。

帰る支度をして、教室を出る。

校庭では多くの保護者達が我が子の合格を祝っている光景が見える。あの事件が無かったら、もしかしたら俺も父さんに……。

暗い考えが脳みその中に回りだしたので、頭を左右に振って無理やり違う事を考える。

『最後だからもう1度くらい紅先生のパンツ見てえな』

って考えてたら、校庭の隅の方でナルトさんの姿を発見した。

ミズキ先生と何か話しているようだ。

俺はナルトさんに駆け寄った。

「ナルトさん！」

「……サスケ」

ナルトさんの表情は、思っていた通り『とても悲しい顔』の1歩手前だった。

「……じゃあね、ナルトくん」

ミズキ先生はウィンクして校舎の方に戻っていった。

2人だけになった俺達の間にしばらく沈黙の空気が流れる。

「お、俺、試験ダメだったってばよ！」

沈黙を先に破ったのはナルトさんの方だった。

無理に明るく振る舞っているようだ。

こういう時は同情してはいけない。

「知ってますよ、来年もガンバ」

「……てめえこの野郎！」

「痛い痛い痛い……」

ナルトさんはうまくノってくれたようだ。
本心からでは無いとしても……。

ナルトさんと校庭の隅でふざけあっている間、何人かの保護者がこ
っちを見て何か言っているようだったが、耳には入らなかった。

ナルトさんとうとうやってふざけあえるのも今日で最後だと思うと、
とても静かにしてなんかいらなかった。

「そこは痛いって！……ナルトさん」

「……サスケ」

拘束されてた手首の関節を解かれると、俺はナルトさんに向き直っ
た。

ナルトさんは真っ直ぐな眼でこちらを見ている。

俺は何も言わず右手を出した。

「な、何のマネだってばよ」

「俺、ナルトさんと一緒に過ごせてよかったです」

「……」

「『夢』諦めないで下さいよ」

「……サスケ」

『火影』 ナルトさんは事あるごとに『絶対に火影になってやるってばよ!』と口にしていた。

忍者を志した者なら誰しも1度は願う夢。

俺達くらいの年頃になれば、様々な現実というものを知って、そういう類の事は自然と口にしなくなる。

でも、ナルトさんは憚る事なく声を大にして『火影になる!』と宣言していた。

周囲の反応は『忍術を使えない奴が何を言ってるんだ』『目立ちたいだけだろ』と冷めたものだった。

俺も最初はそう思っていたが、周囲の反応お構いなしに夢を宣言し続けるナルトさんの姿は、うまく言えないけど『カッコよく』見えた。

いつしか俺は、ナルトさんの語る『夢』が現実のものになると信じるようになっていた。

「俺、ナルトさんが火影になるって信じてますから」

「……」

「1足先に忍者になりますけど、いい夢見させて下さいよ!」

ナルトさんは差し出された手に何も言わず手を重ねた。

握手だ。

端から見ればたんなる握手。

そしてそれ以上、俺は何も喋る事はできなかった。が……

「……からの！」

「っ！ 痛い痛い痛い！」

手首の逆技をとられた。

そしてまた、校庭の隅でナルトさんとしばらくの間ふざけあう。

「……だからいてえっつの！」

「……へへ」

「あゝいてえ……ナルトさん」

本日2度目となる関節の拘束を解かれた俺は、手をブラブラさせながら辺りを見回す。

校庭に大勢いた保護者や生徒達の姿は既に誰もいなくなっていた。遠くで聞こえるカラスの鳴き声が、時刻は夕方になっている事を物語る。

「ところでナルトさん。ミズキ先生と何か話してたようですけど、何だったんすか？」

「えっ！？ べ、別に、昨今の国内外情勢とかだつてばよ」

「よくそんな話ができますね、それより今日はうちに来ますか？」

「い、いや……今日はちよつと止めとこうかな」

色々と会話の中に怪しい点があったが、あえて触れないでおく事にした。

男には自分の世界があるのだ。

「そうすか……じゃ、ナルトさん！」

「……」

昨日までなら『また明日』と言えたけど、今日からは違う。

寂しい気もするけど、ナルトさんが死んでしまうっていう訳じゃない。

多少は今より疎遠になるかもしれないけど、一楽に行けば会える時もあるだろう。

俺は強引に自分の思考を前向きな方向に持っていった。

『じゃあ』と軽く会釈をして、アカデミーの壁に飛び乗る。

壁から降りようとした時に、ナルトさんと目が合った。

何か言いたげにしているようだった。

「……ナルトさん！」

「……」

ナルトさんは何も言わないままだ。

「一緒に忍者になりたかったんですけど……
ドンマイっす！」

ナルトさん！

『また会いましょう!』」

ナルトさんは最後まで何か言いたげだったが、結局何も言わなかった。

俺はその言葉を最後に、できる限りナルトさんを見ないようにしてアカデミーの壁から外に飛び降りた。

アカデミーから外に出ると、辺りの民家からは美味しそうな晩御飯の匂いが漂ってきた。

誰もいない俺んちまで、まっしぐらに走って帰った。

第7班

「……よう、『また会った』な」

「……ナルトさん！」

卒業試験の次の日、忍者としての第1歩を踏むため俺はアカデミーに来ていた。

忍者は任務を行う際、フォーマンセルと呼ばれる4人1組の小隊編成をとる。

個人で任務を遂行していくより小隊編成をとった方が危険も少ないし、任務達成率も上がるので効率が良いらしいのだ。

今日はフォーマンセルの発表があるのでアカデミーまで出向いて来ている。そして、発表会場の教室に入るとそこにはなんとナルトさんの姿があったのだ。

額には誇らしげに木の葉の額当てが巻かれている。

「……何やってんすか！」

「フフフ、合格したんだってばよ！」

ナルトさんは満面の笑みで額当てを指差す。

しかし、俺は目の前のナルトさんを信じられなかった。

「どこからガメてきたんすか！怒られますよ！」

「バ、バカッ！ホントに合格したんだってば！」

「ホラ、俺も一緒に謝りますから職員室に……」

「サ、サスケ！この額当てが証拠だってば！その手を離せ！」

「コラッ！うるさいぞ！席に着け」

不法進入したと思われるナルトさんを職員室にしょっ引こうとしたら、イルカ先生が教室に入ってきたので仕方なく席に着く。いつ隣に座っているナルトさんがイルカ先生にバレるのかハラハラしていた。

「……よし、みんないるようだな」

名簿を片手に合格した生徒達を確認していたイルカ先生が言った。

『マジで合格したんすか！』

『だから言ったじゃねえかってばよ！』

ヒソヒソ話でナルトさんが本当に合格した事を知る。

もう離れ離れになってしまおうと思っていただけに、今すぐナルトさんとハイタッチしたい衝動にかられるがグッとこらえる。

「まずは、卒業おめでとう！」

イルカ先生は名簿を置くと生徒達に向き直りそう告げた。傷を負っているように見えるのは気のせいだろうか。

「今日からみんなは忍者としての第1歩を踏み出す事になる！今から班編成の発表をするぞ！」

真剣な表情になってイルカ先生は続けた。

「……この教室の中にいる奴の顔をよく見ておけ。忍者になったら危険はつき物だ。ケガをして辞める事になる奴もいれば、死んでしまふ奴もいるかもしれない」

合格して若干浮かれていた教室の空気が引き締まる。

「その危険を少しでも減らす為に考え出されたのが、3人1組という小隊編成だ。編成はみんなのバランス等を考えて教官側で作った」
文句を言うような生徒はいなかった。
みんなお互いの顔を見合っている。
その中には当然、シカマルやチョウジ達の姿もあった。

「……君達は昨日までは生徒だが、今日からは『忍者』だ。どうか、心して聞いてほしい。では、班編成を発表する！第1班っ——」

第1班から編成の発表が始まった。
アカデミー生活の中で見知った名前の者が次々と呼ばれていく。
仲が良かった者同士なら互いに喜びあい、そうでない場合は微妙な空気になる等、反応は様々だ。

班編成の最後に担当上忍も紹介される。

卒業生3名と担当上忍1名、計4人1組のフォーマンセルだ。
担当上忍とは小隊の隊長でもあり、アカデミー卒業したての若い忍者だけでは小隊として機能しないので、色々と面倒を見たりするのだ。

「……第7班！うちはサスケ！」

ついに俺の名前が呼ばれた。

誰と一緒にいるんだろう。

自然と胸が高鳴る。

イルカ先生のさっきの話も大事だけど、一緒に班になるなら知らない人より知ってる人の方がいい。

どうせならサクラちゃんとかこねえかな。

「春野サクラ」

マジかよ！

ここで元カノと一緒にになれるなんて、もはや運命だね。

イルカ先生もなかなかにくい演出をしてくれる。

ガッツポーズをとりたい衝動に駆られるが、やはりグッとこらえる。

サクラちゃんは舌打ちしてるけど。

まだナルトさんの名前は呼ばれていない。

ナルトさんと一緒になれば完璧だな。

ナルトさん、来い！

「うずまきナルト！」

マジかよ！！

「ナルトさんっ！」

「っしゅあっ！」

感極まって隣に座っているナルトさんとハイタッチした。
バチンと気持ちのいい音が教室に響く。

これ以上盛り上がると空気が読めない痛い子になるので、ハイタッチをしたあとはスッと着席した。

「担当上忍は――」

「先生！質問です！」

担当上忍を発表される前にサクラちゃんが手を挙げて遮った。

「……サクラ、編成は――」

「でも先生！この班だけバランスがとれていません！危険です！」

またしても言葉を遮られたイルカ先生は、視線を教卓に下ろすと不気味に笑い出した。

「……フッフッフ。さすが学力ナンバーワンの才女だ。そこに気付くとは……」

「……えっ？」

「実を言うとだな、この第7班の編成は教官サイドでも大いに悩んだ編成なのだ！」

イルカ先生はキャラが変わってしまったかのように教卓をバンバンと叩いている。

「悩みに悩んだ挙げ句に辿り着いたこの班編成！納得のいくように説明してやろう！まずはサスケ！」

イルカ先生は俺をビシッと指差した。

急に名前を呼ばれたのでビクッとなったしまった。

「お前はパツとしない成績だ！言うなれば普通！もしかしたら普通以下かもしれない！」

俺はてっきり誉められるのかと思っていたけど、そういう訳ではなかったようだ。

「しかし！お前は幻術に関しては普通以上だ！他の事がパツとしなかわりに幻術だけは人並み以上にできると言ってもいい！」

幻術。あの事件以来なぜか遣えるようになった術だ。

なんせ毎晩自分で自分に幻術をかけたりしてたからね。

イルカ先生の言葉に引っ掛かるものを感じながらも、次の説明を待った。

「次にナルト！知っての通り、お前は学年中最下位！ドベだ！」

次はナルトさんの番だ。

公開処刑が始まってしまわないかとドキドキする。

やはりナルトさんも指を差された時はビクッとなった。

「……しかしだな、ナルト！お前には意外性という武器がある！その事は昨晚この俺がしかと確認した！意外性とは言わば将来性！伸びしろ！ナルト！お前は伸びしろ忍者だ！」

イルカ先生はなかなか面白い事を言うな～と思いつながら、隣に座っているナルトさんを見る。ナルトさんはぼか～んと口を開いていた。

多分、何を言っているのかわからなかったんだろう。

「今揃った『幻術』と『意外性』という2つの武器！この2つは使い勝手は悪いかもしれない！だが、使い方によつては抜群の威力を発揮する武器だ！……そこで、サクラ。お前なんだよ……！」

盛り上がってきているイルカ先生を、サクラちゃんはキョトンとした表情で見ている。

「使いこなすには優秀なリーダーが必要なんだ！ただ、優秀なだけではない、武器を使いこなすのに必要な『知識を持った優秀なリーダー』がな……！」

教室内の誰もがイルカ劇場に見入っていた。

サクラちゃんは胸の前に置いていた拳をギュッと握りしめている。

「でも先生！私は別に優秀じゃ——」

「学年ナンバーワンの知識を持つお前ならできる！第7班の命運はお前が握っているんだ！」

最後はごり押しされた感もあるが、そう言われてみればそんな気にもなってくる。

「よろしくお願いします！ドベ！」

「まかせとけてばよ！普通以下！」

俺は隣に座っているナルトさんと互いの意志を確認しあうようにガツチリと握手を交わした。

まだ腑に落ちない様子のサクラちゃんを前に、イルカ先生は言葉を続けた。

「不安か？不安なのか？不安だろう。だが、安心しろ！お前達の班にはとっておきの上忍を付けた！

木の葉が他国に、いや、世界に誇るエース！

畑カカシ上忍だっ！」

「……どうも」

紹介された上忍は、いつの間にか教室に入ってきていた。

その男は背が高く銀色の髪を持ち、年の頃は30手前といったところか。

斜めに被っている額当てで片目を隠し、口元は布で覆われている。唯一見る事のできる残された片目は、死んだ魚の目のような、世捨て人のような目を眠たそうに開けている。

「以上っ！第7班っ！木の葉の将来は君達が背負って行くんだ！行けっ！第7班！」

「……じゃ、第7班はこっちに来て」

盛り上がっているイルカ先生とは対照的に、物静かな印象のカカシ上忍に促されて教室を後にする。

教室から出ても、まだイルカ先生が何か叫んでいる声が聞こえた。熱血ではあると思っていたが、ここまでとは。

カカシ上忍に連れられて辿り着いた場所は屋上だった。屋上に着くまで会話は無い。

今はカカシ上忍を前に、第7班が並んで座っている形だ。屋上から見える空は雲一つない綺麗な青色をしている。

「……お前らの第1印象なんだけど、嫌いだ」

屋上に来て初めてカカシ上忍が俺達に向けて話したのは、そんな言葉だった。

死んだ魚のような目で俺達を見ている。

「俺もお前の事は嫌いなんだってばよ!」

売り言葉に買い言葉でナルトさんが立ち上がろうとするのを、俺とサクラちゃんて抑えつける。
初の共同作業です。

「……ま、紹介にあった通り、この班の担当上忍となった畑カカシだ。よろしく」

さっきとは打って変わってにこやかに微笑みながら、カカシ上忍は改めて自分の名を名乗った。

「じゃ、さっそく自己紹介でもしてもらおうか。まずは金髪のキミ」

「えっ? おっ。な、名前はうずまきナルトだってばよ!」

急に振られたナルトさんの自己紹介が始まる。

カカシ上忍は手にしている紙を見ながら聞いているようだ。

「……キミがナルト君ね。じゃあ、趣味とか特技、好きな事とか嫌

いな事、最後に夢で言ってもらおうかな」

「うっ。趣味はラーメンで特技はイタズラ。好きな事はラーメンで嫌いな事はマズいラーメン！夢は『火影』になる事だってばよ！」

多少、おかしい所はあったがなんとかナルトさんの自己紹介は終わった。

「……火影になってどうするの？」

「みんなを見返してやるんだってば！」

「……頑張ってね。じゃ、次！ピンクい子」

「は、春野サクラです！趣味は料理で特技は勉強です！好きな事っていうか、好きな人はいませんが、嫌いな人は下品な人です！夢はお嫁さんです！」

ナルトさんが俺を見て『お前の事なんだってばよ！』という顔をしたので、『ナルトさんに言われたくないですよ』と顔の前で手を振った。

「……好きなタイプは？」

「はぁ！？」

「あ、いいんだよ。気にしないで。じゃあ、最後、黒髪のキミ」

俺の番が来た。

緊張しいなので噛まないようにゆっくり話す事を心がける。

「うちはサスケです。趣味と特技は釣りと将棋です。好きな事も。嫌いな事は、後片付けとか苦手です。夢っていうか目標は、一族の復興です」

よし、うまく言えたぞ。

三番目なのである程度は内容を整理できて良かった。

『兄ちゃん』に会う事も目標なんだけど、言わない事にした。だつてカカシ上忍、少し胡散臭さいんだもん。

——これが、第7班、か。

全員の自己紹介を聞き終えたカカシは手元の書類に目を通した。

——成績ドベに、頭でっかちと凡人。今年も『無し』かな。

毎年受け持つアカデミー卒業者の担当上忍。

未だかつてカカシが受け持った班からの合格者は1組もない。

——みんなそれぞれ面白い成長はしてるみたいだけど、運が悪かったという事だ。

ナルトは例の九尾の件の……

悲惨な目に会っていながら真っ直ぐに育ったもんだ。

九尾を持っているなら俺よりも相性の良い上忍が他にもいるはずだ。サクラは一般出身だったな。

忍者の世界に染まり込む前に戻してやるのも優しさだろう。

勉強ができるからきつと良い就職先が見つかるはずだ。

意外だったのはサスケだ。

例の事件でもっと拗ねているのかと思ったが、普通だ。成績も含め

て。

幻術が得意と書いてあるが、眼から入るタイプだろう。

『うちは一族』だしな。

……こいつは写輪眼は開眼しない。なんかそんな気がする。

1人1人に対する感想を述べながら、カカシは落とす理由を探していた。

「じゃあ、一通り自己紹介も終わった所で、明日からみんなには任務をもらう」

カカシ上忍は俺達の自己紹介を聞き終えた後、手元の紙を見ながらしばらく何かを考えているようだった。

そして明日から始まる任務の事を話し始めた。
任務と聞いてナルトさんがワクワクしている。

「詳しい事はこの紙に書いてあるので、よく見とくように」

カカシ上忍から紙を手渡される。

渡された紙には集会所や時間などが書かれてあった。

「任務の内容についてだが、それは明日だ。じゃ、僕は忙しいので帰るね。あつ、明日の任務は激しいから朝飯は抜くように、吐くぞ」

そう言うと、カカシ上忍は木の葉を撒き散らして消えてしまった。

屋上には第7班の3人だけが残る。

「……結局、自己紹介しなかったわねアイツ」

サクラちゃんの眩きに俺とナルトさんは頷いた。

その後、嫌がるサクラちゃんを無理やり誘って一樂と一緒にラーメンを食べて帰った。

サクラちゃん最後まで『誘うならパスタとかでしょ』とか言っ
て抵抗してたが、俺とナルトさんには通用しなかった。

何がパスタだ洒落くせえ。

鈴取り

11時に演習場に集合

持ち物 忍具一式

服装 動きやすい格好

弁当は準備するので持つてくる必要なし

注 朝食厳禁！吐いちゃうよ

カカシ上忍から手渡された紙にはこう記されていた。

11時集合なのに朝飯を食うなどは、厳しいことを言ってくれる。

午前中は時間があつたので、久々に釣りをしに近所の池に出かけたやっぱ朝間詰めは入れ食いだぜ。

なかなか釣果をあげ、気持ち良く帰宅する。悪いと思いながらも腹が減ってしまったので、うちは煎餅を一枚だけ食べてしまった。

11時前には演習場に着くように、早めに家を出た演習場に向かう途中、サクラちゃんとバツタリ出くわす。

「……おはよう」

「……おはよ」

舌打ちはされなくなったが、距離を置かれている感じだ。こっちが近付こうとすると、その分だけ離れていく。

演習場に到着する頃には、サクラちゃんの『間合い』が何となくわかるようになっていた。

演習場に到着するとナルトさんは既に来ていた。1人で手裏剣を投

げて遊んでいるようだ。

「おはようございます、ナルトさん」

「サスケ！遅かったってばよ！サクラちゃんもおはよう！」

「おはよ、もうお昼近いけどね」

時刻はまだ10時半。

ナルトさんの提案で『手裏剣おはじき勝負』が始まる。

地面に書いた円に向かって手裏剣を投げて、入れたり当てたりするやつだ。ただ円に向かって投げるだけでは卑しくも忍者のはしくれ、入りまくってしまうので後ろ向きで投げるというルールを取り入れた。

嫌がるサクラちゃんを無理やり引き込んで勝負を始める。

「お、時間通りにみんな来ているな。投擲術の修行をしているとは関心、関心」

そうこうしているうちに、どこからともなくカカシ上忍が演習場に姿を現していた。

時刻はピッタリ11時だった。

「じゃ、今から今日の任務の説明をする」

イルカ先生から任務についての説明が始まった。

俺達は真剣な表情になり、各人が唾を飲む音が聞こえる。

なんてったって、今日が第7班としての初任務なんだ。

「今日の任務は簡単だ。俺からこの『鈴』をとる事。用紙に書いて

あつた通り、忍具一式は持ってきているな？俺は上忍で君達は卵だ。……俺を殺す気で取りに來い」

カカシ上忍は手に持った鈴をチリンと鳴らしながら任務の説明をした。

しかし、鳴っている鈴は2つしかない。

「ちょっと待って下さい！鈴が2つしかありません！」

リーダーであるサクラちゃんがその事に気付き、すかさず質問した。俺はこういう時、遠慮して聞けなくなっちゃうタイプなのでホント助かる。ちなみにナルトさんは今気付いたようだ。

「……あら？アカデミーで聞いてなかったの？」

そして、カカシ上忍から今日の任務の本当の目的を聞かされた。

アカデミー卒業とはあくまでも下忍になれる可能性を持った者を卒業させるという事。

卒業後はまず班の担当上忍により下忍選抜試験が行われる事。

カカシ上忍の主義により任務という形をとっているが、今日の『鈴取り』がそれにあたる。

卒業生の中から下忍になれる者はごくわずかであるという事。

そして、今までカカシ上忍が担当した班で下忍になれた者はいないという事も……。

「そ、そんな……」

「……………」

「……………」

俺達は言葉を失った。

忍者の世界は甘いもんじゃないって事は知っているつもりだったが、シビアすぎやしないだろうか。

てか、ちゃんと昨日のうちに説明しといてよ。心の準備が。

隣で口を開いているナルトさんは違う意味で言葉を失っているようだった。

「……感のいい君達なら気付いているかもしれないが、鈴は2つしかない。……つまり、この中の1人はアカデミーに戻ってもらう事になる」

俺達の間には緊張が走る。

俺、アカデミーに戻ろうかな。

そんな考えが頭をよぎった。

「そして、昼飯の弁当は抜きだ……!」

「なにぃ! やってやるってばよ!」

ここに来てようやくナルトさんが鈴取りのルールを理解したようだ。でも、落とす事が目的なら別に飯くらい食べさせてくれても良いんじゃない?

カカシ上忍の言葉に何か違和感を覚えながらも、今日の任務が始まろうとしている。

「……よし、期限は12時、この時計が鳴るまでだ」

カカシ上忍は時計をセットして近くの岩の上に置いた。
腰には鈴が2つぶら下がっている。

任務が開始する前、俺はカカシ上忍にバレないように後ろ手で印を結んだ。

「……それでは、任務開始！」

基本その1、忍者は身を隠すべし。

ナルトさんとサクラちゃんも任務開始と同時に、演習場の周囲に広がっている茂みの中へと飛んでいった。

しかし、アカデミーで教えてもらった基本事項の中に、『忍者は裏の裏を読むべし』という言葉がある。

いつだったか『裏の裏なら表じゃねえかってばよ!』とナルトさんが屁理屈をこねていた。

しかし、一理ある！

俺は裏の裏、つまり正攻法でカカシ上忍に挑む事にした。

他の2人が身を隠し気配を殺している時、俺はカカシ上忍の前で佇んでいる。

目を伏せて。

「……あれ? どうしたサスケ。隠れないでいいの?」

「……………」

俺はまだ目を伏せたまま。

鈴を取れば一瞬でいい。取った鈴はあとでみんなで話し合おう。

俺は伏せている両の眼に『独り幻術』で培ってきた粹を集中させている。

「ま、隠れたりしないのは自由だけど、こっちからも行くよ？」

カカシ上忍が近づいてくる。

1歩、2歩、3歩……

伏せている俺の視界にカカシ上忍の足が見えた。

今だ！くらえ幻術！

「っ！……幻術、返し、かよ。」

カカシ上忍の目を見た瞬間、かけたはずの幻術が自分の方に返ってきた。

目の前がぐにゃぐにゃになり、自分が立っているのかさえ解らない。

「てめえ！サスケの仇い！いざ、じんじょくに……」

遠くの方でナルトさんの声が聞こえる。

その声を最後に、俺は意識を失った。

「お前ら忍者をなめてんのか！ああ！？」

次に気が付いた時はカカシ上忍に下敷きにされていた。

首筋には何故だかクナイが突きつけられている。重いし、怖いです。幻術は返されるは下敷きにされるはで踏んだり蹴ったりだなちくしよう。

「ナルト！お前は1人で暴走するばかりだったな」

——影分身を使える事には少し驚いたが。

「サスケ！お前もだ。個人プレイに走るのもいいが、実力がなくてない！やらない方がマシだったな」

——こいつは目を伏せる癖がある。目から入る幻術使い特有のクセだ。

「そしてサクラ！お前はリーダーのくせに何もしようとはせず、暴走したこいつらを見てアタフタしてただけ。知識はあるが無能な指揮官だったな」

——1番驚いたのサクラだ。ズタボロサスケの幻術を見せた訳だが、なんと応急処置をし始めた。なぜか罵声も浴びせていたが。こいつは医療忍者としての才能があるかもしれない。……だが、ここまでは。これからがこの試験の最大の目的、『仲間を見捨てない』事を確認する試験。……今までここ合格した奴らはいない。こいつらも、きっとそうだ。

カカシは確信にも近い、第7班の試験不合格を予想していた。

「……もう一度、チャンスをやる。昼イチから任務開始だ。その変わり、サクラの昼飯は抜きだ！少しでも妙な事をすれば即刻アカデミーに突き返す！……ここでは俺がルールだ。わかったな。」

カカシ上忍はいずこかへと消えていった。

ようやく下敷きから解放された俺は、ナルトさんとサクラちゃんから事の顛末を聞いた。なんせ気絶してましたから。

ナルトさんは俺の仇を討とうと正面から挑んでいくもカカシ上忍に軽く翻弄され続けたそうだ。

その話しの流れから、ナルトさんは影分身という高等忍術を使える事を知る。その意外さにびっくり。いつ覚えたんだろ。

サクラちゃんは試験の終了まで幻術にかかってしまっていたらしい。どんな幻術だったのかは教えてくれなかった。

演習場には座り込んでいる俺達と、弁当が2つ。

サクラちゃんはカカシ上忍がいなくなっても俯き続けている。

俺が出鼻で仕掛けた幻術をしくじってしまったばかりに、流れが悪くなってしまったんじゃないかと思う。飯抜きになるのは俺だと思っていたが、リーダーという事で飯抜きになってしまったサクラちゃんに申し訳なく思う。

頭のいいサクラちゃんの事だから、作戦みたいな事を色々と考えていたのかもしれない。

「……ごめんな。サクラ」

そんな事を考えていたら自然と口から出た言葉だ。

俯いていたサクラちゃんの顔があがる。少しだけ涙目になっていた。

「ひ、昼からは3人で一緒に鈴を取りに行こう！俺とナルトさんは馬鹿だからさ、作戦とかはサクラが建ててくれよ！ねえナルトさん！」

「おっ？おう。」

涙目になっているサクラちゃんを見て、『女の子に涙を流させては

いけませんえ』と母さんが言っていたのを思い出す。慌ててナルトさんを話に引き込んだ。ナルトさんを肘で突っつき『何か喋れ』とジェスチャーする。

「サ、サクラちゃんの言う事なら何だって聞くんだってばよ！」

ナルトさんにしては上出来だ。

「……ナルト、サスケ」

顔を上げたサクラちゃんの表情が少しずつ晴れていく。なんとか涙は見ないで済んだようだ。

そして、『とりあえず飯食ってから作戦決めようや』という事になった。

「……私はダイエット中だから気にしないで食べて！」

飯抜きを言い渡されているサクラちゃんは俺達に弁当を食べるように勧める。

俺もナルトさんも弁当を手を持っているが、箸はまったく進んでいない。俺はナルトさんと目を合わせ、互いに頷きあった。やる事は、ひとつだ。

「……サクラちゃん、弁当を食ってくれてば」

「昼イチから一緒に任務をするのに、1人だけ飯抜きなんてできないよ」

俺とナルトさんは弁当を差し出す。サクラちゃんはその行動に驚いていた。

「でも、バレたらアカデミーに……」

「大丈夫だって！今、この付近にタレ目の気配はしないんだってば！」

自信満々にナルトさんが言う。『ホントかよ』と思ったが、要はバレなければいい話。

忍者は裏の裏を読め、だ。

「絶対大丈夫だってば！タレ目は今ごろ昼寝してるってば！」

「早いところ食べちまって作戦を決めようぜ」

「……ナルト、サスケ。……ありがとう」

俺達は周りを充分に警戒しながら弁当を食った。

弁当が2つなので箸も当然2つしかない。『間接Aだ！間接A！』と内心で連呼していたが、ナルトさんがカップラーメン用の箸を持っていたので未遂に終わる。

こそこそと食べ始めた弁当を食べ終わろうとした時だった。

「きさまらー！！」

森の方から物凄い勢いでカカシ上忍が突っ込んでくる。

「くっ！気配を消してやがったってば！」

俺はナルトさんを睨んだ。

しかし、仲間割れしている場合ではない。

ナルトさんとサクラちゃんはすぐに臨戦態勢をとった。

俺も印を結び、幻術の準備を始める。しかし、突っ込んでくるカカシ上忍のスピードは尋常では無かった。

みるみるうちに距離を詰められ、応戦する事もかなわず完全にやられると思っていたら……。

「ごっかつく！」

満面の笑みを浮かべながら、カカシ上忍は俺達にそう告げた。

ぶっ飛ばしにくると思っていたカカシ上忍の手はサクラちゃんの頭に置かれている。ロリコンか。

事態が掴めずにキョトンとしている俺達に、カカシ上忍はこの任務の本当の目的を教えてくれた。

わざと仲間割れさせるように設定してある事。

弁当を食べさせなかったら失格にしていた事。

チームワークの大切さ。

「……この業界では規則やルールを破る奴はクズと呼ばれる。

……だが、仲間を見捨てるような奴はもっとクズだ！」

最後に言ったカカシ上忍の仲間という言葉が胸に響く。

これが『木の葉』なんだ……。

「今までは俺の言う事を素直に聞くボンクラどもばかりだけど、お前たちは違うようだな。」

カカシ上忍の言葉に俺達は顔を見合わせた。

嬉しそうな顔をしているナルトさんとサクラちゃん。
きっと俺も。

「……じゃあ、明日の任務を達成できれば、いよいよ木の葉の下忍になれるよ!」

カカシ上忍も表情をほころばせている。

えっ?でも今、『明日の任務』って……。

「えっ!?今ので合格したんじゃないんですか?先生!」

「……これが裏の裏ってやつかってばよ!」

サクラちゃんがすかさず質問する。それにナルトさんも続いた。

「あっ!言ってなかったね。ゴメンゴメン!」

カカシ上忍はすつとぼけたように頭を掻いた。その仕草が胡散臭さを増幅させている。

「俺の下忍選抜試験は2段構えなんだよ。今日のは1次試験で明日が2次試験ってとこかな」

ジャケットのポケットからゴソゴソと紙を取り出し、俺たちにその紙を配り始めた。

俺たちは言葉を失い、カカシ上忍から渡される紙を受け取るだけだった。

「……ハイ、詳しくはこの紙を見てね。とりあえず1次試験合格おめでとう!ま、明日も頑張ってね。……あと、俺はまだ君達の先生

じゃないんだから、カカシ上忍と呼びなさい。」

カカシ上忍はそう言うと、姿を消した。

二日目

8時に火影邸に集合

持ち物 忍具一式

服装 動きやすい格好

昼飯は準備するので持つてくる必要なし

注 朝飯は食べてきてね

『今日の鈴取りは1次試験で明日は2次試験だよ。2次試験に合格したら下忍になれるからね』という言葉を残し、姿を消したカカシ上忍から手渡された紙には、そう記されていた。

鈴取りの時と違うのは、時間と場所と朝飯の有無。

胡散臭いカカシ上忍の事なので、俺は裏の裏を読んで朝飯はあえてとらず、うちは煎餅を1枚食べるだけに留めた。

集合場所にある火影邸とは、里のほぼ中心に位置する建物の事だ。里の長である火影がここに常駐し、日々の業務とかを取り仕切っている。里の中核ともいえる場所なので、様々な部署が入っているらしい。

昨日と違って早めの集合なので、俺は7時半頃に家を出た。

火影邸は俺んちからだいたい20分くらいの距離なので、集合10分前には到着できる算段だ。

あれから演習場に取り残された俺達は、嫌がるサクラちゃんを無理やり一楽に連れ込んでラーメン食って帰った。

帰り際には口々にカカシ上忍の事を罵るとともに、今日行われる試験の内容とかを予想した。

キレ者のサクラちゃんの予想では、持ち物や服装が一緒なので恐らくは鈴取りと同じサバイバル形式の試験なんだろうという事だった。一楽の前でバッチリ作戦を建てた上で昨日は解散したのだ。

『起爆札はありったけ持ってたきなさいよ。』とサクラちゃんは帰りに念を押して言う程、今日の作戦は物騒なものになった。

言われた通り準備した、ありったけの起爆札を詰め込んだ袋を持って火影邸に向かう。

昨日のように道中でサクラちゃんと会う事はなかった。里の往来を歩いていると、朝のゴミ出しをしている人や新聞をとっている人を見かけ、里の朝が始まっているって感じた。

予定通り10分前に火影邸に着くと、やはりナルトさんが既に到着していた。

クナイを火影邸の壁に向かって投げて遊んでいるようだ。

「ナルトさん、おはようございます」

「サスケ！遅いってばよ！」

「ナルトさん、人んちの壁はまずいって……」

ナルトさん曰わく、『最初はそんなつもりじゃなかったんだけど、固い所と柔らかい所があっておもしろいってばよ』らしい。

例によって『ホントかよ』と思い、試しに投げてみたらホントだった。

固い所とは壁の骨組みにあたる木の部分で、ここにヒットすると『カッ』っと乾いた音がする。

骨組みのない部分では『ずぶっ』って刺さる感じた。
なかなかやみつきになりそう。

早速ナルトさんと2人で『柔らかい所に当てたら負けゲーム』が開始された。

火影邸の骨組みは複雑に組んであるようで、骨組みの予想が難しくなかなかスリルがあるゲームだ。

「……あんたたち、人んちの壁で何やってんのよ」

5分も投げていると、呆れ顔しているサクラちゃんも火影邸前に到着した。

サクラちゃんも参加するようにしつこく迫るも、頑なに拒否された。

そんなやりとりを繰り返していたら、死んだ魚のような目を持つカシ上忍がどこからともなく現れる。

時刻は8時ピッタリだ。

「おはよう諸君。今日の任務に成功すれば晴れて下忍となれるわけだが、昨日はよく眠れたかな？」

死んだ魚の目をしている男は、朝っぱらから胡散臭い事を言った。

俺達は疑惑の目を持ってしてカカシ上忍を迎えた。

「カカシせ……上忍、今日の任務は何ですか？」

7班のリーダー、サクラちゃんがすかさず訪ねる。

予想では昨日と同じサバイバル形式なのだが、実際は聞いてみないとわからないのだ。

昨日と同じサバイバル形式なら即作戦開始で、起爆札を発動させな

ければいけない。

俺達3人はカカシ上忍の言葉を待った。

「……任務は今から行く所で説明する。じゃ、ついて来て」

カカシ上忍はそう言うと、火影邸の中に入って手招きをする。少し拍子抜けしてしまったが、カカシ上忍に促され後をついて行った。カカシ上忍の後をついて行く形で火影邸の中に入った。

火影邸は里の中でも群を抜いて大きい建物であり、何階もありそうな屋敷だ。

てっきり上の方に登って行くのかと思っていたが、向かった先は下だった。

地下室があるなんて意外。

地下には部屋がいくつかあるようで、何個かの入り口を通り過ぎた所でカカシ上忍の足が止まった。

カカシ上忍が閉じられているドアをノックすると、顔面傷跡だらけのおっさんが出てきた。

まるで拷問でもされた事があるような感じだ。

「……言われたように、準備はしといたぞ。今時こんな事するのはお前ぐらいだな」

おっさんはカカシ上忍にそう言うと、また別の部屋へと消えていった。

カカシ上忍は『ありがと』とおっさんに言うと、部屋の中に入る。俺達も続いて部屋の中に入った。

そして、部屋の中の異様な光景を見て言葉を失った。

入ったのは小さな部屋で、地下室特有の冷たい空気が広がっている。そして、部屋の中には3人の男がいた。

全員後ろ手に縛られ、地面に座っている。

顔には変な文字が書かれた大きな札が貼られているので、年齢とかそういうのはわからない。

縛られている男達は座ったままピクリとも動かなかったが、わずかに上下している肩が生きているという事を伝えている。

「じゃ、今日の任務の説明をしまゝす」

異様な空気の中、カカシ上忍が呑気な口調で喋り始めた。

そして、次のカカシ上忍の言葉を聞き、俺達はさらに言葉を失う事となる。

「こいつらを殺せ。それが今日の任務だ」

初体験

「こいつらを殺せ。それが今日の任務だ」

火影邸地下の薄暗い一室。縛られている男3人を前にして、カカシ上忍の声が無機質な感じで響き渡る。

「……………」

その突然な内容の凄まじさに、誰も口を開く事はできなかった。

「……期限は今日中だ。考えようによっては、昨日の任務より簡単かもな」

地下室の壁に背をもたれかけ、腕を組んだままカカシ上忍は静かに言う。

「ま、さっき言われた通り、今時こんな事をやらせるのは俺くらいなもんだろう。……嫌ならやめてもいいんだぞ？ただ、俺の元で下忍としてやっていけないってだけだ」

カカシ上忍はとても静かな口調で語り続ける。

俺は縛られている男達から目を離す事ができず、その言葉に耳だけを傾けている。

たぶん、ナルトさんもサクラちゃんも。

「……ま、昨日見せてもらったようにお前達はチームワークつてのは大丈夫みたいだから、他の上忍なら間違いなく下忍選抜に合格し

てるよ！今年は運がなかったと諦めてくれ」

「……………」

最後の方は明るい口調になっていたが、誰も声を出す事はできなかった。

地下室に沈黙が広がる。

時々切れてはつく蛍光灯と飛び回っているハエが、妙な雰囲気を出している。

「俺は隣の部屋で待っている。やるか、やらないか。決心がついたら呼びにきてくれ。……ちなみに縛られているのは火の国の重罪人だ。幻術をかけているから動き出すような事はない。どんな事したのかも知りたい？」

カカシ上忍の問いかけに対し、誰も喋ろうとはせず沈黙を守ったままになった。カカシ上忍はそんな俺達の様子を見て『りょーかい』と呟き部屋を出ていった。

部屋には縛られている男3人と第7班の3人だけ。

カカシ上忍が部屋を出てドアが閉められた音が聞こえた瞬間、サクラちゃんがへなへなと力なく床に座り込んだ。

ナルトさんの方は先程と変わらず立ち尽くしたままだった。

忍者は裏の裏を読めという。

この縛られている3人こそ実は幻術か何かで、殺ると決心したら昨日のように『ごーかつく』とカカシ上忍が現れるのではないのだろうか。

そんな淡い期待を抱き俺は念入りに調べてみたが、調べれば調べるほど現実という答えが導き出された。

「……幻術とか分身？」

その様子を見て床に腰を下ろしているサクラちゃんが弱々しい声で俺に訪ねる。

俺は何も言わず首を横に振った。

「……忍者って、ただ単にカッコいいものって思ってたけど、現実とは違うって感じね」

サクラちゃんが小さい声で呟いた。

俺達は部屋の真ん中辺りで車座のようになり、腰を下ろして座っている。

なぜだか離れていると不安になってくるので自然とこういう形になっていた。やはり誰も喋ろうとはしなかったのだが、沈黙を破ったのはサクラちゃんだった。

「困っている人を助けたり、里を守るのが仕事だと思ってたけど、こうゆうのって避けては通れない道なのかな」

誰に喋るといふ訳でもなく、サクラちゃんは1人言のようにか細い声で続ける。

「……ナルトは何で、忍者になろうと思ったの？」

「ふえっ」

急にサクラちゃんに話を振られてびっくりしたのか、ナルトさんは奇妙な声で返事をした。

「……俺は、火影になって……みんなを見返してやりたくて」

たどたどしくナルトさんは答える。

ナルトさんの夢は火影になる事だ。

綺麗事だけでは済まされないのが忍者の世界。

遅いか早いかの問題で、どの道避けては通れない。

カカシ上忍から今日の任務が伝えられた時、ナルトさんの性格からしてまっさきに反対するかつつかかると思っていたが、部屋に入ってからはずっと黙ったままだった。

火影になるという夢を持っているナルトさんは、いずれこういう事をする時がくると薄々感づいていたのかもしれない。
遅いか、早いか。

「……サスケは？」

ナルトさんが答え終わってしばらく沈黙が続いた後、俺も聞かれた。

「……俺は、家が忍者の家系だから……気が付いたらなった」

正直に答えた。

ナルトさんのように確固たる信念で忍者になったのではなく、物心ついた時から周りがそういう環境だったので、当然のように忍者になるものと考えていたし、アカデミーにも入学して父さんや兄ちゃんのような忍者になる事を目標としていた。

忍者の家に生まれると、よっぽどの事が無い限り忍者になってしま

う。

『うちは一族』という名門の中に生まれ、パツとしない俺でも一応忍者になる事を前提で生きてきたのだから、やはりよっぽどの事が無い限りは忍者だ。

そういう運命なんだといったら、そうなのかもしれない。

忍者という運命の中では避けては通れない道。

遅いか、早いか。

「……サクラちゃんは何で忍者になったんだってば？」

最後にナルトさんがサクラちゃんに訪ねる。

ナルトさんは夢があって忍者になって、俺は環境で忍者になった。

サクラちゃんが忍者になった理由がとても気になるので、耳を研ぎ澄ます。

「……私は、仲の良かった友達がアカデミーに入ったから一緒に……」

俺が忍者になった理由を話した時、3人の中で一番軽い理由だったらどうしようと正直思っていたが、上には上がいました。

要は、サクラちゃんは完全に『ノリ』で忍者になっちゃった訳である。

俺はそもそもこういう任務を済ます事に遅いか早いかなんてこだわらないし、カカシ上忍はなんだか胡散臭いので、サクラちゃんの忍者になった理由を聞いた瞬間に今年の下忍採用は我慢する事を決心した。

「……それなら、今年はあきらめて——」

「でも！アカデミーに入ってから医療忍者になるって目標ができ

たの！」

今年は諦める話を持ちかけようとした瞬間に遮られてしまった。しかし、サクラちゃんの夢が医療忍者とは意外だった。てつきり誰かのお嫁さんになる事が夢だと思っていたが、カカシ上忍は胡散臭いので本心は言わなかったのだろうか。

「……何で、医療忍者に」

できればこんな所で人を殺したくない俺は、さらにその理由を聞いた。

医療したいだけなら看護婦とかそういう道もあるはずだ。何とか説得する糸口を見つけたすべくあえて聞いたのだ。

「忍者の医療忍術はあまり知られていない事だけど、一般の病院よりもかなり優れているの。それだけ多くの人を救えるかもしれない」

糸口すらなかった。

頭の良いサクラちゃんの事なので、きっとそう言えるなりの根拠があるのだろう。

それでも人を殺したくない俺は、

「多くの人を救おうとしてるのに、人を殺さなきゃいけないなんて矛盾してるんじゃない……」

あえて意地悪な事を聞いてみた。

実際、忍者とは死と隣り合わせの仕事。アカデミーで習っている事も全部とは言わないが、人を殺す術を多く習っている。

サクラちゃんをクノイチではなくナースにすべく一抹の望みを託してみた訳だが、

「たしかに私がしようとする事は矛盾してるかも。でも、もし救いたい人がいて、それを邪魔するような敵がいるのなら、私は敵を倒してその人を救わないといけない」

何も言えなくなってしまった。

言い切ったサクラちゃんを見ると、迷いではなく毅然とした表情でいる。

めっちゃいい女やないか、と思った。

「……サクラ、めっちゃい——」

「みんな、この任務どうする？」

サクラちゃんは真剣な眼差しで、俺とナルトさんを見ている。

そして、このいづれ避けては通れない任務をどうするかは、1人1人の意見を聞いて全員が一致したなら、やる。

1人でも反対するなら、やらないという事になった。

部屋に時計がないので時刻はわからないが、この部屋に入ってからかなりの時間が経ったと思われる。

それだけ、最初の頃の沈黙が長かったのだ。

とっくに昼は越している頃だが、誰も空腹を口にしなかった。

それだけ、みんなこの部屋の独特な雰囲気と、この任務に緊張しているんだと思う。

「私は……やる」

最初に選択を言ったのはサクラちゃんだった。

その表情を見る限り、先程と変わらず毅然とした顔で迷いの影など一切ない事がわかる。

その表情とは裏腹に、膝の上で硬く結んでいる手がプルプルと震えている。

それでもサクラちゃんは『やる』と言い切った。

「サスケは？」

次は俺だった。

もしも最後に聞かれるのなら、間違いなく『やる』と言っていた。最後に聞かれるという事は、ナルトさんも『やる』という意見を出したという事になるからだ。

俺は今までの人生は多数決で生きてきた感がある。

兄ちゃんが『うちは一族』を抹殺して里を抜けてしまった時も、すぐに探しに行こうとは思ったが『実力をつけてからにした方がいいのでは』という周りの意見に流されるまま里で過ごしてしまった。

その辺の事も見抜いて二番目に俺に聞いたとしたら、サクラちゃんは相当頭が切れる。

偶然であって欲しい。

意見を聞かれた俺は、大きく深呼吸をした。

俺にとつていずれ通る道なら遅いか早いかなんてどうでもいい。でも、どうせ通るなら今じゃなくてもいいんじゃないか？

この部屋の雰囲気や、サクラちゃんの気迫に飲まれて『やる』なんて言うもんじゃない。重罪人といえど命がかかっているんだ。

まだ俺達は子供の年だぜ？どうかしてる！

言うんだサスケ！『やらない』と。

「……やる」

目をつぶり、『やらない』と心に決めていたはずが、口から出たのは『やる』という言葉。

つくづく俺は俺という人間が嫌になってしまった。

腕を組み、目は閉じたまま。

胸前で組んでいる腕がプルプルと震えているのが自分でもわかる。

必死に震えを隠そうと両腕に力を込めても、震えは止まらなかった。

「……じゃあ、ナルトは？」

「……」

最後に残っているのはナルトさん。

サクラちゃんに問いかけられても、なかなか話そうとはしなかった。

「……ナルト、いいよ、正直に言って」

なぜナルトさんにはそんなに優しい。

俺は目を閉じたまま心の声で1人ごちる。

「……やってやるってばよ」

ナルトさんは1人言のような小さい声でつぶやいた。

「早く下忍になって、早く火影になってこんなくっだらねえ試験なんか無くしてやるんだってば！だから、『やる』」

「ナルト……」

火影が夢であるナルトさんは、声を大にして『やる』と宣言した。ねじ曲がってるものも、真っ直ぐに見れる力があるのだろうか。

閉じていた目をうつすらと開けてみれば、真っ直ぐな瞳をしたナルトさんと女子の眼差しでそれを見ているサクラちゃん。

俺は再び眼を閉じた。どうかしてるぜ！

「……決まりね」

「オウ！」

「……」

俺は静かに頷くだけに留めた。

隣で控えているカカシ上忍を呼びに行く。

リーダーであるサクラちゃんが呼んでくると言ったが、結局俺とナルトさんは一緒に付いて行った。

やはり、離れると心細くなるのだ。

隣の部屋のドアを開けると、椅子に座って本を読んでいるカカシ上忍。部屋は椅子が数個置かれていてだけで、ひどく殺風景だ。

「決まったか？」

「……はい」

本に目をやったままのカカシ上忍と、睨むように見ているサクラちゃん。

「……どっち？」

「やります！」

サクラちゃんの言葉は、怒っているようにも聞こえる、とても強い口調だった。

カカシ上忍は視線を本から俺達に移すと、そのまましばらく俺達を見ているようだった。

カカシ上忍の目は相変わらず死んだ魚だ。

そして『わかった』と言うとかけていた椅子から体を起こし、部屋から出て、あの縛られている男達が居る部屋へと向かう。

再び元の部屋に入り、縛られた男3人を前にしてカカシ上忍は俺達の方に向き直った。

「……首だ」

手刀を自分の首の横筋に当て、斬るべき部位を俺達に示している。

「浅いと苦しむ。押し切ってやれ」

首に置いた手刀を斬るように動かすと、カカシ上忍は部屋の隅に移動した。それ以上は何もしゃべらなかつた。

順番なんて決めていなかったたので、俺達はしばらく呆然とその場に立ち竦む。

とても『順番決めていいですか?』なんて言える雰囲気では無い。ため息とも、深呼吸ともとれる息が部屋に響く。

「……まだ間に合う。やめてもいいんだぞ?」

そんな中、カカシ上忍が静かに語りかけてきた。
何がまだ間に合うんだ？

人を殺す事か、忍者の道に行く事か。

「やりますっ！」

カカシ上忍の声に反応し、サクラちゃんが声をあげた。

クナイを手に持つと、向かって左端の男の方へと歩いていく。

俺はサクラちゃんの一挙手一投足に釘付けとなっていた。

男の前に立ったサクラちゃんはクナイを首筋に当てた。

先程カカシ上忍が示した部位と全く同じ。

片方の手は男の頭に添え、押し切った反動で男の首が動く事を防いでいる。

そして、クナイを持ったサクラちゃんの手が短く動いた。

男の首から派手に血が吹き出る。部屋に血の匂いが広がり、俺はそれ以上見ていられなくなった。

「……………くっ……………」

悲鳴を必死にこらえているサクラちゃんの声がわずかに聞こえる。
もしかしたら、悲鳴ではなく吐くの我慢している声なのかもしれない。

「…………サクラ、もういいよ」

再びカカシ上忍の声。

そらしていた視線を戻すと、大量の血と倒れている男と俯き座り込んでいるサクラちゃん。

髪が邪魔をしてその表情まではわからないが、きつと呆然としているのだろう。

「うずまき、ナルトだ！」

その直後、隣に立っていたナルトさんが突然名乗りをあげた。そしてサクラちゃんと同じようにクナイを持ち、真ん中の男の方へと歩いていく。

「俺は、うずまきナルトだ！」

男の前に立つと再び名乗りをあげる。

何の為かはわからないが、きつとナルトさんなりのケジメなんだろうと思う。

そして、ナルトさんも首を斬った。

ナルトさんが首を斬り始めた頃、俺も動いた。
一番右端の男。

部屋は小さいのですぐに目の前。

クナイを首筋に当て、手を添える。

自分の呼吸がえらく大きく聞こえる。

一回深呼吸した方がいいんだろうか。

あれ？手前に引くんだったけ？

いや、『押し切れ』なんだからあっちの方か。

でも手前でも押し切れはする。わからなくなってきた。

俺は、どっちに斬ったのかもわからないまま、男の首を斬った。
手首に生温かい血がかかる。

吐き気ももよおしてきた。あまり見ないように男から顔を背ける。手首にかかっていた感触が無くなった頃、薄目を開けて男の方を見た。

血溜まりの上で座っている男の姿。

最後に見た父さんと母さんの姿を思い出す。そしたら不思議と吐き気は収まった。

添えていた手を離すと男は血溜まりの上に倒れた。

ナルトさんの方に顔を向けると、その場に立ち竦んで俺の方を見ている。

サクラちゃんもいつの間にか立ち上がっていて、伏し目がちに俺の方を見ていた。

「よくやった。任務達成、だ」

背中の方からカカシ上忍の声が聞こえる。

向き直るとカカシ上忍は部屋を出た所で手招きしていた。

着いてこい、という事だろうか。

俺達は何も言わずカカシ上忍の後に着いていくと、地下室にある洗面台のような所で手を洗うように言われた。

そして、何も言わず血まみれになっている手を洗った。

「……俺の事が憎いか？」

手を洗っている最中にカカシ上忍は呟くように言った。めんどくせえなこの人。

地下室には3人が手を洗う音が響いている。

一生忘れる事ができない経験をした地下を上がり、火影邸の前へと戻ってきた。

さんさんと照っている太陽の光がまぶしい。表は地下室で俺達がやっていた事とは無関係の、平凡な昼下がりの風景をしている。

「……合格おめでとう。明日から、第7班として本格的な任務を開始する」

カカシ上忍から改めて下忍選抜に合格した事を告げられるが、誰も喜びの声をあげる者はいなかった。

カカシ上忍は手続きがあるらしく、明日の予定が書かれた紙を配り、第7班は解散となった。明日は写真撮影とかあるらしい。

「……………」

火影邸からの帰り道、口を開こうとする者はいなかった。なぜか人目を避けたくなり、帰り道は自然と裏道を進んだ。

いずれは通らなければいけない道ではあるが、気持ちのよくなるような事ではない。

覚悟が足りていないと言われればそれまでだが、俺達くらいの年でそんな覚悟を持っている奴なんてほんの一握りの変態くらいだろう。

「……これからどうする？」

無意識のうちに言葉が出ていた。

今の俺の顔は、とても悲しい顔の一步手前くらい。

「……俺んち、泊まっていてくれよ」

顔は見られないように全力で伏せている。

あの家にこの状態で1人でのいるなんて、考えられなかった。

「……幽霊、出ないからさ、頼むよ」

歩きながら、最後の方は自分しか聞こえないくらいの小さな声で呟いた。

返事は返ってこず、そのまま裏路地を歩き続けた。着いた先は俺んちの前だった。

ナルトさんはもとよりそのつもりだったらしい。サクラちゃんは女子なので、一旦家に帰った。

夜になり、俺んちに集まっても特に会話をする事はなかった。耳に入ってくるのは、外で鳴いている鈴虫の声だけ。

何気なくテレビをつけてみたらTVHが『美丈夫ですね』を放映している。

クノイチが女である事を隠してスリーマンセルに入り恋をするという体の、連続ドラマだ。

『忍者』は見たくなかったのですぐに消した。

そして、会話も進まないまま夜を過ごし、今は家の広間で一緒に寝ている。一緒と言ってもサクラちゃんは隅の方で寝ていて、身の回

りにはきれいに忍具を並べている。見ようによつては、バリケードのようにも見えた。

鈴虫の声を聞きながら、俺達は泥のように眠りについた。

任務

里の任務は、その内容や種類、難易度等により『A B C D』のランク付けがされている。女子とするのとは反対に、任務については『A』が最高ランクだ。この4つ以外にも、さらに難しい任務でSランク任務なんてのもある。

依頼を受けるという形で任務をこなし、そのランクにあった報酬金等が、里の収入となる。高いランクの依頼であればあるほど、入ってくる収入はでかい。里に依頼をする人は、国を治めている大名から一般人までと様々だ。

下忍試験から数ヶ月が経ち、第七班はカカシ上忍のもとで任務と修行の毎日を過ごしている。

今日は『逃げた猫を捕まえる』というDランク任務を近隣の森で行っているところだ。

目標を確認して、足音を立てないようにゆっくりと近づく。猫は束縛を受けない外の生活を楽しんでいるようだ。

そして捕獲可能な距離まで近づくと、小枝を折ってわざと音をたてる。猫は敏感に反応し、音の出所に振り返った。

そこですかさず、幻術！

幻術をくらった猫は2、3歩よろけると、その場に崩れ落ちた。

昔は動物をびっくりさせるくらいしかできなかった俺の幻術も、今や猫を眠りにつかせれる程の進展を遂げていた。

寂しくなるたびにやっていた、鏡越し1人幻術の賜物だろう。

「やったわね、サスケ！」

「こゝゆゝ任務にはサスケの幻術がうってつけなんだってばよ！」

深い眠りについた猫を拾い上げると、茂みの中からリーダーとナルトさんが出てくる。

「任務達成ね。カカシ先生のところに持って行きましょ」

リーダーの指示に従い、少し離れた所でエロ小説を読んでいるカカシ上忍の方に向かった。

あの忘れもしない下忍採用試験合格後『先生って呼んでもいいよ』と言われたが、なんか『カカシ先生』って感じじゃないので俺はカカシ上忍と呼び続けている。試験内容があまりにも強烈すぎたので、なかなか彼に心を開く事ができないのだ。

「……よし、任務達成、と」

首をつかまれている猫を確認すると、カカシ上忍は手に持っていた書類にチェックを入れている。

「じゃ、行こっか」

チェックを入れ終わると、火影邸の方に向かった。

任務依頼の受付手続き等は、火影邸の中にある任務幹旋所で行われている。

そこで依頼者からの依頼を受け付け、任務として里の忍者達に割り振っているのだ。報酬金の支払い等もそこで行われている。

木の葉の里の忍者の給料は、一部の忍者を除いて階級による基本給

と任務成功による報酬金によって支払われている。一部の忍者というのは『うちは警備隊』や『学校の先生』のように普段は任務を行えない忍者達の事で、そういう忍者達の基本給は割高なものとなっている。ちなみに我が一族は、この事で里の上層部とかなり揉めた事があるそうだ。『もつと給料を上げろ!』と。

初めて給料を手にした時は、かなり興奮したのを覚えている。しかし、下忍になりたての忍者の基本給なんて微々たるものだ。成功報酬もその何割かは里に入るので、下忍に支給されるのはちよつとばかりの金額にしかない。特に今回のような『猫探し』なんてDランク任務では尚更だ。

でも、俺はDランク任務が好きだ。

Cランク以上となると、どうしても命に関わる任務が多くなってくる。成功報酬金等は魅力だが、あの試験以来、軽はずみな気持ちで受けた任務で命のやりとりをするのは、まっぴらごめんであるという気分になっている。それに、Dランクと言えど数をこなせば馬鹿にならないし、何よりやればやるほど里と自分が豊になるというのが気に入っている。

こんな俺でも里の役に立てていると思えるので、最近はDランク任務にやりがいを感じてきたところだ。

『今日も1日、里のためにキリキリ働くぞ』と俺の1日は始まり、今日は猫を捕まえていたのである。

「いやあ、どんどん太ってきてお前は可愛いんだってばよ」

ナルトさんは報酬金を受け取ると、自前のサイフに入れて嬉しそうに頬ずりをしている。ナルトさんのサイフはフグのデザインをしており、パンパンに膨らんでいる所を見るとかなりの金額がフグの中に入っている事がわかる。

以前『財産はあんまり持ち歩かない方がいいですよ』と注意した事があるのだが、『自分で持った方が安心できるんだってばよ!』とナルトさんは言ってる聞かない。

忍術の修行や任務では、たまに信じられないようなミスをする事があるナルトさんだが、サイフを落としたとか変な物をつかまされたという類の、お金に関するミスは未だに1回もしていない。サイフに頼りすぎているのを見てもわかるように、なかなかの守銭奴っぷりだ。

ナルトさんはずっと1人で生きてきたためか、お金に対して執着心が人より少しばかり強いかもしれない。俺もナルトさんを見習って無駄遣いはしないように心掛けている。

「……次の任務はどうしますか？草刈や子供の世話なんてのもありますが」

「いや、昼から修行する予定なんで、今日の所は……」

任務受付担当忍者から任務を斡旋されるが、カカシ上忍は修行をするからという理由で断り、俺達は火影邸を後にした。向った先は鈴取りをした里の演習場。

第7班はこのように定期的に任務の間をみて修行をやっている。

一日中修行という日もあれば、一日中任務なんて日もあった。

カカシ上忍はあの下忍採用試験の時の印象からして、冷徹でスパルタな人かと思っていたが、意外とそんな事はなかった。

任務の時はエロ小説を読んでいる事が多く、修行の時も最初に内容や要領といったものを俺達に伝えたあとはエロ小説を読んでいる。しかし、修行については俺とナルトさんにも解るように説明してくれて、すべてが理にかなっている事ばかりだし、任務についても俺

達の判断力や連携といったものを養うためにエロ小説を読んでいるようだ。

それに、投擲術の修行をしたら次の任務は害鳥の駆除をやるといった感じで、修行が実戦に生きるようにスケジュールを組んでいる。俺の中でのカカシ上忍は『非常に合理的で大人』という印象に変わった。

ただ、修行や任務の間だけではなく、場所や時間を選ばずにイチャイチャパラダイスというエロ小説を読んでもしょうのが玉に傷だ。

イチャイチャパラダイスは一部のマニアからは『忍者文学という新たなジャンル』なんてもてはやされているらしいのだが、具体的な性的描写といい、完全なエロ小説だ。冒頭からいきなり始まり数十頁にも及ぶ忍者プレイは、ファンの間では語り草となっている。俺も愛読者の一人。

「じゃ、昨日と同じで木登りをしようか」

演習場に到着すると、カカシ上忍から修行内容を告げられる。

木登りといっても普通の木登りではなく、チャクラを利用した足だけで登る木登りだ。なんでも、この修行をするとチャクラコントロールが上達するらしい。

「あんた達、早く登ってきなさいよ！」

リーダーのサクラちゃんが木のとっぺんから叫んでいる。3人中では、リーダーが一番チャクラコントロールが上手だった。

「昨日、コツを教えたでしょ！が！ああ！？」

出会った頃はしおらしい面を見せる事もあったサクラちゃんだった

が、最近リーダーとしての自覚が芽生え始めたのか俺とナルトさんをぐいぐいと引っ張っていく強い女子になっていた。

強い女子と言ったら聞こえがよくて、そういうのに憧れる男性諸君もいるかと思う。

俺も一時期はそう思っていた。

だが、最近の変貌したサクラちゃんを見ると、強いのは芯だけで男を立ててくれる女子が理想だなと思う今日このごろ。

「何ぼくっとしてんのよ！火影様のファックの方が気合い入ってるわよ！ああ！？」

『何を言っているんだろう』と置いていたら、足元に数本のクナイが飛んできた。

俺とナルトさんは急いで木登りの業に取りかかる。

俺に告白した頃のサクラちゃんの面影は、もはや消えて無くなっている。立場が変われば、人は変わるという事を学んだ。

チャクラを足の裏にため、勢いをつけて木を駆け上がる。途中、バランスを崩してしまい落下した。

バランスを崩した所で木に目印をつけるので、木の下から目印を確認すると昨日よりはほんの少し上に行けていたようだ。カカシ上忍は読書に励み、リーダーからは罵声という名の激励を浴びせかけられながら、俺とナルトさんは木登りに励んでいた。

こんな感じで第7班は任務と修行を平行した日常を過ごしている。木登りの業も何だかんだで1ヶ月という長い期間はかかったが、問題なく登れるようになっていた。

そしてある日、いつものように火影邸前で集合し、任務を決めるため受付所に向かう。

普段は受付担当忍者が任務を斡旋してくれるのだが、この日の受付所には三代目火影様がいらっしゃった。

三代目火影様は里を統べる長であり、『プロフェッサー』という渾名を持つ凄腕の忍者だ。パツと見は普通のじい様だけど、若かりし頃は凄腕として鳴らしていたらしい。なんでも歴代火影最強だそう。

「……カカシ班、今日は特別な任務がある」

火影様は受付所に入ってきた俺達の姿を見ると、厳かに語りだした。

「先日、紅班が波の国へ要人警護任務に出向いたのは知っているな？」

紅班とは犬塚キバという、犬を遣う一族の子とヒナタとシノで構成されている班だ。

こういう時はナルトさんの性格からして決まって何か騒ぎ出したりするのだが、珍しくおとなしくしていた。ふと足元を見るとサクラちゃんがナルトさんの足を踏んでいる。さすがリーダー、よくわかっていらっしゃる。

「依頼内容に食い違いがあったらしくてな、紅班は忍者の妨害にあってしまっただけだ」

妨害にあったと聞いて、俺達の間には緊張が走る。

「あいつらは無事なのかってば!？」

たまたまナルトさんが叫んだ。

「……幸いケガ人はいなかったようだが、紅はかなり苦戦してしばらく行動不能となってしまうたようじゃ。敵の忍者ともどもな」

「救援任務、という事ですか？」

今まで黙って聞いていたカカシ上忍が質問した。

ナルトさんとリーダーはケガ人がいないと聞いて胸をなで下ろし、深いため息を漏らした。

「表向きには、な」

「……………」

意味深な火影様の発言に、カカシ上忍は首を捻る。

俺もこういう事なのかよくわからなかった。

「妨害してきた忍者を雇ったのはガトーという男じゃ。名前を聞いた事もあるう」

ガトーとは波の国のチンピラ商人で、財力に物を言わせて悪どい事をする男として有名だった。波の国ではガトーの名前を聞けば泣く子も黙るらしい。

「実は火の国の上層部から依頼が入ってな、ガトーを暗殺して欲しい、との事じゃ」

『暗殺』という言葉聞いて再び緊張が走る。

思い出すのは、あの2日目の下忍採用試験。しかし、手や足が震えるような事はなかった。

俺もナルトさんも、サクラちゃんも。

「……火の国から、ですか？」

「うむ、波の国は隣国、火と波に橋がかかれれば交易により利益が生まれる。それを阻んでいるガトーを火が消す事により、波に恩を売って事を有利に進めたいんじゃないだろうか……依頼人の名は言わなくてもいいな？火の国上層部の然るべき立場のお方じゃ」

俺は暗殺任務といえば単純に、誰かの恨みを請け負って天誅を下すものだと思っていた。小さい頃に見ていたテレビや小説の中だと、忍者の暗殺ものと言えばそれ。勸善懲惡。

ガトーはチンピラ商人だが、暗殺される理由は悪を懲らしめる為ではなく利益の為のようだ。

深いシワを持つ火影様の顔を見ると、普段里の人々に見せている表情とは違い、深い陰が差しているように見えた。背中に冷や汗が流れるのを感じる。横目でナルトさんの顔を見た。ナルトさんは、真っ直ぐに火影様の方を見ている。

「……久々に入った大きい仕事だ。こういうのは本来、暗部の仕事なんじゃが人手がいなくてな」

「相手は忍者を多く雇っているの？」

「いや、諜報部の連絡によると雇っているのは妨害してきた忍者だけじゃ。……あやつはケチるから忍者からも嫌われておつてのう」

猫背ぎみに火影様の話を聞いているカカシ上忍の後ろ姿を見る。

『暗殺』という任務にも動じない上忍の姿がそこにあった。

「……それでは任務を命ずる。カカシ班は波の国へ出発し、ガトーを暗殺せよ！」

「……了解」

火影様はじい様とは思えない気迫を放ちながら任務を言い渡した。
カカシ上忍は短く返事をする。

第7班は初めてのDランク以上の任務をする事になった。

波の国

火影様から直々に『ガトー暗殺任務』を言い渡された俺達は、すぐに遠出の準備をして里の門から波の国へ向けて出発した。

目的地である波の国は、火の国の隣に位置していて四方を海に囲まれている島国だ。アカデミーの地理の授業でその存在は知っていたが、実際に行った事はない。

距離的には火の国と波の国を遮っている海峡さえ越える事ができれば、わりとすぐに到着する事ができる。

「遠くに行くのは初めてなんだってばよ！」

波の国へと向かう街道を歩いているナルトさんは、無邪気にはしゃいでいる。

俺も里の門を出て遠くに行くのは初めてなのでワクワクしているのだが、リーダーであるサクラちゃんの目が怖いので我慢している所だ。

「ちょっと！旅行に行くんじゃないんだから、もっと緊張感を持ちなさいよ！」

さっそくナルトさんはリーダーから叱責を受けている。カカシ上忍はそんな第七班のいつもの光景に、目を細めて見ている。

あの採用試験以来、カカシ上忍の第一印象であつた冷徹さといったものは、まったく見られなかった。

エロ小説を人目はばからず読むこと意外は、時間に正確で真面目な上忍。『理想の上忍は？』という質問を里の忍者にすれば、八割り

近くがカカシ上忍の名前を言うと思う。少なくとも俺はカカシ上忍と言う。

ただ、あの時言い渡された選抜試験の内容が強烈すぎたため、心を開く事ができず『先生』ではなく『上忍』と呼んでいる。

『仲間を見捨てる奴はクズだ』という言葉からもわかるように、もともとは冷徹な性格じゃないと思う。

なぜあの時、俺達にあんな事をさせたんだろう？

そんな事を考えていたら、心配そうに覗きこんでいるカカシ上忍の視線にふと気付く。

「……緊張してんの？」

「……はい、まあ」

門を出たばかりなのでさすがに緊張はまだしていない。とりあえず、お茶を濁しておく。

俺は何となく気まづくなってしまう、なるべく目をあわせないように周りの風景を見た。

「先生！火影様も言ってたけど、ガトーが雇った忍者って……」

説教をし終わったサクラちゃんが、ナルトさんの襟を掴みながらカカシ上忍の隣に来了。ナルトさんは借りてきた猫のように大人しくなっていた。

「ああ……霧の抜け忍、鬼人再不斬ね」

「鬼人、再不斬……」

カカシ上忍はどうやら知っているようで、俺達に分かり易く桃池再不斬さんの事を話してくれた。

霧の里のアカデミー卒業試験では歴史に残る大問題を起こし、水影の命を狙ってたけど失敗したから今は里を抜けてる無音暗殺術の達人という。

「……って感じの人だよ」

「何だそいつ！とんだイカれ野郎だってばよ！」

再不斬さんの伝説を聞いて、俺とサクラちゃんは唾を飲み、ナルトさんは怒りをあらわにした。

「紅先生やヒナタ達は、本当に大丈夫なんですか？」

「ああ、みんな無事だ。ただ、紅は鬼人との交戦でしばらく動けないみたいけどな。連絡もきてるから心配は無いよ」

カカシ上忍がそう答えると、サクラちゃんは少しだけ溜め息を漏らした。

それでも先程の鬼人の話を聞いて、今後の事がますます心配なものとなってしまった。

自然と道中の口数が少なくなってくる。

「死なせたりしないよ」

不安にかられている俺達の事を見越してか、先頭を歩いていたカカシ上忍が振り向きながら妙な口調でこんな言葉をかけてくれた。微笑んでいるその姿に、最初に感じた冷徹な印象は見る影も無くなっていた。

でもまだ心を開く事はできないので、カカシ上忍と呼ぶ事は変えない。

波の国は島国であるため、辿り着くには海峡を越えなくてはならない。

件のチンピラ商人も四方が海で閉鎖されているのを良いことに、この国の廻船業を牛耳ってやりたいほうだいしているらしい。

この閉鎖的な状況を打開すべく大陸と島の間には橋を建てようとするが、ガトーに阻まれるため『橋作りの名人』の警護を里に依頼していたのだ。

海峡を目の前にしてカカシ上忍の思いつきで『水上歩行』の修行が始まる。

『木登りができたのなら、次はコレでしょ』だそうだ。

『水上歩行』の修行は、チャクラを上手く使って水面に立つという至ってシンプルな修行方法だが、『木登り』と比べるとチャクラコントロールが段違い難しく、俺とナルトさんは何度も何度も海に沈没した。その度に、影分身して俺達とマンツールになっているカカシ上忍に幾度となく救助される。

ちなみに3人の中では、やはりサクラちゃんが一番うまかった。

リーダーは最初こそ沈没していたが、何回目かでコツを掴んだように、今は普通に水面を歩いている。その後ろ姿に目を凝らしてみると、濡れた服からうっすらと下着のラインが浮き出ていてかなりエロい。

しかし、そういう事を考えているとチャクラが乱れてすぐに沈没してしまう為、俺は自分の足裏に意識を集中させた。

ナルトさんと俺は定期的に短い悲鳴をあげながら、沈没と救助を繰り返している。しばらくしたらナルトさんが大人しくなったので『まさか!』と思い視線を向けると、なんとナルトさんは四つん這いになって水面歩行をしていた。足の裏だけではチャクラコントロール

ルが難しい為、両手も利用してバランスをとっているという訳だ。四つん這いになって無様に水面歩行するナルトさんを見て、俺も迷う事なく四つん這いになった。前に行くサクラちゃんから『暗殺する前に老衰で死ぬわよ!』と激励される。

俺達は何も言わず歯を食いしばり、這いつくばりながら波の国へ目指した。

波の国に上陸する頃には、俺の水面歩行は四足から二足へと進化して、今は猿のようにぎこちなく歩いている。

思いのほか早く二足歩行に進化できたので『俺、実は才能あるかも』と喜んでいたが、『海は浮きやすいからね』というカカシ上忍の言葉聞いて、『やはり、そうか』と一人合点した。

この海峡を越えるにあたり、水中生物から四足、二足と進化を遂げ、チャクラコントロールとともに人類の進化の系譜も学ぶ事ができたような気がする。海は生命の源だ。

波の国に到着したら、いったん紅班と合流する手だてになっている。まずはこの国の事やガトーの事などの情報を収集するためだ。

虫使い一族であるシノの昆虫が上陸地点で待っていてくれたようで、今は合流場所まで誘導してくれている。小さいので見失ってしまいそう。俺達は目を皿のようにして昆虫の後を追って、波の国の中を進んで行く。

波の国は件のチンピラ商人のせいで治安が荒みきっているようで、ようやく人気のある所まで来たなと思ったら路上ひったくりの現場に遭遇してしまった。

何やら叫び声が聞こえたので声が聞こえた方に振り向くと、全力で逃げている犯人とそれを追いかける被害者。

パッと見で犯人の年齢は、ちょうど俺達と同じくらいの年頃だった。

ナルトさんがすぐに追いかけてようとしていたが、カカシ上忍に止められていた。今は任務優先という事だろうか。

シノの昆虫に誘導されながら辿り着いた先は、木造の民家だった。どうやらここに紅班がいるらしい。

そのまま民家に入ろうとしたら、急に扉が開いて一匹の子犬が飛び出してきた。

「……よう、早かったな」

子犬に続いて出てきたのは犬塚キバという、アカデミーの同級生。普段は元気な少年なんだが、少しバツの悪そうな表情をしている。

余談だが、犬塚一族とは忍犬を操り共に戦ったりする一族だ。一族の者は総じて鼻が良かったり、犬の気持ちがわかったりするらしい。名字を『犬飼』とかじゃなく『犬塚』にしている点に、犬に対する深い愛情を感じる。木の葉の名門だ。

話もそこそこにキバの案内で木造民家にお邪魔する。

居間に入ると布団に寝かされている紅先生がいた。酷く顔色が悪い。

「……カカシ、悪いわね」

「いや、いい。それより……」

カカシ上忍は早速、情報収集に入ったようだ。女子の体調とか関係なしに仕事を始めるその姿勢に、俺はなぜか『仕事人間』という美しさを感じてしまった。そして、絶対にこの人は結婚できないだろうなと思った。

カカシ上忍を見習い、俺もキバから情報収集に入る。シノとヒナタちゃんの姿が見えないので『どうしたのだ』と聞いてみたら、既に橋の作成に入っている要人の護衛で現場に出ているらしい。

紅先生の顔色が優れないので『何があったのだ』と聞いてみたら、キバは下を向いて黙りこんでしまった。

元々この任務は紅班だけでやるものだった。

再不斬の存在は想定外とはいえ紅先生が寝込んでしまう結果事に、自分達の不甲斐なさを痛感しているように見えた。

己の力不足は俺も常々感じているので、悩める同級生の肩を軽く叩き、それ以上は何も聞かなかった。

しばらくすると、カカシ上忍は情報収集を終えたようで、俺達を外に呼び出した。

「……明日の夜、やるぞ」

「……………」

懐かしい顔を見てホッとしていた俺達に緊張が走る。

「紅が寝込んでいるように、再不斬も負傷しているらしい。しばらくは、動きは無い」

「……ハイ」

カカシ上忍の説明にリーダーが短く返事をする。

「この任務はBランク並みの任務だ。俺もサポートはするが、明日はお前らでやってみろ」

俺達はお互いの目を見て、力強く頷きあった。

「今夜はココに泊めてもらえるそうだ。ま、明日に備えてゆっくり休め。……散」

一旦解散になったので今夜の宿である木造住宅に向かう。カカシ上忍も一緒にくるかと思いきや、家とは違う方向に向かって行った。

「先生は、どこに行くんですか？」

リーダーがすかさずカカシ上忍に聞く。

エロ小説を読みながら歩きかけていたカカシ上忍は足を止め、死んだ魚の目で俺達の方に振り返った。

「ん、ガトーのアジトを調べてくる。こーゆー任務はそもそも暗部がやる任務だし、俺もサポートすると言ったからな。お前たちは休んでていーよ」

カカシ上忍はエロ小説片手に猫背ぎみの姿勢でそう答えた。

『何ならそのままやっちゃってくれればいいのに』と思ってたら、

「これは修行の一環でもあるんだから、俺がするのはここまでする！」

と釘を刺され、カカシ上忍は姿を消した。

「……行っちゃったね。戻ろっか」

カカシ上忍は木の葉を残して姿を消し、俺達は再び家に向かう。

「それにしても紅先生、顔色悪かったわね……」

「紅先生を寝込ますなんて、再不斬って奴、相当な手練れなんだってばよ！」

「……………」

ナルトさんとリーダーは紅先生の顔色が悪いのは、再不斬のせいであると思っている。

俺も、ついさっきまでは『その通りだ』と思っていた。

だが、今ははっきりと言える。

『それは、違う』と。

確かに再不斬は鬼人という名にふさわしい、手練れかもしれない。

しかし、紅先生も上忍なのだから相当にやる。

木の葉の上忍が鬼人と言えども抜け忍風情のゴロツキに遅れをとる、なんて事は絶対に有り得ないんだ。

ではなぜ、紅先生の顔色が悪いのか。

それはズバリ、紅先生は生理だからなのだ。

キバは紅先生の顔色について尋ねられた時、下を向いて黙りこくった。最初は力不足を痛感しての事だと思っていたが、ここが違う。

犬塚一族は、鼻が効く。

つまり、キバは匂いでわかつちやうのだ。

あの時何も言わなかったキバの気持ちがわかる。

あいつは、ワイルドそうに見えて意外とデリケートだったんだ。

点と点が繋がり線となった俺は、家に入るとジェントルマンなキバの肩を再び叩いた。

「……キバ、お前はすげえよ」

「えっ？」

「今夜はレバーがいいな！きっと血が増える」

「はぁ！？」

キバは事実を知られてもしらばつくれるという、非常に大人な対応を見せた。どこまでも、紳士な奴だ。やんちゃな奴と思っていたが、見直さなければなるまい。

ちなみに、この日の晩飯は波の国の郷土料理、海鮮鍋だった。

海の幸がふんだんに使用されていて、さっぱりとした味付けのこの鍋はご飯との相性もバツチリだった。木の葉では味わう事のできない料理に皆舌鼓を打った。

白さん

橋作りの名人と言われる要人は、タズナさんという名の老人だった。海鮮鍋を食ってる時にシノ達と一緒に現場から帰ってきた。

口癖なのか、会話の所々に『超』をつけて喋る元気なじい様だ。

じい様のこの妙な口癖を聞いていると、俺んちでは『超』をつけてうっかり話せば『そんな言葉は遣いなさんな』と母さんに怒られていたのをふと思い出す。

昨晩はタズナさんの孫とナルトさんが一悶着を起こしたり、ヒナタちゃんがナルトさんを見て気絶したりと色々あったが、二つの班が任務で集うなんて事はめったに無いので、何だかんだで楽しい夜であつた。

そして今日は、ついにガトー暗殺決行の日。時刻は昼だ。アジトの偵察から帰ってきたカカシ上忍の情報を聞き、アジト潜入から暗殺、撤退までの作戦を午前中のうちに練った。

「……ま、いいんじゃない」

作戦を練ったのはもちろんリーダーで、その内容をカカシ上忍に伝えたとゴーサインが出た。

そして今は、近所の森まで薬草を採りに来ている。

紅先生の具合がいまだに思わしくないからだ。昨日始まったとすれば今日が二日目、さもありません。

カカシ上忍から『夜に備えてできるだけ休んどけよ』と言われたが、

初の暗殺任務に興奮して休むどころではなかったので、俺とナルトさんは薬草採取を手伝っているという訳だ。

リーダーはタズナ宅に残って紅先生の看病をしている。

やはり、女子の事は女子が一番良く知っている……

「おっ！見つけ〜！」

「ナルトさん、それはかぶれるやつですよ」

昼下がりの心地よい木漏れ日の中、のどかな時間が流れる。

今夜暗殺しに行くなんてまるで嘘のように思えてしまうぐらいだ。

「……すり潰せばわかんねえってばよ！」

「そういう問題じゃないです」

そんないつもの会話をしていたら、森の中から笑い声が聞こえてきた。

「むっ！そこに居るのは誰なんだってば！出てきやがれ！」

ナルトさんが笑い声の聞こえた方に向かって吠える。

吠えた方向の反対側から、籠を手を持った黒髪の女子が俺達の前に姿を現した。

「フフ、すみません。お二人のやりとりが面白かったもので……」

黒髪の女子は口元に手をあてながら、慎ましやかに笑っている。大きな瞳に雪のような白い肌、黒くて長い髪がいつそう際立たせている。服装が二の腕をちらつかせた挑発的なノースリーブなのもポイントだ。やはり女子はこうでなくては。うちのとは大違いだぜ。

俺はどうやらこの可憐で純情そうなお嬢さんに恋をしてしまったようです。

「おじよ——」

「ねえちゃんはこんな所で何をやってんだってば？」

ナルトさんとほぼ同じタイミングで言葉を発するも、声の大きさを負けてしまう。

「君たちと一緒に、薬草を採りにきてるんです」

お嬢さんの微笑みは、この世の汚れを全て浄化してしまえそうに思えるほど、素敵だった。是非とも名前を聞いて、お近づきになりたい。

「おじよ——」

「へえ、奇遇なんだってばよ！」

またしてもナルトさんの澆刺とした声にかき消される。

しかし次の瞬間、奇跡のような出来事が起きた。

お嬢さんは苦虫を噛み潰したような顔をしている俺を見て『あっ！』と短く声をあげ、なんと俺の方に向かって駆け寄ってくるではないか。

俺の今までの人生は一族を失ったり変な上忍が担当だったり、思い返せば幸運よりも不運の方が多かったような気がする。そんなに不運ばっか続いてたまるか。

駆け寄ってくる綺麗なお嬢さんを、俺は胸をときめかせて待ち構えた。

「コレ、飲んだらお腹壊しますよ」

お嬢さんは俺が持っていた草をヒョイと掴むと、素敵な笑顔でポイと森の方に投げ捨てた。

「……サスケエ」

「……………」

ナルトさんがじと目で俺を睨む。

「ねえちゃんは薬草に詳しいんだな！俺達は見ても通り馬鹿だからさ！薬草の事を教えて欲しいんだってばよ！ねえちゃんの分も手伝うからさ！」

ナルトさんの提案でお嬢さんと一緒に薬草採取をする事になった。薬草についてあれこれと教えてもらいながら、採取に励む。

「そーいえばさ！ねえちゃんは何て名前なの？」

薬草をむしりながらナルトさんが言った。

「……白、と言います」

お嬢さんの名前は『白』という素敵な名前だった。名は体を表すと言うが、まさにその通りの名前だなと思う。

「へえ、白って名前か。俺はナルトでこいつはサスケ。よろしくなんだってばよ！」

「ナルト君と、サスケ君、ですか……仲が良いんですね」

白さんは薬草を採っている手を止め、俺達の方を見て微笑んだ。

「俺は将来火影になって、木の葉の里を担う男なんだってば！覚え
といて損はないってばよ！」

「ナルトさん……」

忍者が初対面の人に自己紹介を始めてしまった。ナルトさんに自粛
するよう呼びかけるが、スイッチが入ってしまったナルトさんを止
めるのは難しい。そして何より、絶対的な抑止力であるリーダーが
この場に居ない。

「……忍者、なんですか？」

俺達が忍者だと知って白さんは驚いたような表情をしている。

「忍者って、もっと怖い人達になるものだと思ってましたが、君達
は違うんですね」

「いや、そんな事はないんだってばよ！なあ、サスケ！」

「……………」

別に褒められてる訳では無いと思うんだけど、ナルトさんは照れて
いるようだ。

「この国に何か用事でもあったんですか？」

「ガトーっていう悪人を退治するためなんだってばよ！」

「馬鹿かお前っ！」

ナルトさんは天然であると常々思っていたが、ここまでひどいとは思っていなかった。まさか任務内容をこうもあっさり口にするとは。普段使っている敬語も忘れてナルトさんと揉み合いになる。

「何だサスケ！俺は間違った事は言っていないってばよ！」

「黙れ！」

その様子を見て白さんはおかしそうに笑っている。

「フフ……この国でガトーの事を悪く言わない方がいいですよ」

「俺は正しいと思った事を言う！やる！それが俺の忍道だあ！」

この期に及んでナルトさんはまだ喋る口を止めない。俺は必死にその口を塞ごうとするも馬鹿力に阻止される。リーダーが居ればこんな事には……

「……火影になって、どうするんです？」

白さんの突然の問いかけに、揉み合っていた俺達の動きが止まる。雰囲気が変わったと言うか、この時の白さんは先程までのように笑ってはいなかった。

「……今はまだわからねえ。でも、火影になって木の葉の里を護っていきってえんだってばよ！里のみんなが、好きだから」

「……ナルトさん」

ナルトさんは里の多くの人から理由はわからないが嫌われていた。アカデミーでも多くの生徒からは馬鹿にされていた。

そういう奴らを見返すために火影を目指すと言っていたが、この言葉が本心だったのかもしれない。

服を掴んでいる手を離してナルトさんの顔を見る。

『火影になる』と信じて疑わない、いつものナルトさんの姿があった。

「人は……大切な人を守りたいと思うときに、強くなれるんだと思います」

大切な人……

大切だった人はもういない。

今の俺にとっての大切な人は……

ナルトさん、リーダー、アカデミーの同級生や先生の顔が思い浮かんだ。一楽のオヤジを始めとする、今までに出会ってきた人達。みんな、里の人だ。最後に兄ちゃんも……

「ナルトくんは、強くなれます。火影にも、きっと」

白さんは集めた薬草を籠の中に入れて立ち上がった。

「薬草を採るのを手伝ってくれて、ありがとうございました。またどこかで、会いましょう」

微笑みながらお礼を言うと、森の中の方へと歩き出した。

「白のねえちゃん！元気でなく！」

ナルトさんが手を振りながら言うと、白さんの歩き出していた足が止まった。

「……ガトーには二人の護衛が常についています」

「えっ？」

「その二人は居合いを使います。一人はサウスポーなので、勝手が少し違うと思います。注意して下さい」

こちらを見る事なく、背中越しに白さんは言う。
でもなんで、ガトーの事を知っているんだろう？

「最後にもうひとつ……僕は、男ですよ」

「ええっ!？」

衝撃的な発言を残し、白さんは森の中へと消えていった。
俺達はしばらくその場に立ち尽くした。

「……聞きましたか、ナルトさん」

「……サクラちゃんより、上物なんだってばよ」

俺達は集めた薬草を手に持ち、打ちひしがれながら帰路についた。
なぜかはわからないけど白さんがガトーの情報を教えてくれたので、
とりあえず帰ったらサクラちゃんにこの事を伝えて作戦をもう一度
練り直す事に決めた。

家に帰るまでの間、今夜の任務についてナルトさんと話していたが、途中から『もしも白に告られたら断る自信はあるか』という、もの凄くどうでもいい話しをしながら帰った。

時刻は夕方ちょい前の昼下がり。家に向かう足は自然と早くなっていた。

暗殺

俺達は今、ガトーのアジトの天井、配管内を這いつくばって進んでいる。

すぐ目の前ではリーダーの尻が前に進むたびに左右に揺れているのだが、リーダーは時々もの凄く鋭い目で後方を振り返るので凝視する事はできない。

昼間、白さんから教えてもらった護衛の情報をリーダーに伝えようと、すぐに作戦は変更された。

なぜ最初にその事を教えないのかとカカシ上忍に問いつめたら『あれくらいなら問題ないでしょ』と軽く言われた。やっぱり信用できない。

当初の作戦は通気口から侵入してガトーを監視、暗殺。1人が退路の確保にあたり、暗殺が成功したらすぐに逃げるといふ、非常にシンプルなものだった。

作戦を建てた時、『こゝゆゝのは、わかりやすい方がいいのよ』と、リーダーは呟いていた。

しかし、護衛が2人つくといふ情報により作戦は大幅に変更となり、今俺は揺れる尻をチラ見しながら配管の中を進んでいるのだ。ちなみに侵入経路で通気口を使う事は、変更しなかった。

「……着いた」

アジトの通路、廊下の辺りにある通気口で待機となる。

護衛がついている以上、強引に行こうとすれば人を呼ばれる恐れもあるし、下手をすれば返り討ちにあらう可能性もある。

まず護衛を最低でも1人潰して、数的優位を作り出してから速攻というのが作戦だ。

この作戦で行くとカカシ上忍に言う『慎重すぎやしない？』と言われたが、初めての暗殺任務なので慎重策でいくとリーダーは決心したのだ。

「じゃ、私はガトーの部屋に行く。作戦通り頼むわよ……失敗した時はわかってるわね」

俺とナルトさんは頷き、リーダーは尻を揺らしながらガトーの部屋へと通じる配管を進んでいった。手元には俺達とリーダーを繋ぐ糸が残されている。護衛が部屋を出る時は、リーダーがコレを引いて俺達に教える手だてだ。

失敗した時とは、護衛とガトーが用を足す時も常に一緒に行動するなど不足の事態が発生した場合で、リーダーの判断で起爆札を使う。俺とナルトさんが失敗したら『後で酷いわよ』とか、そういう事ではない。

俺達は通路の通気口で護衛を待ち構えた。

「……来ますよ」

「わかってるってば」

何時間待ったのだろう。実際は数十分だったのかもしれない。護衛がやってくるか起爆札の爆発音がするか、不安で心配になりながら通気口の上で待っていると、リーダーが残っていた糸が動いた。廊下からは扉が閉まる音とともに、足音が聞こえる。護衛が近づいてきているようだ。

「ナルトさん、頼みますよ」

「まかせとけってば」

配管内とはいえ、声は響く。

最小に絞った声でナルトさんを激励すると、ナルトさんは通気口から通路へとおりた。

「……なんだ？」

通路の真ん中で俯き加減に立っているナルトさんを確認すると、護衛はすぐ様に柄に手をかけた。

「まだガキじゃねえか。てめえ、忍者、か？」

護衛は柄に手をかけたまま、にじり寄るようにしてナルトさんとの間合いを詰めていく。

「……3秒やる。ここで死ぬか、大人しく言うことを聞くか決めろ」

ナルトさんとの距離がある程度詰まると、護衛の足が止まった。ナルトさんは手に持ったクナイを構えたまま、何も喋ろうとはしない。ナルトさんの足と手は、震えているようだった。

「3……2……」

その様子を見て護衛は笑みを浮かべ、カウントダウンを始めた。ナルトさんは、動かない。

「イチイッ！」

不意に護衛の刀が真一文字に抜かれ、ナルトさんの体を二つに切った。
切られて二つになったナルトさんの体は崩れ落ちるように倒れ、音をたてて消えた。

「なっ！」

「居合いが抜いちゃあ……おしまいだってばよ！」

影分身。

通気口から本物のナルトさんが護衛の背後に降り立ち、持ち前の馬鹿力で後頭部を殴った。

殴られた護衛は声をあげる事もできず、前のめりに倒れる。

最初に通路に降りたナルトさんの影分身はこの奇襲を成功させるべく、通気口の下に護衛が来るよう誘導もかねていたのだ。

「やりましたね、ナルトさん」

護衛が倒れた事を確認して、俺も通気口から降りる。

ナルトさんは手持ちの縄で伸びている護衛を縛っている。何も言わずに、俺に向けて親指をたてた。

ナルトさんの仕事はここまでだ。次は、俺の番。

俺は変化の術で護衛に変化すると、刀を奪い取って腰に差した。向かう先は、ガトーの部屋だ。

『俺は、役者だ』

ガトーの部屋の扉を開ける前、俺はこの言葉を頭の中で何度も反芻

させる。深呼吸する事も忘れない。俺の仕事は、ガトーの護衛という役者になりきる事だ。

有り得ないくらい心臓が鳴ったまま、扉を開けた。

ガトーの部屋は、ドラマで有りそうな『ボスの部屋』って感じだった。

社長椅子に座っている中年がガトー。その隣には眼帯をした男が立っている。長い刀を差しているので、護衛と見てまず間違いはないだろう。

俺は平静を装ったまま、ガトーに近づく。そして隙があれば、この刀で切る。

「……待て」

二、三步足を進めた所で、眼帯の男が低い声で静止をかけた。ガトーとの距離は、まだ遠い。

「てめえ、ゾウリじゃねえな」

眼帯の男は鋭い目つきで俺を睨む。柄には手がかけられている。

「……何を言ってんだ。俺はゾウリだぜ」

俺は、役者だ。

先程ナルトさんに気絶させられた護衛はゾウリという名前らしい。声の上擦ってしまわないよう注意しながら喋った。まだ、距離が足りない。近づかなくては。

「フン……良い事を教えてやるよ。ゾウリはな、『左利き』なんだ

ぜ」

「――！」

とっさに左手で竿を掴む。俺は刀を左に差していた。眼帯の男の姿勢は柄に手をかけたまま、みるみる低くなっていった。室内は張り詰めた空気で満たされる。

「……バレちゃあ、しょうがねえ」

俺は変化の術を解き、元の姿に戻った。

眼帯の男と同じように、半身になりながら姿勢を低くしていく。

俺は、役者だ。

居合いの達人であるかのように。

「木の葉に伝わる神速の秘剣『鬼殺し』……とくと味わえチンピラども！」

俺の右手はゆっくりと弧を描き、半身となって構えている柄へと向かう。

しかしその右手は柄を握る事はなく、竿を持っている左手へと向かい、奴らに見えない角度で印を結んだ。

結んだ印は、もちろん幻術。

「ぐっ！！」

俺を睨みつけていた眼帯の男は短く悲鳴をあげた。

ガトーは俺と眼帯とを交互に見ている。

「今だ！リーダー！」

俺はこの部屋の通気口に潜んでいるリーダーを呼ぶ。

同時に社長椅子の上にある通気口が開き、リーダーが降りてきた。

そしてリーダーは、飛び降り様にクナイをガトーの首に突き刺した。

ガトーは喉の奥から振り絞るようにして出されたしわがれた声を発し、椅子に座ったまま机に突っ伏した。

「……任務、完了ね。すぐに撤退するわよ」

リーダーはそう言うとともに通気口へとよじ登った。

俺は痺れている眼帯男の背後に回り『御免！』と手刀で首を打ったが、男は立ったままだった。

3回ぐらい『御免！』したら男はようやく意識を断たれたようで、床に崩れ落ちた。

「何してんのよ！早く来なさいバカ！」

通気口から首だけ出しているリーダーが、凄い目つきで俺を睨みつけながら押し殺した声を出す。

俺はすぐさま通気口によじ登った。

その後、縛った護衛を監視しているナルトさんと合流して、来た配管に戻る。目の前はリーダーの尻だ。

帰り道にもう一山くらいあるかもと覚悟していたが、無事にアジトから撤退できた。

アジトから外に出ると、カカシ上忍がエロ小説を読みながら待っていた。

「終わったみたいだな」

「ハイ」

「……護衛は殺さなかったの？」

「……ハイ」

エロ小説から目を離れたカカシ上忍は、護衛の生死を確認してきた。その問いに、リーダーが小さい声で返事をする。

今回の作戦を練っている段階で、リーダーが頭を悩ませていた事だった。

リーダーが出した答えは、カカシ上忍にとっては『甘い』結果と映ったのだろうか。

「術を見られたなら、生かしてはおけないはずだ」

「……………」

死んだ魚のような目で、カカシ上忍は忍者としてなら当たり前的事を言った。

俺達は何も言えない。

「……先生なら、どうしてましたか？」

「……一緒だよ」

「えっ？」

長い沈黙が続いた後、リーダーが意を決したように尋ねると、意外な言葉が返ってきた。

「任務は達成した。誰もケガしていない……結果オーライかもしれないが、最初にしてはよく頑張った……帰ろう」

「……ハイ」

カカシ上忍の手がリーダーの頭に置かれる。ロリコンか。

月明かりに照らされながら、俺達はタズナ爺様の家へと戻る。帰りがてらに、カカシ上忍は俺達に任務と仲間についての事を話した。

仲間が危険に晒されるなら、その危険を排除しなければいけないし、任務は達成しなければいけない。

非情に徹し、護衛もろともガトー一味を根絶やしにする方法もあった。

任務はガトーの暗殺。

長く忍者をやっていると、感覚がマヒしてシリアルキラーになってしまいうようになる。

それが忍者の理想像だと言う人もいるが、草むしりをするように路傍の命を引っこ抜いてもいいのか？引っこ抜く力を持っているのなら、使い所を間違えてはいけない。仲間が引っこ抜かれそうになっているのを見捨てるのはクズで、無闇やたらに引っこ抜くのは馬鹿、

逆に引っこ抜くのを恐れてしまったら忍者は務まらない。下忍採用試験のあと、気分は良かったか？

エロ小説を読みながら、カカシ上忍はそんな事を俺達に話した。

カカシ上忍が読んでいるのはエロ小説ではなく、道徳的な本なのでは思い表紙を確認するが、紛れもなくエロ小説であった。あの下忍採用試験は、日常の感覚をマヒさせる為だと思っていた。今はなんとなく、あの試験の本当の目的が何だったのか解ったような気がする。俺が考えてるのは、違いかもしれないけど。

梟の声が聞こえる。

下忍試験の時とは違い、月明かりに照らされた明るい道は、歩いても平気だった。

「……サスケ」

不意にリーダーから名前を呼ばれる。

月に照らされているサクラちゃんの横顔は、普段と変わらない稟とした表情をしていてとても綺麗に見えた。

心地のいい夜風がサクラちゃんの髪を揺らすと、より魅力的に映る。

「……サクラ」

俺も名前を呼ぶ。

最近は怖かったので名前を呼ぶ事すらできなかったのだが、今夜は何だかいけそうな気がしたのだ。満月だし。

「神速の秘剣『鬼殺し』って何よ……」

「えっ？」

「カッコいいとも思ったの？」

「右と左がわからないみたいね」

「何ですぐに撤退しないで『御免!』とかしてたの？」

「流行るとでも思ってたの？」

「……見てたでしょ」

それからタズナ宅に着くまでの間、侵入から撤退に至るまでダメ出しをくらい続けた。

来た時よりも長く感じる帰り道、いつもより長く感じる今日の夜だった。

鬼人と白

ガトー死亡の情報は、またたくまに波の国全体に広まった。苦しめられていた住民達は歓喜の声をあげ、祭りを始める村もあったと聞く。

そして、火と波を繋ぐ橋『火波大橋』がついに完成した。

「いつかは『ナルト大橋』みたいな感じで、土地に名前を刻んでやりたいんだってばよ」

完成した橋を見てナルトさんは呟いていた。

橋が完成するまでは、表向きの任務は紅班の援護なのでタズナ宅に泊まらせてもらい、修行を平行しながら護衛任務についた。

ガトーがいなくなったので、タズナさんが狙われるような事はまず無いのだが、ガトーの残党や鬼人が逆恨みして狙ってくる事は絶対に無いとはいえない。万全を期して橋の完成まではタズナさんを護衛している。

紅先生はこの度のガトーの急遽は何となく察しがついているようだった。

この火波大橋の完成も、ガトーの妨害が無くなったため予定よりもかなり早く完成した。

そして、タズナ爺様達との別れの日。

「超寂しくなるのう……」

「ナルト兄ちゃん！またな！」

橋の袂でお世話になったタズナ爺様の家族と別れを交わす。ナルトさんはいつの間にか爺様の孫とマブダチになっていた。

「カカシ、すまないね」

まだ具合が悪そうな紅先生は、松葉杖をつきながらの見送りとなった。

紅先生の体調が良くなるまで、紅班はしばらくこの地に残るそうだ。長い生理だな。

「キバ、シノ、ヒナタ……じゃあな！」

「先に帰ってるってばよ！」

紅班のメンバーにも別れを告げる。里に戻れば、またすぐに会う事になるだろうけど。

でも、ガトーを暗殺してから爺様の家で過ごした数日間はとても楽しい毎日だった。

シノとは久々に将棋をしたり、キバのワンコと遊んだり、爺様の孫に釣りを伝授したり。

ヒナタちゃんはナルトさんしか見ていなかったもので、喋る機会が無かったのが残念だ。

一つ屋根の下で女子と男子が生活をともにするのはドキドキした。爺様も賑やかになったと喜んでいたみたいで『大家族じゃなく超家族になったわい！ガッハッハ』と、1人で言って1人でウケていた。

紅班とタズナ一家に見送られながら橋を渡り、木の葉へと向かう。帰りがけにチラリと見た住民達の顔は、この国に来た時とは違い心なしか明るい表情になっているように思えた。

「これで、変われば良いんだけどな」

カカシ上忍が1人言のように呟く。

橋を渡れば、火の国だ。

橋を渡り切る前に、向こう側からも歩いてくる人がいた。

霧がかかっているため良く見えないが2人組みのようで、シルエツトから判断すると大人の子供連れのようにであった。

橋の上で俺達との距離が縮まっていき、十メートルくらいになる。

先頭を歩くカカシ上忍が右手で俺達に止まるよう指示をした。

「……霧の抜け忍、桃池再不斬クンじゃないですか」

鬼人、再不斬。

その名前を聞いて俺達の間に緊張が走る。ナルトさんとサクラちゃんはずぐにクナイを構え、俺は幻術の印を結んだ。

「……千の技を持つ男、コピー忍者のカカシ、やはり貴様か」

霧の中から姿を現したのは、口元を布で隠し眉毛の無い大男。背中には大きな刀を背負っている。鬼人という名にふさわしい迫力を持った男だった。

「俺の雇い人を殺りやがったのは」

「……ああ」

カカシ上忍と再不斬の間に一触即発の空気が流れ、否が応でも緊張が高まる。

「どうする？ 鬼人よ」

カカシ上忍は斜めに被っている額当てに手を触れた。
再不斬は腕を組んだまま、俺達の方に一瞥をくれた。

刺すような眼光に射抜かれる。幻術を仕掛ける隙もない、上忍の殺気だった。

「……………フン、報酬も無しにお前と闘うのは、割があわねえ」

「そうしてもらえると、俺も助かるよ」

幾分か当てられていた殺気が引いていくのがわかる。俺は上忍同士の対峙を見逃すまいと目を見やる。

「それに、『報酬』は既にもらえたからな」

再不斬がそう言うと、今まで霧に隠れていたもう一つの影が姿を現す。

霧の中から出てきたのは、何と白さんだった。手には大きなケースを持っている。

「おっ！ また会ったんだってばよ！」

ナルトさんの声が張り詰めていた緊張を破る。

「知り合いか？」

カカシ上忍と再不斬の声がかぶった。

白さんは相変わらず男とは思えない容姿をしている。

「ナルホド、『報酬』を頂いちゃった訳ね」

「あの仕事が終われば、あいつを殺る予定だった。勝手にくたばったとなったら、どうしようと俺の勝手だろう………やらんぞ」

「いらんよ……これで、俺達は闘う理由が無くなった訳だが」

「そうだな、せいぜい安月給で食いつなぐいでろ………絶対にやらん」

「だからいらんて」

「フン……行くぞ、白」

「ハイ」

再不斬と白さんは霧の中に姿を消していった。

結局、白さんと話す事は無かった。霧の中に消えていく前、俺達の方を見て少しだけ微笑んでいたような気がした。

再不斬と白さんがいなくなって、橋の上には第7班の4人だけとなった。

白さんについてカカシ上忍に聞かれたので、暗殺前に一緒に薬草採取した時の事を話した。

「鬼人も丸くなったな……その子のおかげかもしれん」

再不斬達が消えていった方を見ながら、カカシ上忍は呟いた。

「でもあの子、色白くて凄く可愛いかったわね。再不斬いい趣味してるわ」

白さんについて勘違いしている人がいる。

俺はここ数日、いや、第7班が結成されてから今日に到まで浴びせられた数々の罵詈雑言を思い出した。

そして、リーダーにも少しだけ衝撃を受けてもらおうと思い、あの真実を伝える。

「……………リーダー、ここだけの話し、あの子は男ですぜ」

「……………」

リーダーは真実を知って体が硬直してるようだった。

フッフ、衝撃を受けたか。世の中には己よりも可愛い男子がいるという事を。

よっぼどのドMかフェチでない限り、見た目でリーダーと白さんのどちらかを選べと言われたら、十中八九、白さんと答えるだろう。

日頃はツンを通り越して抜き身の刀のような鋭さを放っているリーダーが、プライドをずたずたにされている様子を見て俺はほくそ笑んだ。

しかし、リーダーの精神は思ったよりずぶとかった。

「……アンタ、見たの？」

「えっ？」

「だから、ちゃんと見たの！？男だって！」

「み、見たって……見た訳じゃないけど、『僕』とか『男です』って言ってたぜ。なあ、ナルトさん」

「うおっ？ああ、言ってたってばよ。白は男……」

「だ〜か〜ら〜！そういうのじゃなくて！見た訳じゃないんですよ！？」

「まあ、見ては無いけど……」

「言っとくけどね！世の中の女子には自分の事を『僕』とか『男』って言っちゃう子が五万といえるのよ！特にあれくらいの年頃の子は！」

「いや、でも、確かに……」

「絶対対女の子に決まってるでしょ！あんな可愛い男子が存在してたまるか！」

へこんだかと思いきや、リーダーは突然いきりだし、『白は女』と決めつけて先に行ってしまった。

尻をプリプリさせて、橋の欄干を蹴っ飛ばしながら進むリーダーの後ろ姿を、俺はただ呆然と見つめて立ち尽くした。

「……サスケエ」

「……ハイ」

隣に立っていたナルトさんが、いつになく鋭い目で俺を睨んでいる。

「……野暮な事は、言うもんじゃねえんだってば！」

「……すみませんでした」

何となく謝ってしまった。

その後、カカシ上忍にも手伝ってもらって3人がかりでリーダーの機嫌を直し、再び4人一緒に木の葉へと進み出す。
来た時よりも周りの風景がよく見えるのは、霧が晴れたからなのか、任務を達成したからなのか。

帰り道は色々な事を4人で話しながら帰った。そして話題はカカシ上忍のプライベートの話に。

この話を切り出したのはリーダーだった。女子だからね。

「先生は、結婚してるんですか？」

リーダーが直球で切り込む。

カカシ上忍の結婚は俺達も気になる所であり、悪い思いながらもナルトさんと一楽のラーメンを賭けている。

俺はもちろん、未婚に賭けた。出来レースなのさ、こんな賭け。

こっそりした大盛のラーメンを思い浮かべながら、カカシ上忍の答

えを待つ。まあ、わかりきった事なんだけどね。

「結婚？してるよ。フツーに」

「ええええ！マジかよ！」

カカシ上忍が普通に結婚していた事を知って、思わず絶叫してしまった。ナルトさんは隣で『わかった事なんだけどね』っていう顔をしている。なぜだ。

「子供はいないけどね。ところでサスケ、なぜそんなに驚く」

「えっ！？結婚してるんですか？どんな感じの人ですか？年上？年下？何してた人なんですか！？」

リーダーが質問攻めをする。里の繁華街でこんな感じの女性を見た事があるぞ。

カカシ上忍は頭を掻きながら、恥ずかしそうに話し始めた。

「俺がアカデミーを卒業した後にスリーマンセルを組んでた子だよ。今は引退してるけど、医療忍術が得意だったな。ま、幼なじみってやつだな」

「すごーい！忍者同士でしかも幼なじみと結婚なんてロマンチックですねー！今度家に行っていていいですか？」

盛り上がってきたリーダーは、カカシ上忍の家庭について突っ込んだ内容の質問攻めを開始した。

俺は絶対に結婚できないだろうと思っていただけに、かなりの衝撃を受けた。

信じられるかい？ 昼間からエロ小説を普通に読んでる変態なんだぜ？

「……いただき！」

隣で歩いているナルトさんは特に驚いた様子もなく、平然としている。

「ナルトさん……知ってたんですか？」

ナルトさんはニヤリと笑うと、語り始めた。

「……サスケ、俺はカカシ先生の普段の言動をつぶさに観察して推測したんだってば。一つ一つのピースを集めて組み合わせていけば、おのずと答えは導き出されるんだってばよ！」

俺はナルトさんが何を言っているのかさっぱりわからなかった。

木の葉の里は、もう近い。

一楽のおいしそうなラーメンの匂いが、脳裏に蘇った。

鬼人と白

「白よ、あの小僧とは顔見知りだったのか？」

「ハイ、斬不斬さんが寝込んでる時に薬草を採りに行ってたんです。」

その時にバツタリ」

「そうか……白よ、今回のガトーの件、どうにもお前が一枚噛んで
いるような気がしてならんのだが」

「そんな事ないですよ」

「そうか……」

「ハイ」

「……………ガトーの奴、かなり貯め込んでいやがったな」

「そうですね。これだけあれば、当分は困りません。これをタネ銭
に何か事業を始める手もありますよ!」

「そうか……」

「それより、次はどちらへ行かれます?」

「そうだな、お前の故郷を見てみたいかもな。お前を迫害していた
奴らを逆迫害しに行こうか」

「そうですね。それもいいですが、僕の故郷の冬はかなり厳しいで
すよ。斬不斬さん、寒いのがダメでしたよね? 季節を考えて南に行く
のがよろしいかと」

「そうか……………白よ、重いだろう、持ってやろうか?」

「何言ってますか! 子供扱いしないで下さいとあれほど言ったじ

やないですか！それに僕は斬不斬さんの『道具』なんですよ！その
辺のどこ、自覚して下さい！」

「……………そうか」

「あっ！『道具』なのに言いすぎました！すみません…………でも、こ
んな『道具』でもよろしかったら、どこまでもお供しますよ！」

「そうかあ…………」

火影様

波の国での任務も終わり、第7班は里で平和な日常を過ごしていた。平和と言っても任務と修行に明け暮れる毎日なので、生傷等は絶えない。

そんなある日の休日、釣りをしようと池まで歩いていたらキバと出くわした。ワンコの散歩をしているようだった。

「よう！サスケ」

「久しぶりだな、キバ」

波の国から帰ってきてからは、お互い忙しい身であったので本当に久しぶりだった。それから、最近の紅先生の話題でしばし盛り上がる。

「……ホントだって！赤丸が下から見たって言ってるぞ！」

「犬は色がわかんねえって」

「あっ！それはそうとサスケ、お前んところは受けねえのか？中忍試験」

「えっ？受けるの？」

中忍試験。

名前こそ聞いた事があったが、その内容までは知らなかった。第一、どうやって試験を受けるのかも今まで謎であったのだ。

キバが言うには中忍試験は小隊で受けるものであり、担当上忍の推薦があれば受験できるらしい。

我が担当上忍、カカシ上忍の口からはそんな話は聞いた事も無かった。

「……ぜんぜん、知らなかった」

「まあ、お前んとこの先生は変わってっからなく。言えばまだ間に合うんじゃない？」

「お、おう！ありがとな、キバ！」

キバと犬に別れを告げ、俺はナルトさんの家に向かって走った。

中忍昇格は正直どうでもいいんだけど、こういう話はナルトさんが黙ってはいないはずだ。

早く火影になりたいナルトさんにこの情報を伝えるため、全力で里の中を駆け抜けた。

「えっ？中忍試験、受けたいの？」

ナルトさんに中忍試験の事を教えた翌日。任務が始まる前にナルトさんがカカシ上忍に食ってかかっている所だ。

「言っとくけどね、中忍は小部隊の指揮官なんだよ。できると思うの？」

「やってみなきゃ、わかんねえんだってば！」

カカシ上忍は中忍試験を受けさせないつもりだったらしい。駄々をこねるナルトさんを見て、しばらく額に手を当てて考えたあと言った。

「じゃ、一回やってみる？ シュミレート中忍」

という事で始まったシュミレート中忍。

お題は『猪の駆除』今日の任務でやる予定だったやつだ。

シュミレート中忍とは一人が指揮官役となり、残りの三人が下忍役となって任務を遂行する。下忍役の人は、指揮官役の人が言った事しかやってはいけないという縛りつきだ。

さっそく、指揮官役にやりたがりのナルトさんがつき、カカシ上忍を含める三人が下忍役となってこのシュミレート中忍を開始する事になった。

ナルトさんは張り切って、今日の任務である『猪の駆除』に取り掛かる。

任務の結果は、目も当てられないほどグダグダなものになってしまった。

「中忍って意外と難しいだろ？……Cランク以上の任務だったら誰か死んでたかもな」

へこんでいるナルトさんに追い討ちをかけるようなカカシ上忍の言葉。

「ま、最初は絶対にできないよ。でも修行すればちゃんとできるようになるから」

第7班は今回の中忍試験は諦める事となった。悔しそうにしている

ナルトさんにカカシ上忍が言葉をかける。

「だいたい生き急ぎすぎなんだよキミたち。下忍と言ってもまだ子供なんだからさ。今は下手に中忍になるよりも、実力をつける時期でしょ」

「……………」

「若くして上忍になっちゃう人もいるんだけど、あんなのは個人の力に頼りすぎなんだよね……失ってから気付くのは、遅すぎる」
それからカカシ上忍の過去の話が始まった。

戦争、過信、親友の死。

カカシ上忍は斜めにかぶっている額当てを取り、俺達に失った親友の目を見せた。

「……今も夢で目が覚める事がある。正直、辛いぞ」

誰も喋る事なく、カカシ上忍の話を聞いていた。

ナルトさんは真剣な眼差しで、リーダーは目に涙を溜めている。

「同期に先を行かれる気持ちはわからんでもないが、我慢してくれ。今は実力をつける時期だ……同じ思いは、させたくない」

ナルトさんは何も言わなかった。

カカシ上忍が俺達に見せた目は、うちは一族の中でも一部の人間だけが持つ事ができると言われる、写輪眼だった。親友の名前までは言わなかったが、うちは一族の人間だったんだろう。親友の死と引き換えに気付くというのは、確かに遅すぎる。俺の場合なら、アカデミーの同級生達、リーダー、そしてナルトさん。例えばそれが一族

の復興と引き換えにするとしても、俺には考えられないし、そんな事を考えたくもなかった。

「ま、今は受けないってだけで、実力がついたらすぐにでも受けさせるよ……ナルトも『火影の道に近道は無い』って言ってただろ」

カカシ上忍はそう言うのとナルトさんの頭に手を置いた。

『火影の道に近道は無い』

ナルトさんもたまにはまともな事を言うようだ。でも、誰に言ったんだろう？

「でも、そろそろ始めてもいい頃だと思ってたんだ。次から行う任務は全て『シュミレート中忍』で行くぞ。全員、できるようになってもらうからな！」

カカシ上忍の号令のもと、第7班は『シュミレート中忍』しながら任務をこなして行く事になった。指揮官役は任務毎に交代しながらやっていく。

実際に何回かやってみて思ったのは、やはり人の上に立つのは難しいという事だった。『ガラじゃないんだよね』って言いたい所なんだけど、そういう訳にもいかない。忍者として、これも避けては通れない道。

第7班は『シュミレート中忍』をやった後は自然と一衆に集合して反省会が開かれるようになっていた。

『ダメ出し』という、とても建設的な意見をリーダーが毎回発表してくれる。

言うだけあって、リーダーの指揮官役ぶりは抜群に上手かった。ちなみにナルトさんは典型的な考無しタイプで、俺は想定外だとテンパるタイプだ。

いつもその事を指摘されるんだけど、なかなか治らない。

それでも、少しずつかもしれないけど上手くなっているんだと思う。リーダーの要求が日に日に高くなっていくからだ。

そんな感じで第7班は中忍試験に参加しないで、いつもの日常に戻った。

修行と任務の日々だ。

厳しいと思う日もあるけれど、充実感みたいなのは得られている。

この第7班の日常は、とても居心地が良かった。

ぶっちゃけ、居心地が良すぎて『兄ちゃん』の事を忘れかけていた程だ。

そんな居心地の良いある日の夜、俺は火影様に呼ばれた。

「うちはサスケ、じゃな？」

「……ハイ」

いつものように任務を終えて、一樂でみんなとラーメン食って家に帰ったら、玄闕に見知らぬ男が立っていた。

『どなたです』と近づいたらお面を被っている忍者だった。お面と言えば、暗部の人だ。

その暗部忍者に『火急の用がある』と火影邸まで連れてこられたのだ。

「……夜分、突然の事ですまんの」

「……いえ」

目の前には火影様と、俺を連れてきた暗部の忍者。

火影様は昼間に里をぶらついているので初めて見た訳では無いんだけど、いつもの好々翁といった感じではなかった。

『辛酸を舐めつくした』なんて表現がピッタリな、そんな雰囲気をしている。

「……お主に重大な事を言わねばならん。心して、聞いてくれ」

「……何でしょうか」

老人とは思えない鋭い眼光で見据えられ、自然と張り詰めた空気になる。

俺の背筋は自然と伸びた。

「お主の兄『うちはイタチ』が里の近くまで来ているという情報があった」

「!!」

驚きのあまり声も出なかった。

兄ちゃんが里に来ている。

あの事件以来、ぼやけていた兄ちゃんの顔がはつきりと脳裏に蘇った。

「どこにいますか!」

俺は火影様に詰め寄ったが、側にいた暗部が間に入って制される。

「教えて下さい！どこに！」

「落ち着け、サスケ」

一族を虐殺した兄ちゃん。

近くにいると聞いて、落ち着いてなんかいらなかった。

しかし、俺を抑えている暗部の力は強く、それより前には出られなかった。

そんな俺を見ながら、火影様は静かに言葉を続ける。

「今からわしの言う事は、うちはイタチの弟であるお主にしかできない事じゃ」

「……………」

「…………イタチの元に向かい、里に戻るよう説得してもらいたい」

鋭い眼光を放ちながら、火影様は俺に用件を言った。

「一族を殺したんだ！戻る訳ないだろ！」

自然とそんな言葉が口から出ていた。

兄ちゃんは、父さんをはじめ俺以外の全員を殺した。里に戻る訳がない。

「…………お主は、イタチを殺したいか？」

「…………！」

一族を虐殺した兄ちゃんの事を憎くないと言えば嘘になるが、殺したい程憎いのかは、今の俺には正直わからなかった。実際に兄ちゃんと会ってみないければわからないって感じた。

なぜあんな事をしたのか。

なぜ俺だけ生かしたのか。

本当に『兄ちゃん』なのか。

そんな考えが頭の中でぐるぐる廻る。

「……イタチは、里の人間、このまま野放しにする事はできぬ。里に近付いている今、説得はできぬまでも拘束しなければならんのだ
や」

いつの間にか俺を抑えつけていた暗部の拘束が解かれた事に気付く。
俺は前に出る事なく、そのまま火影様の言葉に耳を傾けた。

「他の者にやらせようにも、イタチは知っての通り写輪眼の遣い手。
下手に行けば返り討ちにされるのは目に見えておる」

「なぜイタチの事を、俺に……」

「唯一残した弟であるお主が行けば、あやつも下手には動くまい。
辛い任務だが、行ってくれるか」

「……行かせて下さい」

説得も拘束もできる自信なんて無かった。ただ、兄ちゃんに会って色々と直接聞きたい事があった。
行くなと言われても、行くつもりでいた。

「まだ若い忍であるお主に頼りきりになってしまい、すまんの……」

火影様はそう言うと言わくから巻物を取り出し、俺に手渡した。

「もしも説得に失敗したり、万が一にも身の危険を感じたらすぐにその巻物を開け。ワシが選りすぐった暗部が何人か出てくるようになっておる……無茶のある任務だが、お主の命は里で守らせてくれ」

「……場所は、どこです」

「終末の谷じゃ。サスケよ、すぐに出立してくれい」

巻物を受け取り、俺は何も言わずに火影邸を出た。

辺りは日も落ちて夜の景色となっていた。

あの日の夜と同じように、満月が不気味なくらい明るく光っている。

俺は終末の谷に向かって、駆け出した。

「……本当に、よろしかったので？」

サスケが部屋から出ていき、火影と暗部の2人だけとなった。火影は窓から駆けていったサスケの様子を見ている。

「こうするしか、無かった」

火影は質問した暗部ではなく、自分に言い聞かせるように呟く。

「うちの血は、木の葉には重すぎた」

サスケの姿はもはや見えなくなっていたが、その視線は終末の谷へと向けられている。

「……イタチとの約束を反古にする結果になります」

「あやつも若いが、病を患っておる。長くはない……」

最後に見たイタチの顔には死相が見えた。

幾人もの死んでいった忍が火影に見せたものと同じ相だった。

火影は長年の経験により人の相を敏感に見分ける事ができるようになっていた。

「わしは火影だ。里を守らねばならん」

さらに小さな声で火影は呟く。

「……初代様、先代様、申し訳ありません。『うち』はやはり、木の葉には……」

窓ガラスに映った火影の顔は、昼間に見せている里の人間を慈しみ愛する長の顔はしていなかった。

火影は幼い頃から里のエリートと呼ばれる『うちは一族』を知っている。里の財産とも言えるほど大きな戦力を持った一族ではあったが、その眼には狂気を宿している両刃の刃でもあった。火影はその力と狂気を昔から、肌で感じとっていた。

サスケという、忍者として凡庸に見えた少年でさえも、波の国での任務ではそれなりに活躍したという情報もある。一族の象徴ともいえる写輪眼こそ開眼してはいないが、眼から入る幻術を駆使している。凡庸だから安全だと決めつけて、危険分子を持つ一族の少年を成長させる事はできなかった。

生き残りという事で判断を決めかねていたが、波の国の任務報告を受けた時、火影は里の長として決断していた。

「……手はず通り決行する。暗部を集め、準備にとりかかってくれ」

「……ハッ！」

聞こえる声で火影が言うと、暗部は部屋から姿を消した。

残った火影の目は、谷の方へと向いている。

その目に見えているのは、若い忍の死相だろうか。
窓ガラスに映っている己の死相だろうか。

里抜け

終末の谷を目指し、一目散に里を駆け抜けた。

「どこに行くんだってばよ！」

後ろからはナルトさんがついてきている。

里の大門から出る場合、どうしても一樂の前を通る事になる。全力で疾走している姿を、たまたまラーメンを食っていたナルトさんに目撃されたのだ。

後方からナルトさんの叫び声が聞こえる。

俺はシカトを決めて走り続けていたが、門を出てからしばらくたつと横に並ばれた。基本的にナルトさんの方が足が速いのだ。

「家に行ってもいいねえし、仕方なくラーメン食ってたけど……お前、何か変だぞ！」

横に並んだナルトさんが話しかけてくる。振り切ろうにもナルトさんは体力があるのでかなわない。

俺は結構全力で走ってるんだけど、ナルトさんはまだ余裕そうだった。

横に並んで走っているナルトさんは、心配そうな顔をして俺を見ている。

仕方なく訳を話す事にした。

「兄ちゃんが、来てるんです」

「兄ちゃんて、もしかしてお前んちの……」

「兄ちゃんの事は、俺の、一族の、問題です。ナルトさんは、来ないで下さい！」

走りながらなので喋るのが辛い。平然としているナルトさんは、やはりモノが違うんだと実感する。

「てめえ、サスケ！同じ班の仲間なんじゃねえのかってばよ！」

何をするにしても、何だかんだでナルトさんとはずっと一緒だった。『来るな』と言ったから逆上してしまったようだ。今にも掴みかかってくるような勢いでいる。

一緒に来てくれるのなら、心強いと思った。でも、この話だけは、別の話なんだ。

「ナルトさん、ホントの事を、言います。俺の、目を見て、聞いて下さい」

「……………」

ナルトさんの真っ直ぐな視線が俺に向けられ、目と目が合う。

やる事はひとつ。

幻術！

「っ！……てめえ、サスケエ」

幻術は素直な人ほどかかりやすい。特に目から入る幻術は。ちょうど木と木の間を飛び移っている時にかけたので、体が痺れた

ナルトさんは地上に落下していった。

結構な高さだったけど、ナルトさんなら多分大丈夫だろう。場所を考えた方が良かったかもしれないが、俺の体力がそれを許さなかった。

「俺は……の……兄弟……ってんだぞ！」

痺れているはずのナルトさんが何か叫んでいる。

振り返ると、うつ伏せに倒れて顔だけは俺の方に向いていた。

「……すみません」

絶対に聞こえる距離ではないんだけど、ナルトさんに謝った。

後でちゃんと理由を話そう。わかってもらえるはずだ、きっと。

終末の谷までもうすぐだ。

俺は兄ちゃんが居る場所を目指して走った。

終末の谷は、火の国の国境に近い場所だ。

その昔、二人の里の忍者がこの地で決別したらしい。歴史の授業で習ったような気がするが、よく寝ていたのであまり覚えていない。

谷に到着したら兄ちゃんが居ると思っていたが、そこに兄ちゃんらしき姿は無く、変わりにカカシ上忍の姿があった。珍しく本は読んでいないようだ。

「カカシ上忍！なんで、ここに」

「……サスケ」

偶然にしてはおかしい。

でも、まずは兄ちゃんを見つける事が先決だと思い、それらしい姿を見ていないか聞き出そうと近寄った。

「兄ちゃんが来ているらしいんです！見てないですか！」

「サスケ、今から俺の言う事をしっかりと聞くんだ」

カカシ上忍の目はいつもの死んだ魚のような目をしていなかった。
真剣な目だ。

俺は荒れていた息を整えながら、カカシ上忍の言葉を待った。

「……里を抜けろ、サスケ」

「ハア！？」

何を言ってるのか、さっぱりわからなかった。

ズレているとは思っていたけど、このタイミングだと流石に腹がたってくる。

「何言ってるんすか！笑えませんか！」

「冗談じゃあ無い。お前は里から命を狙われている」

「ハア！！？」

『サスケはのんき』と母さんによく言われていた。確かに、俺はあまり怒ったりはしない方だ。だが、ここまで訳の解らない事を言われたら、殺意すら覚えてしまう。

「俺はさつき火影様と会って来たんすよ！意味がわからん！」

「イタチは来ない。お前をここに連れ出す嘘だ」

「えっ？」

「そして、お前をここで殺すのが、俺の任務だ」

「――！」

本当に訳が解らなくなってきた。

何で俺が里に狙われなくちゃいけないんだ？ 思いあたるような事は何も無い。

混乱している最中にも、カカシ上忍の言葉は続く。

「時間が無い、早く抜けろ。じきに暗部も来るぞ」

「……訳、わかんねえよ」

「サスケ！」

「訳わかんねえつつつてんだろ！」

幻術かもしれない。

一人幻術をしている時、ごくたまに混乱してこういう気分になる事

がある。

火影様は最後に『お主の命は里が守る』と言われた。その証拠の巻物も、懐に入っている。

何で命を狙われなくちゃいけないんだ。

そうだ、きっとこれは幻術か何かだ。

目の前にいるカカシ上忍も、本当は『兄ちゃん』で、俺を幻術にかけておちよくってるんだ。あの日みたいにな……絶対、幻術だ。

俺は印を結び、『兄ちゃん』に幻術を仕掛けた。

『兄ちゃん』は俺の幻術にはまり、ストーンと地面に座り込む。

ホラ見ろ、やっぱり幻術だ。本物の『兄ちゃん』なら、こんな術にはまる訳が無い。

そう思って再び『兄ちゃん』の姿を探そうとしたら、目の前が急に暗くなった。

「……幻術、上手くなったな。サスケ」

真っ暗闇の中、どこからかそんな言葉が聞こえた。

それは『兄ちゃん』ではなく、カカシ上忍の声だった。

——サスケ、すまん。俺は結局、何もしてやれなかった。

倒れている教え子を、カカシは申し訳なさそうな顔をして見ている。手にはクナイが握られていた。

——忍の世界は、こういう世界なんだ。

凡人とも言える教え子は、『うちは一族』であるが為に、その血を嫌う里から警戒され、後の禍根を断つために始末されようとしていた。

里の揉め事を中心にいたのは、いつも『うちは』

その血に流れる先祖達の記憶がそうさせるのだろうか。

――だが、『うちは』は俺の恩人。

里の命に背く事になるが、絶対に殺せん！……仲間、ましてや教え子を見捨てるような奴はクズ！……ですよね、先生。

カカシは印を結び、二体の影分身を作り出す。一体は変化して、どこぞの里の忍者の姿に変わる。そしてカカシ本人は、長髪の黒髪、蛇のような目をした男に姿を変えた。かつて里の三忍と呼ばれた者の一人、今は里を抜けお尋ね者となっている大蛇丸という忍の姿に。忍者の姿になった分身はサスケを担ぎ上げ、谷の方へと消えて行く。残っているもう一人の分身は、斜めに付けている額当てをずらした。

――上手くいくか分らんが、里を相手に一芝居打ってやる……オビト！お前が俺にくれた『車輪眼』のコピー忍術、今こそ存分に使わせてもらおうぞ！

カカシと大蛇丸はお互いに距離を取り合い、クナイを構え対峙する。そして、気絶したサスケから抜き取った巻物を開いた。

俺は夢を見ていた。あの日の夢だ。

たまにこの夢を見る事があるんだけど、今日のは少しいつもと違った。

いつもは玄関を駆け上がって、倒れている父さんと母さんの姿。そして後ろを向いている兄ちゃん。兄ちゃんが振り返るんだけど、顔には黒いモヤみたいなのがかかっていて見えない。いつもならここで目が覚めて終わり。

でも今日のは続きがあった。

振り返った兄ちゃんに黒いモヤはかかっておらず、ハッキリと顔を見る事ができた。

今までは思い出そうとしてもなぜか思い出せなかっただけに、久々に兄ちゃんの顔を見たような気がする。

そして、兄ちゃんは泣いていた。

『許せ、サスケ』

兄ちゃんは泣きながら、ハッキリとこう言った。

『何でこんな事したんだよ！』

『何が、許せ、だ！許せるか！』

『何で泣いてんだよ！』

聞きたい事は他にもいっぱいあった。でも言葉が口から出てこなかった。幻術にかけられた訳でもないのに、体も動かない。

兄ちゃんはずっと俺の方を見たまま、泣いていた。

そして、夢は終わった。

「よう、また会ったな、サスケ」

「……ナルト、さん？」

夢から目を覚ますと、ナルトさんが隣に座っていた。辺りを見回せば、岩に囲われていて洞窟のような感じだった。月が明るく光が差し込んでいたので、そこまで暗いとは思わない。

「兄ちゃん！いや、カカシ上忍は！？」

カカシ上忍に幻術をかけてから記憶が無い。思わずナルトさんに聞いてしまった。

「……話は、カカシ上忍に聞いたんだってばよ」

ポツリポツリとナルトさんが語り始めた。

あの後、自力で幻術を解いたナルトさんは再び俺を追った。谷のところまで来たら、カカシ上忍と暗部達がオカミみたいな奴と戦っているのを目撃する。オカミはべらぼうに強く、カカシ上忍や暗部達をもものもしなかったらしい。ナルトさんも参戦するも、俺の事が気かりなので何体かの影分身に搜索をさせた。そしてそのうちの一体が、奇跡的に俺を担いでいる忍者を発見。すぐに奪還しようとしたら、その忍者はなんとカカシ上忍。ここに辿り着くまでの間に、カカシ上忍から真実を聞いた、と。

そうか、俺はやっぱ、狙われてたんだ……

「今、カカシ上忍は？」

「ここに着いたら『本体のチャクラがやべえ！』って言って、消えちまったんだってだよ」

強いオカマとはカカシ上忍の変化だった。

「……………先生は、今もまだ、戦っているんで？」

「いや、終わったってだよ」

この騒ぎを聞きつけた火影様から作戦の中止令が出たそうだ。最後まで戦い続けたオカマことカカシ上忍は、何とか逃げ切ったものの精も根も尽き果ててしまい、病院送りとなってしまった。今は本体のナルトさんが付き添っている。上手く人目を盗んで影分身と合流できたから良かったものの、後少し戦いが長引いていたら本当に危なかったらしい。

作戦は中止となったが、俺が里から始末されようとしている事に変わりはない。

幻術で眠らされてしまったせいかな、さっきまでのように興奮もしていない。どこか他人ごとのように『俺、里から狙われてんだ』とぼんやり考えていた。

「…………ナルトさんになら、殺されてもいいかな」

興奮は冷めたといっても、少し自暴自棄な感じになっていた。

なんかもう『どうでもいいや』って考えている自分がいる。その考えが自然と口から漏れていた。

「馬鹿かてめえ！」

その直後、ナルトさんから思いっきり後頭部を叩かれた。目の前に星が飛ぶ。

「仲間だって何回言えばわかるんだってば！この野郎！」

そしてまた後頭部を叩かれる。洞窟内にその音が響き渡った。

「俺はもう、里から……」

「カカシ先生にもお前を逃がしてやれって頼まれてんだってばよ！……誰がするかよ、そんな事！」

最後にもう一発、後頭部を叩かれた。

いいかげん同じ所を叩き続けられると頭がおかしくなりそうなので、ナルトさんの方に向き直る。ナルトさんは真剣な表情で、真っ直ぐに俺を見ていた。なぜだか俺は、ナルトさんを直視する事ができない。

下を向くとまた叩かれそうなので、岩だらけの天井を見上げる。

後頭部を叩かれる事は無くなったが、会話も無くなった。外から野犬の遠吠えが聞こえる。

「……拔ける、サスケ」

そんな言葉が聞こえ、視線を天井からナルトさんに移すと、ナルトさんは俯き加減に下を向いていた。

月の光で明るいといっても、ここは洞窟の内。下に向けられたその表情まではわからなかったが、俺もよく知っている『とても悲しい

顔』をしているように見えた。

「……俺、もう、里には戻れねえのかな」

俺も同じように下を向いた。

人前では絶対に見せまいと誓っていたが、今日は無理だ。

どれくらいそのままの状態が続いたんだろうか。しばらく俺達は何も言わないまま、俯き続けた。

ふと視線を上げると、ナルトさんと目が合う。外からは風で揺れる木々の音が聞こえてくる。

相変わらずナルトさんは真っ直ぐな目をしている。その視線は俺の苦手な同情といったものでは無かった。

そんな真っ直ぐなナルトさんの目を見て、俺は決断した。

「……行きます」

「……すまねえ、サスケ」

「……………ナルトさんが、謝る事じゃ、ないです」

「……………知ってるってば」

「この野郎」

目を合わせたまま会話が続く。強がって冗談を飛ばすナルトさん。俺とナルトさんの口元がわずかに上がった。

立ち上がって洞窟の外に出た。ただでさえ明るい月の光が、外に出ると余計に際立つ。夜とは思えない程、周りの木や草がはっきりと

見えた。

里じゃない方向に足を進めようとしても、足が動かない。
また会話の無いまま、その場に立ち尽くしてしまう。棒立ちになっ
ている俺を嘲笑うかのように、風が木の枝を揺らしている。

「サスケ！」

足がなかなか動かない俺の前に、ナルトさんが来た。そして、ナル
トさんは手を前に出してきた。

その出された手は握手を求める手ではなく、中指と人差し指だけ。
これは、木の葉に伝わる有名な印だ。

俺もその手に、同じ印を重ねる。

重ねた後、ナルトさんは印をそのままにして胸前に手を動かした。

「順番、逆っすよね、コレ」

俺も同じように胸前に手を動かす。

「ナルトさん」

「……」

「『火影』の夢、何があっても諦めないで下さいよ」

「えっ？」

「ナルトさんが火影にならないと、俺、里に戻れませんから」

「……サスケ」

決別の印を結んだまま、俺は笑った。これは、俺の悲しい顔だ。

俺が笑うとナルトさんは印を解き、両手を頭の後ろに組み『ニシシ』と笑った。二人でイタズラをしたりふざけあったりした時に見せる笑顔。これは、ナルトさんの悲しい顔だ。

そして、影分身だったナルトさんは音をたてて消えた。

「……また、会えるといいな……ってばよ」

足が前に進む。

俺はナルトさんが立っていた場所に重なり、里の方を見て親友の口癖をマネしながら一人言を呟いた。

これからどこに行けばいいんだろう。

季節を考えたら南だけど、こういう時は北だ。

北へ行こう。

北の方に……

もっと、遠くに……

里を抜けた夜、不謹慎と思えるほど月が明るかった。

どこに行けばいいのか、どこまで逃げればいいのか見当がつかない。

俺は北の方へ歩き続けた。

田の国

「右や、左の旦那様……あわれな乞食に、お恵みを……」

里を抜けた俺は北を目指し続け、田の国と呼ばれる土地まで来ていた。

そして今は、乞食に身をやつして物乞いをしている。

何も持たない状態で生きていくのは、大変だった。ここにくるまでの間にやつれ果て、飢えのあまりに盗みも働いた。

忍者の技を使えばもっと楽をできたのかもしれない。でも俺は使わなかった。

アカデミーを卒業した時に貰った額当ても外している。忍術を使つてはいけないうような気がしていた。

畑で野菜を盗み、農家に追いかけて回されるなんてしょっちゅうだった。行く土地土地でそういう事していると『変な乞食がいる』と有名になってしまい、その都度に北へ北へと移ってきている。そして、田の国という所まで来たという訳だ。

「右や左の……」

「おいっ！変な乞食がいつぞ！」

「またあいつだべか！オラッ！」

里抜けをしている身である為、人目につくような大通りには出られない。

今日も町の路地裏で物乞いしていると、地元の若者達に目ざとく発

見されて石を投げつけられる。若者と言っても、俺と同じ年齢くらいだ。

「あっ！乞食が逃げっぞ！」

「逃がすんでね！囲め！」

「乞食のくせに速えぞ！」

いつものように、俺は逃げる。こんなのは日常茶飯事だ。

隠しているとは言え、元は忍者。不信がられない程度に速力を落として路地裏を逃げる。

しばらく路地裏を駆け続けると、若者達の追ってくる姿が見えなくなった。

上手く撒けたと思いホッと一息をつき、路地の角を曲がった瞬間に肩に何かぶつかった。

「あぁん？痛えなこの野郎！」

若者達を撒いたので完全に油断していた。俺がぶつかったのは、地元のチンピラ集団の一味だった。ぶつかったチンピラ集団の一人が即座に蹴りを入れてくる。避ける間もなく蹴り飛ばされ、尻もちをついた。

「おうおうおう！兄いの服を汚しやがってこの乞食！野郎ども、少しい思い知らせてやれ！」

若頭みたいな人の号令により、瞬くまにチンピラ達に囲まれて袋叩

きにされる。

こんなのも、日常茶飯事。

「兄い！この汚え乞食、どうしやすか！？」

「この『猫殺しのベンゾウ』様の服を汚しやがって……腐れ乞食が！」

ぶつかった相手は『猫殺しのベンゾウ』という人らしい。何か忍者みたいな名前をしている。

ベンゾウは厳つい顔をした中年で、派手な色した浴衣を見事に着崩している。見るからに、歌舞いている人だ。

「……よく見りゃガキじゃねえか！これくらいで勘弁しといて、やんよ！」

その直後、チャクラを感じた。そして体が風に飛ばされるような強い衝撃を受け、地面に叩きつけられる。これは、風遁だ。

「兄いはな！元、砂隠れの中忍なんでい！覚えときゃがれこのすつとこどっこい！」

「……サブ、野暮な事は言うもんじゃねえぞ！……行くぜ、野郎ども……カァー、ペッ！」

チンピラのボスの正体は抜け忍の先輩だったとは。通りで忍者みたいな名前をしてると思った。

先輩はボロ雑巾のようになった俺に唾を吐き、若い衆を引き連れて再び路地裏を練り歩く。

通りすぎていくチンピラの何人かに、すれ違い様に蹴りを入れられた。

こんなのは……日常茶飯事。

でも、術まで食らうのは初めてだった。

久々に術をくらうと、効くなあ………そう言えば、昨日から何も食ってない……少し、疲れてきたな。

追いかけてきた若者達も、猫殺しの姿を見て蜘蛛の子を散らしたかのように去っていった。

俺は這いずりながら路地の隅に体を寄せる。少しだけ、ここで眠らせてもらおう………

「見つけたわ、猫殺しのベンゾウ。不用意に術を使うなんて、忍者失格ね」

「大蛇丸様、どうします？」

「どうするもこうするもないでしょ、カブト。せつかくの賞金首を見つけたんだから、お縄になってもらうに決まってんでしょ」

「……ですね」

田の国を拠点とする新興の里、音隠れ。その長である大蛇丸は、側近のカブトと国内を巡回パトロール中であつた。

悪意の塊とも言える大蛇丸がパトロールとは、どういう事であろうか。

理由は簡単。

新興の里、音隠れはまだ立ち上がりの段階であり、国からの信頼も薄いので任務がなかなか入ってこない。故に、音影自ら国内を巡回などして国や地域住民から信任を得なければ、音の里の忍者達を養っていく事はできないのだ。

田の国はその名が表す通り土地の殆どが田んぼであるため、食うには困らない。新興の里にありがちな資金不足と人手不足に苦しんでいる。

大蛇丸は、忍者を極めるため永遠の命を得る、という物騒な野望を持っている。

その野望を成し遂げる為の第一歩が音隠れの創設であり、里を維持すべく今日も国内を巡回していた。

そして、幸運にも賞金首を発見した訳である。

「あぁん！？何だてめえは！」

チンピラ集団の前に姿を表した大蛇丸とカブトに、サブと呼ばれる男がつつかかる。

「おうおうおう！ベンゾウ兄いの行くてを阻もうってか！野郎ども、ひんむいちまえ！」

完全に言いがかりである。

サブの声とともにチンピラ達は一斉に大蛇丸に襲いかかるが、かなう訳もなくあつという間に蹴散らかされた。

「てめえこの野郎！兄い！頼んまずぜ！」

猫殺しはおもむろに風遁の印を結ぶ。

そして、かなう訳もなくあつという間に蹴散らかされた。

「あ、兄iiiiiii!!」

絶叫しているサブと呼ばれる男をよそに、カブトは伸びている猫殺しを手際よく縛にする。

「……カブト」

「終わりました。大蛇丸様」

「……私は、伝説の三忍、大蛇丸よね」

「……今は耐える時です。大蛇丸様」

「兄iiiiiii!!」

カブトはボスを失って動揺しているサブも手際よく縛にすると、先程袋叩きにされていた乞食に目をやる。

路肩で倒れている乞食は、見ればまだ若いようだった。

そして、メガネをクイツとやりながら、乞食の方に歩み寄る。

「……フン、元医療忍者の血が騒ぐのね」

「ええ、すぐ終わりますから」

カブトは大蛇丸の腹心とも言える男であり、大蛇丸の野望を果たすべく悪事にも平気で手を染める冷酷な男である。

大蛇丸に忠誠を誓い、大蛇丸の為ならば我が身なんか惜しまない。故に『大蛇丸様が然るべき所に自首して脱獄すれば、資金問題は一発でカタがつくんじゃ……』なんて不忠義な事は考えていない。

狂信的とも言えるほどに大蛇丸に尽くす、忠義の男なのである。

そして、元医療忍者であるため罪の無い怪我人や病人には比較的優

しい。

カブトは気絶してるのか寝ているのか分からない乞食に医療忍術を施す。

「アレ？この子、確か……」

傷が癒えた乞食の顔は、どこかで見た顔であった。

人からは頭脳明晰と謳われるその脳みそをしばしフル回転させると、すぐに答えは出てきた。どこかで見た顔とは、木の葉で見た顔。そしてこの顔を持つ乞食は、紛れもなくあの一族の少年。

つい最近、里を抜けた……

「大蛇丸様、面白いものを見つけましたよ」

カブトの呼びかけに、大蛇丸が近寄ってくる。

「あら、この子、もしかして『うちは』？」

大蛇丸は乞食の顔を覗き込むと、気味の悪い笑みを浮かべた。

「ハイ、間違いありません。あの事件の生き残り、うちはサスケです」

大蛇丸は蛇が獲物を見つけた時のように、口から長い舌を出し入れしている。

「どうします？大蛇丸様」

「どうするもこうするもないわ、カブト。もちろん、拾っていくわ」

「しかしこの少年は里で見た限り、忍者としてパツとしないようにでした。とても大蛇丸様の体に相応しいとは思えませんが……」

「関係ないわ、そんな事」

大蛇丸は眠っているサスケを見て、さらに邪悪な笑みを浮かべる。腹心であるカブトも、大蛇丸がこの表情をした時は恐怖でしかなかった。

「なんてったって、私の音隠れは……」

大蛇丸の体から、今にも邪悪なチャクラが溢れだそうとしている。カブトは鳥肌が総身立ち、手の震えは隠しきれなかった。

「人手不足で猫の手も借りたいくらいなんだからねっ！」

「……耐える時です！ 大蛇丸様！」

サスケは音隠れの里へと連行された。

そして、田の国で幅を効かせていたチンピラ集団のボス『猫殺しのベンゾウ』と、その右腕である『サブ』は、二人揃って役所に突き出された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7545u/>

うちのは凡才～立志伝～

2011年11月4日09時23分発行